ISSN 2434-513X

東アジア日本学研究

第９号

Japanese Studies in East Asia

No.9

東アジア日本学研究学会

The Society of Japanese Studies in East Asia

2023 年 3 月 20 日発行

ポストコロナ時代における研究活動の更なる活性化に向けて

季節は裏切らない。確実に移り変る。今春もパンデミック収束の兆しに歩調を合わせたかのようにやってきた。学会誌編集委員会から第9号の巻頭言の執筆を依頼された2月の初旬、窓外は依然として冷たさが残るが、春は既に息吹き始めている。卯年が学会にとって「飛躍の年」になることを期待し胸膨らむ。

2022 年度の研究大会（9 月 10―11 日、日本大学）もコロナ感染症拡大の影響を受け、前回と同様、リモート形式の開催となったが、実行委員会の周到な準備と会員の皆さんの協力を得て成功裏に閉幕した。大会で予定していた公開シンポジウムと会員による研究発表は活発な雰囲気の中で順調に進められた。「ポストコロナ時代における日本学研究の展望」をテーマとしたシンポジウムでは、日本国立国語研究所の石黒圭教授、韓国仁川大学の辛銀真教授、鄭州大学の葛継勇教授がシンポジストを勤め、基調講演を行った。この度、お届けする第9号には寄稿論文 3 篇に 8 本の投稿論文を加えた計 11 編の論文が掲載された。研究成果を出来るだけ多くの読者と共有できれば幸いである。

パンデミックの長期化は研究活動に様々な形で重大かつ深刻な影響をもたらしてきた。とりわけ人的移動の制限は、海外調査、学会発表、相互交流等など研究活動の根幹を揺るがす事柄であるだけに、特に異なる国の研究者によって構成され営まれる国際学会にとっては致命的とさえいわれたほどだった。しかし、学会は生き残った。だけでなく、新コロナ感染症の拡大の危機から研究者が新たな遺産を受け取り、それを武器にしたこともまた事実である。例えば、リモートによる学会開催では、自国にいながら国際会議に参加できるし、渡航費も滞在費もかからない。時間も大幅に短縮できる。特に、大学院生など若い研究者にとっては国際的学術交流のハードルが低くなったとさえいえるかもしれない。懇親会や発表会場以外での人的交流、人脈作り、異国での文化の実体験など、かつての学会活動が備え持った機能を担うことはできないが、ポストコロナにおける学術研究の在り方に新たな一面を示唆したことは確実に言えよう。これからの学会運営にも欠かせない視点の一つである。

『東アジア日本学研究』は、発刊して以来、中国、日本、韓国の研究者を中心に多くの研究成果を発表してきた。出自の異なる研究者がそれぞれの学問的独自性を維持しつつ、言語、文化、社会、歴史、経済、教育を含めた幅広い領域を守備範囲とする学会に身を置き、異なる問題意識と研究方法に触れ、そしてその成果を共有できることは、本学会の強みである。2022 年 8 月、本学会は韓国日本語学会（盧姓鉉会長）と学術交流協定を締結し、次回の研究大会は両学会の共同主催で開催する運びとなった。本学会初の試みが専門を異にする研究者が一堂に集まって刺激し合い、新しい課題を見つけたり、国や専門の違いを越えて共同研究につながったりするきっかけとなれば幸いである。

東アジア日本学研究学会
会長　金龍哲

目 次

巻頭言　　金龍哲（東アジア日本学研究学会会長） …… 1

【寄稿論文】

石黒圭　　学習者はどのように日本語を学ぶのか
　　―ポストコロナ時代における日本語運用データの収集法― …… 5

辛銀眞　　ポストコロナ時代における韓国の日本学研究
　　―韓国日本語学会の展望論文を中心に― …… 21

葛継勇　　『日本霊異記』「捉雷縁」の比較文学的研究 …… 37

【論文】

橋本恵子　　計量テキスト分析による大隈重信の演説資料に関する一考察 …… 51

飯嶋美知子、五十嵐啓子　　特定技能1号での外食業への就業を希望する外国人の
　　ための教材開発の試み …… 61

羅菲凡　　移動を表す複合動詞「V1 出す」と「V1 出る」の前項動詞の特徴について … 71

陳泳姍　　「限定」を表すとりたて詞「ばかり」の意味分類と意味における曖昧性
　　―フォーカスの観点から― …… 81

于心・李東哲　　中国語を母語とする中上級日本語学習者の同形類義語の習得に
　　関する試験的研究…… 89

郝文文　　人間の動作を表すオノマトペについて ―「飲む」を例として― …… 99

張智超　　吉川英治『三国志』における曹操の人物像に関する比較研究
　　―「痴児」を主眼に― …… 109

周堂波・程暁慶　　文字から見た中国古代建築 ―後藤朝太郎の演説を中心に― …… 117

村下慣一　　日本学におけるエリアス学派の応用可能性とはなにか？
　　―過程的パースペクティブに基づく予備的考察― …… 125

崔旭　　東アジアの視点から見る日中学校保健教育の対比について …… 133

【研究ノート】

黄美蘭　　中国人元留学生の就職活動 ―中国で就職した場合― …… 143

学会役員 …… 153

学会動向　李東哲（東アジア日本学研究学会副会長） …… 154

会員消息　李東哲（東アジア日本学研究学会副会長） …… 155

東アジア日本学研究学会会則 …… 156
『東アジア日本学研究』投稿要領 …… 159
『東アジア日本学研究』執筆要領 …… 162
『東アジア日本学研究』査読要領 …… 163
編集後記 …… 165

学習者はどのように日本語を学ぶのか
—ポストコロナ時代における日本語運用データの収集法—

石黒 圭（国立国語研究所）

要旨

日本語教育の目的が学習者による日本語運用力の獲得にあり、日本語教育学の目的がその獲得を支援する日本語習得支援研究であると考えると、日本語教育学では、学習者が日本語という言語をどのように身につけていくのか、その習得過程を記述・分析する基礎資料、すなわち学習者コーパスの構築が必要になる。ところが、新型コロナウィルス感染症の世界的流行により、JFL 環境で学ぶ海外の学習者のもとを訪れての現地調査も、JSL 環境で学ぶ国内の留学生との対面調査も困難になってしまった。そこで、本稿では、現地調査や対面調査を行うかわりに、オンライン環境を活用して収集する作文コーパス、会話コーパス、ゼミ談話コーパスの収集法を紹介した。たとえコロナが終息したとしても、パンデミックの状況下で急速に発展したオンライン・コミュニケーションが今後衰退化することは考えにくく、むしろポストコロナ時代にあっては、オンライン・コミュニケーションにおける学習者の日本語運用のデータ蓄積が重要になる。その意味でも、本稿で示したようなオンライン環境を活用した調査法の試行錯誤と研究者間での情報共有が、日本語教育学の発展のカギとなると見込まれる。

キーワード：　オンライン・コミュニケーション、フィールドワーク、学習者コーパス、日本語運用力、第二言語習得

１．日本語教育学と学習者コーパス

1.1　日本語教育学と日本語教育関連

日本語教育学は道半ばである。日本語教育学という学問を存在しないとまで公言する人はまれであり、日本語教育にかんする学問の存在を否定する人は少数派であるかもしれない。しかし、「学」として日本語教育学の成立を認める社会的コンセンサスには乏しいように見える。事実、「日本語学・日本語教育」のように、「学」がつく学問とともに「学」のつかない形で併記されることは少なくない。

たとえば、2023 年度より適用される科学研究費助成事業「審査区分表」によると、「中

区分 2：文学、言語学およびその関連分野」の小区分は下記のとおりである。

表 1　「中区分 2：文学、言語学およびその関連分野」の小区分

02010	日本文学関連
02020	中国文学関連
02030	英文学および英語圏文学関連
02040	ヨーロッパ文学関連
02050	文学一般関連
02060	言語学関連
02070	日本語学関連
02080	英語学関連
02090	日本語教育関連
02100	外国語教育関連
02010	日本文学関連

これは、小区分として日本語教育の重要性が学術的コミュニティのなかで認められている一方、日本文学をはじめとする文学、日本語学をはじめとする言語学は「学」と称することが認められているものの、日本語教育をはじめとする言語教育学は「学」と称することは認められていない、あるいは少なくとも機は熟していないと見なされている一つの証左であると見ることができる。

日本語教育学という「学」が成立していると考えた場合でも、「日本語」を重視する立場と「教育」を重視する立場とがありうる。1962 年 6 月に「外国人のための日本語教育学会」という名称で発足した日本語教育学会は、70 年代から 80 年代にかけて、学習者から出される日本語についての疑問や、学習者が日本語で表現する過程で産出する誤用をきっかけに日本語にかんする構造的な記述が急速な深まりを見せた。西口（2012）は、学会誌『日本語教育』のこれまでの歩みを 3 期に分け、そのうちの 1990 年までの日本語教育学の草創・確立期を第 1 期と呼び、庵（2012）はその時期を「日本語学と日本語教育の蜜月期」（庵 2012:2）と呼んでいる。そのことからもわかるように、当時は日本語教育の研究は日本語の研究が中心であり、「日本語」を重視する面が強かったと考えられる。

一方、西口（2012）が第 2 期と呼ぶ、複数の分野が並行して進む時期を経て、2005 年以降の第 3 期に入ると、日本語教育学の確立が再び叫ばれるようになる。そこで中心となったのは、教室という日本語教育の現場を対象にする実践研究（市島 2009）であり、学習者の内面を対象にするビリーフ（阿部 2014）や学習動機（岡 2017）、学習不安（元田 2005）などの心理学的な研究や、学習者の声に耳を傾けるライフストーリー研究（三代 2014）などの社会学的な研究であった。こうした一連の多様化は、日本語教育研究の「教育」とし

ての側面に光を当て、学際的な広がりをもたらした半面、日本語教育学が何を扱う学問か、その焦点をあいまいにしてしまい、「日本語教育学」ではなく「日本語教育関連」となる現状を招いてしまった側面もある。

1.2　日本語教育学の基礎資料としての学習者コーパス

このように日本語教育学には、「日本語」を重視する立場と「教育」を重視する立場があるが、筆者の立場としては、日本語教育学の目的は、学習者が目標言語である日本語の運用力を獲得することの支援にあると考え、二つの立場の融合を目指す、学習者の日本語習得支援研究として位置づける。もちろん、多くの場合、日本語教育の教室活動を設計する教師の役割も重要ではあるが、日本語を自然に習得する者も独学で身につける者もあり、教師の存在は絶対的なものではない。日本語を学ぶ主体である学習者の日本語習得研究をその中心に置くのが、あるべき姿であると考える。

日本語教育学を学習者の日本語習得を支援する日本語習得支援研究として考える場合、学習者が日本語と初めて出逢ってから、日本語という言語をどのように身につけていくのか、その過程と向きあうことが必要になる。そのときの基礎資料として役に立つのが学習者コーパスである。学習者コーパスは、学習者が話したり書いたりした日本語を大量に収集してデータベース化した言語資料のことであり、学習者の日本語使用の実態を反映した記録である。日本語教育学が科学である以上、学習者が産出したデータを用いて客観的な分析手法に基づき研究を遂行する必要があり、学習者がどのように日本語を習得していくのかを分析するのに優れたデータベースとなる。

２．コロナ時代以前の学習者コーパス

2.1　コーパス以前のデータベース

日本語教育学が学習者の日本語運用を対象とする以上、コーパスという概念が普及する以前からコンピュータによる処理を前提としないデータベースが個人レベルで多数作られ、利用されていた。なかでも、寺村（1990）は日本語学の記述文法研究に大きな影響を与えたデータベースとして著名であり、国立国語研究所で冊子の pdf 版を公開しているためか、現在でも筆者のもとに問合せが来ることがある。日本語教育研究における初期の関心は、日本語を使う人ではなく、日本語そのものに偏っており、学習者が産出する誤用が日本語としてなぜ不自然なのかを考えることによって、日本語文法の諸現象を観察・分析するさいのヒントとして用いられていた。寺村（1990）は現代的な観点から見直してみても日本語研究への多様な示唆を与えてくれるものであるが、学習者の運用力の向上よりも、母語話者の運用力の基盤となる仕組みの解明に直結するもので、日本語教育学に貢献するものとしては、学習者コーパスの出現を待つ必要があった。

その後の学習者コーパスの展開のなかで、学習者という集団をひとくくりにすることへの教育上の課題が共有され、学習者一人ひとりの背景によって習得の仕方が変わるため、それに応じて教え方も変える必要があるという考え方が定着した。そのため、母語別、レベル別、タスク別という三つの観点が、学習者の日本語運用の実態や発達を解明するうえで重要な意味を持つようになり、それが学習者コーパスの設計にも反映されるようになった。以降では、母語別学習者コーパス、レベル別学習者コーパス、タスク別学習者コーパス、それぞれについて説明する。

2.2　母語別学習者コーパス

先に述べたとおり、記述文法の時代は、一人ひとりの学習者の背景にまで考えが及ぶことは少なく、学習者として一括されることが多かった。しかし、教育文法という考え方が浸透し（小林 2002、野田編 2005）、学習者の言語運用に関心が向けられるようになってくると、学習者の背景も視野に入るようになり、学習者の母語との関連で誤用が分析されるようになった。また、中間言語研究や対照言語研究の考え方が浸透し、母語でどのような言い方がなされるのかを示す、対訳を付すという発想も生まれた。

国立国語研究所（2009）では、学習者の書いた作文に加え、学習者自身の母語訳も加えた『作文対訳データベース』を公開している。宇佐美洋氏が中心となって収集したもので、収録されている作文は 1754 本であり、その内訳は国によってまちまちであるものの、収録先の国名は、オーストリア、ベルギー、中国、ブラジル、ドイツ、フィンランド、フランス、ハンガリー、インドネシア、インド、カンボジア、韓国、スリランカ、マレーシア、モンゴル、ポーランド、スロベニア、アメリカ、シンガポール、タイ、ベトナム、日本の計 22 ヶ国に及んでいる。

一方、話し言葉を中心としたコーパスでは、国立国語研究所（2020）の『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』、通称 I-JAS という学習者コーパスがよく知られている。迫田久美子氏が中心となって世界各地に赴いて収集したもので、統一的な基準に基づいて、12 言語 17 ヶ国 20 地域の 1000 名の学習者のデータを収集した大規模横断学習者コーパスである。調査課題のバリエーションが豊富である（6 種類 12 タスク）点に特徴があり、国内外の学習者の発話データを中心に、作文データも備えている。学習者のデータとは別に、日本語母語話者の 50 名のデータもあるため、学習者一般の特徴も分析できるほか、各言語 50 名以上の学習者のデータがあり、〇〇語母語話者の日本語の特徴を定量的に分析することが可能になっている。これによって、ある誤用や使用傾向が、学習者一般の特徴なのか、ある言語話者に特有なものなのかの判定が可能になった点で大きな進歩と言える。

2.3　レベル別学習者コーパス

母語という学習者の背景による広がりにくわえ、日本語をどのくらいの期間学習し、ど

こまで習熟しているかという日本語の習熟度による違いも日本語学習者の言語運用に大きな影響を及ぼすことは言うまでもない。現在の多くの学習者コーパスには、学習期間やテストの成績など、一人ひとりの学習者の日本語の習熟度のデータがつけられるようになっている。また、レベルごとにある程度の人数のデータを収集することで、レベル間の比較を容易にする工夫がなされている。

たとえば、鈴木智美氏らが中心となり、東京外国語大学留学生日本語教育センターが構築した『JLPTUFS 作文コーパス』は、異なるレベルの留学生を豊富に抱える外国語大学ならではの強みを生かし、55 の国・地域出身の、入門～初級、初級後半から初中級、初中級、中級前半、中級後半、上級前半、上級後半、超級の 8 レベルにわたる学習者の 1515 本の作文を収録している。これによって、学習者の日本語能力のレベルによってどのような作文を書くのかが詳しくわかるようになっている。

また、話し言葉では『KY コーパス』（鎌田・山内 1999）がよく知られている。『KY コーパス』は鎌田修氏と山内博之氏が中心となって構築した会話コーパスで、OPI（Oral Proficiency Interview）の手法が用いられており、熟達度による能力レベルが明示されている点に特徴がある。90 名分の会話データを文字化した言語資料であり、母語別に見ると、中国語、英語、韓国語がそれぞれ 30 名ずつ、OPI の判定結果別の内訳は、それぞれ初級 5 名、中級 10 名、上級 10 名、超級 5 名となっている。

ただし、レベル別コーパスを用いて学習者の言語習得の過程を明らかにしようとすると、限界が生じる。それは、異なるレベルの学習者は別人であるため、厳密な意味での比較は困難であるからである。その意味で、同一の学習者の発達過程を追跡するのが理想であるが、同一の学習者を何年にもわたり追跡調査を行うのは困難をきわめる。しかし、そうした研究も少数存在する。大学等の教育機関で組織的に行われた一定規模以上のものとしては、管見のかぎり、台湾東呉大学の『LARP@SCU 語料庫』（東呉大学 2007）、中国湖南大学の『湖南大学学習者中間言語コーパス』（杉村 2013）、中国北京師範大学の『北京日本語学習者縦断コーパス（B-JAS）』（国立国語研究所 2023 予定）の三つに限られる。この分野の先駆的な取り組みであり、37 名（最終的には 26 名）の学習者に 3 年半のあいだ、毎月作文と、作文についてのインタビューを行った『LARP@SCU 語料庫』、　日本語学科の中国語話者の日本語会話（計 7 回）と日本語作文（計 19 回）を 94 名分、やはり 3 年半のあいだ収集・構築した『湖南大学学習者中間言語コーパス』、いずれも貴重な学習者縦断コーパスであるが、ここでは筆者も収集に携わった B-JAS について紹介する。

『北京日本語学習者縦断コーパス（B-JAS）』は、日本語がゼロの段階で日本語学科に入学し、4 年間日本語を集中的に学んで卒業した北京師範大学の学部学生 17 名（うち 1 名のみ 1 年程度の既習歴）を対象に、8 回のインタビュー調査、および 11 回の作文調査を継続的に行い収集したものである。横断コーパスである I-JAS と組み合わせて分析することを想定しているため、調査は I-JAS に準拠して行っている。研究成果は林・徐・迫田監修（2023

予定）にまとめられ、2022 年度中にプロジェクトのサイトで収集したデータの公開を行う予定で準備を進めている。

2.4　タスク別学習者コーパス

学習者の日本語運用を考えるとき、単に日本語が上手であるという一般的な能力を考えるのでは不適切である。なぜなら、流暢に話せるが、まったく書けない学習者もいるし、読み書きは得意だが、会話は苦手という学習者もいるからである。大学院生には学術日本語能力が求められ、ビジネスパーソンにはビジネス・コミュニケーション能力が求められる。患者さんと日常的な会話をする一方、同僚とは専門的なやりとりが求められる看護師には複数の能力が必要とされ、子どもを学校に通わせ、地域のコミュニティで生活する保護者にはまた別の能力が必要となる。

学習者コーパスを収集するさいは、個人情報の保護や業務上の守秘義務などがあり、現実のコミュニケーションそのものを収録することは難しく、多くはタスクを指定することになる。タスク別の書き言葉コーパスとしてよく知られているのが、当時横浜国立大学に所属していた金澤裕之氏が中心となって収集した『YNU 書き言葉コーパス』（金澤編 2014）である。メールがもっとも多いが、メール以外でもレポート、新聞、広報誌などの媒体を想定し、説明、紹介、意見、依頼などを行う 12 種類のタスクが、日本語話者、韓国語話者、中国語話者各 30 名によって書かれており、計 1080 本の文章が収録されている。

また、金井勇人氏が中心となって収集を行った『JCK 作文コーパス』（金井 2017）は　日本語話者、中国語話者、韓国語話者各 20 名によって書かれ、説明文、意見文、歴史文という三つのタイプの作文計 180 本が収録されている。収録本数は少ないものの、それぞれの作文の長さが 2000 字以上と相対的に長く、文章の全体構成や展開構造を見るのに適したデータベースであり、石黒編（2017）はそうした特性を生かした研究成果をまとめたものである。

一方、話し言葉としては、2.2 の「母語別学習者コーパス」で見た I-JAS や、2.3 の「レベル別学習者コーパス」で見た B-JAS のタスクが比較的豊富である。30 分程度のインタビュアーとの会話にくわえ、二つの場面別ロールプレイ、二つの 4 コマ（5 コマ）漫画の説明、絵カードの説明などを含んでいる。しかし、タスク別学習者コーパスは、書き言葉、話し言葉ともにまだまだ不十分であり、今後、レジスターやジャンルを考慮しつつ、より広範囲のデータを収集していく必要があろう。

以上見てきたように、母語別、レベル別、タスク別という三つの観点から学習者コーパスの整備が進むことによって、学習者の日本語運用の実態を包括的に把握することが可能になりつつある。

３．ポストコロナ時代の学習者コーパス

3.1　オンラインというフィールド

日本語教育学を日本語習得支援研究として考え、そのために学習者が日本語を習得する過程を記録した学習者コーパスの構築が必須であると考えた場合、学習者の日本語の習得記録を収集する必要がある。そうした記録が可能となるのは、学習者が学ぶ空間としての教室をはじめとする日本語学習の現場である。その意味で、研究者は学習者のいるところに出かけていって学習記録を収集するフィールドワーカーであり、日本語教育学はフィールドワークとしての側面を持つ。しかし、新型コロナウィルス感染症の世界的流行により、他の諸分野と同様、フィールドワーク自体が困難になってしまった。これまで日本語教育学のフィールドワークの有力な現場の一つであり、筆者が深く関わってきた国内外の大学等の高等教育機関を考えてみても、従来のような学習者と研究者の対面によるフィールドワークの場は損なわれてしまったと言わざるをえない。

まず、日本国内の大学・大学院では、海外から日本への渡航が困難になってしまったため、留学生数は激減した。また、少なくなった留学生と対面して調査しようとしても、コロナの感染リスクがあるため、対面による調査は控えざるをえなくなった。また、海外の大学・大学院では、対面授業が一時的に中止され、オンライン授業に切り替わった地域も、コロナの感染状況に配慮しながら、可能なかぎり対面の授業を継続しようとした地域もあるが、いずれの場合でも、筆者のような国内にいる研究者が海外に渡航して学習データの収集をすることはできなくなった。また、海外の大学で教えている現場の研究者もネコの目のように方針が変わるコロナ対応に追われ、学習データの収集どころではないという現実が生じてしまい、学習者を対象とした日本語教育研究は事実上ストップするという研究の危機にさらされることとなった。

しかし、そうした厳しい環境のなかでも日本語教育研究者は学習者の記録を収集しつづける必要がある。国内外の学習者はけっして日本語学習をやめたわけではなく、変わりはてた環境のなかでも従来と変わることなく地道に日本語学習を継続しているからである。これはパンデミック下でもそうであったし、きたるポストコロナ時代にあっても変わらずに続く状況であろう。

今後私たちは、コロナが爪痕を残す環境のなかで生きていかなければならない。新型コロナウィルス感染症の流行が近い将来終息すれば、対面でのコミュニケーションもある程度回復するだろうが、いつ再流行するともかぎらない状況のなかで、私たちのコミュニケーションにおけるオンライン環境への依存は減ることはないと予想される。事実、私たちは対面の会議ができるような環境にあっても、移動時間を節約できるオンライン会議を選択するようになっており、対面での簡単な打ち合わせが必要な場合でも、記録の残るビジネスチャットツールを使う機会が増えている。そうしたオンライン化の時代の波に学習者

たちはすでに巻きこまれており、今後は一層激しさを増すだろう。しかし、オンライン・コミュニケーションには対面コミュニケーションとは異なる難しさが存在する。そのため、学習者が行うオンライン・コミュニケーションの実態を記録することで、学習者にとってのオンライン・コミュニケーションの困難点を明らかにし、そうした困難点に対応できる教材や教授法の開発が早急に求められている。そう考えると、新型コロナウィルス感染症の流行がなかなか終息しない状況だからからこそ、学習データの収集を一時的に休止してよいわけではなく、むしろ学習者が否応なく向きあっているオンライン・コミュニケーションの実態把握に邁進する必要がある。

そこで、以降では、筆者自身が新型コロナウィルス感染症の流行下で行ってきた、オンライン環境を活用した学習データ収集の実例と、そこでの試行錯誤を共有することで、今後の学習データ収集の一助とすることを目指したい。

3.2　オンラインで収集する作文コーパス

2.3「レベル別学習者コーパス」で述べたように、学習者一人ひとりを追いかける経年的なデータは、学習者の習得過程を知るうえで有力な手がかりとなる。しかし、経年的なデータの収集は手間も時間もかかるためデータの収集自体が難しく、そうした経年的な学習データは質の面でも量の面でも十分とは言えない現状がある。

そこで、筆者は、「海外縦断作文コーパスの構築に基づく文章産出能力の発達過程の実証的研究」というテーマで科研費の基盤研究(A)を取得し、中国の 7 大学、台湾の 2 大学、韓国の 2 大学、ベトナムの 3 大学、タイの 1 大学と連携し、開始時で約 600 名の学習者を対象に、大学の日本語学科に入学して卒業するまでの 4 年間にわたる執筆能力獲得過程の追跡調査に着手している。調査の開始時期は早い大学で 2020 年、多くの大学で 2021 年、遅い大学で 2022 年であり、この調査の開始時期はいずれも、新型コロナウィルス感染症の世界的流行のときとほぼ重なっており、そのため、調査のすべての過程をオンラインで行っている。ここではそれを、(1)一連の調査管理、(2)作文の執筆、(3)作文の提出、(4)背景情報の収集、(5)学習者との連絡の五つに分けて紹介する。

(1)「一連の調査管理」というのは、学習者が調査に参加するさいの調査の一連の流れの管理のことである。学習者は次の表 2 のような流れで調査に参加している。

表 2　学習者の調査への参加手順

①Moodle へのアクセス	国立国語研究所が作成した URL から Moodle にアクセスする（年 3 回）
②レベル判定テストの受験	Moodle 上で 3 種類の日本語のテストを受ける（年 1 回）
③作文の執筆	作文ソフトをダウンロードし、その回のテーマに沿った作文を書く（年 3 回）
④情報シートの入力	作文執筆に関する情報入力シートに記入する（年 3 回）
⑤アンケートの記入	作文執筆に関するアンケートに記入する（年 1 回）
⑥フェイスシートの記入	学習者の基本情報をフェイスシートに記入する（初回のみ）
⑦作文のフィードバック	作文のフィードバックを受ける（年 3 回）

調査を開始した当初は試行錯誤があったものの、2022 年現在では①～⑦の作業がすべて Moodle 上で完結するようになっている。それによって、学習者は海外の大学の教室や寮にいても、帰省やロックアウトで自宅にいても、留学していて日本で生活していても、どこからでも決まった時期に調査に参加することができる。学習データを収集するにはフィールドが必要であるが、そのフィールドを仮想空間に置くことでコロナ禍でも調査の安定した継続が可能になっている。

(2)「作文の執筆」は、学習者はパソコンで入力する方式を採っている。手書きには、文字の正確な字形把握という面や、機械に頼らない自力での日本語の思考という面では一日の長はあるが、現実の世界では手書きをする場面はきわめて限られており、学習者に無理に手書きをさせる意義は乏しくなっている。また、遠隔地での学習データ収集という面から考えても、手書きは現実的ではない。

そこで、この調査では、EssayLogger という入力支援システムを国立国語研究所のスタッフが開発し、それを用いている。将来的には一般に公開し、無料でダウンロードできるようにする予定ではあるが、特徴としては、母語での入力画面やメモ欄を備えている点（図 1 を参照）と、文字を入力したさいのパソコンのキーストロークが時間も含めてすべて記録できるシステムとなっている（図 2 を参照）点の二つが挙げられる。とくに後者については、文字入力のさいの一連のプロセスが明確になり、学習者が入力や修正に苦労した点が解明できるため、プロダクトとしての作文だけでなく、プロセスとしての作文も分析対象にできるため、今後の新たな研究分野の創出が見こまれる（田中・石黒（2018）や布施・石黒（2018）も参照）。

図 1　EssayLogger の学習者入力画面

ID番号	分類	日付	時間	入力間隔（秒）	操作カテゴリ	操作内容1	操作内容2	テキスト全文
0	essay-title	2022/6/14	9:22:49	0	mouse	マウス操作	LeftButton	
1	essay-title	2022/6/14	9:23:08	18.705	key	キー入力	MetaLeft	
2	essay-title	2022/6/14	9:23:27	19.625	key	キー入力	MetaLeft	
3	essay-title	2022/6/14	9:23:27	0.001	key	キー入力	KeyH	h
4	essay-title	2022/6/14	9:23:28	0.125	key	キー入力	KeyA	は
5	essay-title	2022/6/14	9:23:28	0.17	key	キー入力	KeyS	は s
6	essay-title	2022/6/14	9:23:28	0.081	key	キー入力	KeyI	はし
7	essay-title	2022/6/14	9:23:28	0.127	key	キー入力	KeyR	はし r
8	essay-title	2022/6/14	9:23:28	0.105	key	キー入力	KeyE	はしれ
9	essay-title	2022/6/14	9:23:28	0.224	key	キー入力	KeyM	はしれm
10	essay-title	2022/6/14	9:23:28	0.096	key	キー入力	KeyE	はしれめ
11	essay-title	2022/6/14	9:23:29	0.343	key	キー入力	変換	走れメロス
12	essay-title	2022/6/14	9:23:29	0.16	key	キー入力	変換確定	走れメロス
0	essay	2022/6/14	9:23:30	0	key	キー入力	KeyM	m
1	essay	2022/6/14	9:23:30	0.071	key	キー入力	KeyE	め
2	essay	2022/6/14	9:23:30	0.177	key	キー入力	KeyR	め r
3	essay	2022/6/14	9:23:30	0.079	key	キー入力	KeyO	めろ
4	essay	2022/6/14	9:23:30	0.16	key	キー入力	KeyS	めろ s
5	essay	2022/6/14	9:23:31	0.353	key	キー入力	KeyU	めろす

図 2　EssayLogger のキーストローク記録データ

(3)「作文の提出」は、2022 年現在では Moodle を介して OneDrive に保存するようにしているが、それまでは学習者に書いた作文を直接 OneDrive の個人フォルダに提出してもらう形を取っていた。OneDrive は国立国語研究所のアカウントが存在するため、セキュリティ上もリスクが低く、また、他のクラウドストレージよりも中国国内からのアクセスがしやすいため、OneDrive を用いた。すべての作文データを OneDrive に集約することで、デ

ータの管理・整理がより容易になっている。

(4)「背景情報の収集」は、Moodle を介して行っており、中国以外の国・地域では Google フォームに、中国では問巻星に質問内容等を記入してもらっている。すでによく知られていることではあるが、アンケートの記入・集計に適したこうしたフォームを使うことで、学習者にとってはスマホ等からの記入も容易になる一方、調査者側も自動集計が可能になるという点で重宝する。

(5)「学習者との連絡」は、スマホで使えるメッセンジャーSNS が確実である。学習者がふだん使っているもので連絡すると、もっとも見る可能性が高いからである。日本や台湾では LINE の普及率が高いが、中国では WeChat（微信）、韓国では Kakao Talk（カカオトーク）、ベトナムやタイでは Facebook の Messenger で連絡を取るようにしている。また、大事なことは学習者の母語で連絡を取ることである。日本語だと意味がわからないこともあり、意味がわかっても面倒なので処理が後回しになりがちだからである。

このように、ポストコロナ時代においては仮想空間を活用した調査が主流になる。移動の手間もなく、コロナの感染リスクもなく、コストも比較的安く済む。(1)～(5)の方法は、2022 年現在では必然の感はあるが、こうした方法を確立するまでは、長い時間をかけ、試行錯誤の繰り返しが必要であった。今後、同種の調査を計画する方は他山の石としていただければさいわいである。

3.3　オンラインで収集する会話コーパス

2.3「レベル別学習者コーパス」で紹介した B-JAS というコーパスは、中国語話者のコーパスであった。横断コーパスである I-JAS が横糸、縦断コーパスである B-JAS が縦糸であり、この二つが組み合わさることで学習者の日本語習得の実態が明らかとなり、日本語教育研究は進む。しかし、B-JAS は中国語話者に限られるので、中国語話者以外の学習者のデータも集めて初めて、縦糸と横糸は組み合わさり布を織りなすことになる。そこで、2022 年に着手した新たな調査では、母語の違いによる経年的な比較ができるよう、中国語話者にくわえ、ベトナム語話者、タイ語話者のデータ収集を行い、母語の転移も含めた学習者の習得過程を体系的に比較できる環境を整えることを目指している。

B-JAS では、半年に 1 度、インタビュアーが北京に足を運んでデータを取りつづけており、今回の調査でも同様の体制を継続する予定でいた。ところが、コロナの影響で海外出張が不可能となり、オンラインでのデータ収集を選択せざるをえなくなってしまった。基本的には、3.2「オンラインで収集する作文コーパス」の方法を踏襲したが、こちらの調査の場合、会話のインタビュー調査があるため、オンラインでインタビューデータを収集する方法を考えた。Zoom が普及しているベトナムとタイでは Zoom、Zoom が使いにくい中国では Teams といったオンライン会議システムを用いてインタビュー調査を行うことにしたが、その場合、音質の問題がある。そこで、インタビュー担当者（インタビュアー）と学

習者（インタビュイー）の双方にリニア PCM レコーダーを用意し、イヤホンやヘッドホンを装着して調査を行った。これにより、それぞれのリニア PCM レコーダーには自分の声だけが入り、調査終了後に二つの音声を組み合わせることで、クリアな会話が再生できるという仕組みを作りだすことができた。このようにして、現地に足を運ばなくても、対面での調査と同等の音質のインタビューデータを収集することができるようになっている。

3.4　オンラインで収集するゼミ談話コーパス

3.2「オンラインで収集する作文コーパス」および 3.3「オンラインで収集する会話コーパス」では、プレコロナ時代であれば対面環境を活用して収集できたデータを、コロナ時代、そしてポストコロナ時代にどのように収集するかという関連からの記述が中心であった。

しかし、3.1 「オンラインというフィールド」でも述べたように、学習者はオンライン環境のなかで授業を受講し、日常生活を送っている。そのため、日本語教育の教材やカリキュラム自体は、プレコロナ時代の対面コミュニケーションを前提にしたものになっており、ポストコロナ時代において学習者が生きていかなければならない環境からはかけ離れたものになっている。ポストコロナ時代にふさわしい教材やカリキュラムを作成するには、学習者たちがコロナ時代、ポストコロナ時代においてどのようなコミュニケーションを行っており、オンライン環境で生きていくなかでどのような困難点を抱えているのか、その実態を把握することが求められるだろう。

そこで、筆者とその同僚である烏日哲氏が中心となって研究しているゼミ談話コーパスを紹介する。ゼミ談話コーパスは、日本語学や日本語教育学の大学院生たちが参加している大学院ゼミナールの談話を録画したものである。録画は、新型コロナウィルス感染症が猛威をふるいはじめ、ゼミナールがオンラインに移行した 2020 年 4 月から収録を続けているものである。なかには、大学院に入学後、日本に入国できなくなってしまい、母国でゼミナールに出席しつづけた修士課程の大学院生もおり、高度に専門的なコミュニケーションが行われ、新参者にとっては対面でもコミュニケーションに苦労するゼミナールという環境に当初からオンラインで参加し、一層の苦労を強いられた学習者のデータも含まれ、貴重なデータとなっている。

分析自体は十分には進んでいないが、興味深い事実も明らかになっている。一般に、オンライン・コミュニケーションは、対面コミュニケーションに比べて話し合いへの参加者の積極的関与が失われやすいと考えられがちであるが、実際には、参加者同士の協力によって話者交替が積極的に行われ、沈黙による気まずさが回避される多様な方略が用いられていることがわかった。また、オンライン・コミュニケーションでは予期せぬトラブルに見舞われがちであるが、困っている参加者を別の参加者が自発的にサポートする様子も観察された。さらに、脱線が少なく、決まった内容以外は話題に上らないと思われがちなオ

ンライン・コミュニケーションであるが、実際には、オンライン会議システムで共有されるビデオの映像や音声に積極的に言及することで自然な雑談が行われ、リラックスした雰囲気を形作っていることがわかった。

このように、私たちの思い込みや固定観点で捉えられがちなオンライン・コミュニケーションも、きちんとデータを収集し、仔細に観察することで、実態が正確に捉えられることが期待される。石黒（2022）は『社会言語科学』で組まれた特集「『コロナ禍』と社会言語科学」に掲載されたものであるが、ポストコロナ時代にあってはこうした研究が質量ともに増加することが望まれる。

おわりに

日本語教育学の目的を、学習者の目標言語である日本語の運用力を獲得することであると考え、学習者の日本語習得支援研究として位置づけた場合、母語別・レベル別・タスク別の学習者の言語運用の実態を記録した学習者コーパスの構築が必要になる。しかし、たとえコロナが終息したとしても、パンデミックの状況下で急速に発展したオンライン・コミュニケーションが今後衰退することは考えにくい。むしろ、ポストコロナ時代にあっては、学習者の日本語運用を対面コミュニケーションのみに求めるのは現実的ではなく、オンライン･コミュニケーションの日本語運用の記録を収集することは重要な課題となろう。

コロナ禍にあって、対面の教室という教育現場を奪われた学習者も教師も、双方の協力のもと、試行錯誤を重ねながら、オンラインという仮想空間に新たな教室を作りあげることが求められてきた。同様に、日本語教育学の研究者も、学習者から言語運用のデータを得られる教室という対面のフィールドを失った以上､オンライン環境を最大限に活用して、試行錯誤を重ねながら、仮想空間に新たなフィールドを構築せざるをえなくなった。本稿はその試行錯誤の記録である。

しかし、試行錯誤の結果、オンラインによる調査は負の側面ばかりではなく、正の側面も少なくないことがわかってきた。データ収集という観点から見て、オンラインのフィールドはむしろ効率的であり、統一的な基準に基づいて大量のデータを収集・整理するのに向いている。また、学習者はすでにオンライン環境のなかで生きており、オンラインを活用した日本語コミュニケーション能力を獲得することが社会的に求められている以上、オンライン・コミュニケーションにおける学習者の困難点を整理し、それを教育実践や教材開発に役立てる必要もある。

筆者が示した三つの研究は、オンラインを活用したささやかな試みにすぎない。異なるアプローチからの優れた研究も存在するはずである。重要なことは、こうしたデータの収集・分析法を研究者間で共有することである。それによって、学習者がどのように日本語を学ぶのかという日本語教育学の中心的テーマの解明に一歩近づくことができると考える。

付記

本研究は科研費 JP21H04417 および JP22K00655、国立国語研究所機関拠点型基盤研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」のサブプロジェクト「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」および「日本語学習者の談話の縦断コーパス研究」の研究成果である。本研究の遂行にあたり、国立国語研究所の上記プロジェクトのスタッフ各位の協力を得た。記して感謝申し上げる。

参考文献

阿部新（2014）「世界各地の日本語学習者の文法学習・語彙学習についてのビリーフ ―ノンネイティブ日本語教師・日本人大学生・日本人教師と比較して―」『国立国語研究所論集』8、1-13 頁、国立国語研究所。

庵功雄（2012）「日本語教育文法の現状と課題」『一橋日本語教育研究』1 号、1-12 頁、一橋日本語教育研究会。

石黒圭（2022）「コロナ禍におけるオンライン・ゼミナールの可能性 ―オンラインのゼミ談話に見るコミュニケーション活動の豊かさ―」『社会言語科学』25-1、39-54 頁。

石黒圭編（2017）『わかりやすく書ける作文シラバス』くろしお出版。

市嶋典子（2009）「日本語教育における『実践研究』論文の質的変化 ―学会誌『日本語教育』をてがかりに―」『日本語教育論集』25、3-17 頁、国立国語研究所。

岡葉子（2017）「日本語教育学における「学習動機」の概念について ―motivation の訳語をめぐる問題―」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』43、19-32 頁。

金井勇人（2016）『JCK 作文コーパス』
(http://nihongosakubun.sakura.ne.jp/corpus/ 2022 年 8 月 15 日取得)。

金沢裕之編（2014）『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』ひつじ書房。

鎌田修・山内博之（1999）「KY コーパス」
（現行版は、李在鎬氏らによって形態素解析と誤用タグが施され、検索システムを備えた「タグ付き KY コーパス」http://jhlee.sakura.ne.jp/kyc/ 2022 年 8 月 15 日取得)。

国立国語研究所（2009）『作文対訳データベース』(https://mmsrv.ninjal.ac.jp/essay/ 2022 年 8 月 15 日取得)。

国立国語研究所（2020）『多言語母語の日本語学習者横断コーパス（I-JAS)』
(https://www2.ninjal.ac.jp/jll/lsaj/ 2022 年 8 月 15 日取得)。

国立国語研究所（2023 予定）『北京日本語学習者縦断コーパス（B-JAS)』
(https://www2.ninjal.ac.jp/jll/内に 2022 年度中に公開予定)。

小林ミナ（2002）「日本語教育のための教育文法」『日本語文法』2-1、153-170 頁。

杉村泰（2013）『湖南大学学習者中間言語コーパス』
(https://www.hum.nagoya-u.ac.jp/about/about-sub2/japanese/sugimura/2-3.html 2022 年 8 月 15 日取

得)。
田中啓行・石黒圭「日本語学習者の作文執筆修正過程 ―中国人学習者と韓国人学習者の修正の位置と種類の分析から―」『国立国語研究所論集』14、国立国語研究所、2018.1、255-274 頁。
寺村秀夫（1990)『外国人学習者の日本語誤用例集』平成 2 年度科学研究費特別推進研究報告書 (http://doi.org/10.15084/00003533)。
東呉大学日本語文学系（2007)『LARP at SCU 語料庫』 (https://web-ch.scu.edu.tw/japanese/web_page/3936　2022 年 8 月 15 日取得)。
西口光一（2012)「『教育』分野 ―日本語教育研究の回顧と展望―」『日本語教育』153、8-24 頁、日本語教育学会。
野田尚史編（2005)『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版。
布施悠子・石黒圭「日本語学習者の作文執筆過程における自己修正理由 ―上級中国人学習者，上級韓国人学習者，日本語母語話者の作文の比較から―」『国立国語研究所論集』15、国立国語研究所、2018.7、17-42 頁。
三代純平（2014)「日本語教育におけるライフストーリー研究の現在 ―その課題と可能性について―」『リテラシーズ』14、1-10 頁、くろしお出版。
元田静（2005)『第二言語不安の理論と実態』渓水社。
林洪・徐一平・迫田久美子監修、張林・野山広・石黒圭・岩崎拓也編集（2023 予定)『北京日本語学習者縦断コーパス「B-JAS」と日本語の教育研究（北京日语学习者历时语料库（B-JAS）与日语教学)』中国国際広播出版社。

Title

How learners learn Japanese: The method for collecting data on Japanese language usage in the post-corona era

ISHIGURO, Kei

Abstract

Considering that the purpose of Japanese language pedagogy is to help learners acquire and support their Japanese proficiency, Japanese language pedagogy requires learner corpora, which is the material for analyzing the acquisition process learners acquire Japanese language skills. However, it became impossible to collect the learner materials necessary for constructing the learner corpora.　This is because the global outbreak of the new coronavirus has made it difficult to conduct field surveys of overseas learners in JFL environments and face-to-face surveys of international students in Japan who study in JSL environments. Therefore, instead of conducting field and face-to-face surveys, this paper introduces the method for collecting composition corpora,

conversation corpora, and seminar discourse corpora, which are collected using the online environment. Even if the corona comes to an end, it is unlikely that online communication will decline in the future. Rather, in the post-Corona era, it will be important to accumulate data on learners' use of Japanese in online communication. In this sense, trial and error in survey methods utilizing the online environment and the sharing of information on survey methods among researchers are expected to be keys to the development of Japanese language pedagogy.

Keywords : online communication, fieldwork, learner corpora, Japanese language proficiency, second language acquisition

ポストコロナ時代における韓国の日本学研究
—韓国日本語学会の展望論文を中心に—

辛 銀眞（仁川大学）

要旨

本稿では、韓国日本語学会の学術誌『日本語学研究』の「展望論文」を中心に、ポストコロナ時代における韓国の日本学研究の現状と展望を考えてみた。本稿に参照された展望論文は、「2015 年-2017 年」、「2017 年-2018 年」、「2019 年-2020 年」の三つの期間を対象としている。それぞれの期間において、「音声・音韻」、「文法」、「語彙・意味」、「語用論・社会言語学」、「日本語史」、「日本語教育」、「その他」の 7 つの分野に分けて研究動向を紹介し、今後の展望を述べた。

各分野を一律に比較はできないが、韓国の日本語学研究では、現在、「日本語教育」、「文法」、「語彙・意味」の上位 3 分野の論文が、全体の 7 割を超えている。特に、「日本語教育」の強勢が目立つ。また、例年と比べ、「文法」分野の論文数の減少と「語用論・社会言語学」の躍進に目を留めておきたい。

ポストコロナで、韓国も非対面研究・教育が進み、使用者にもオンライン・ツール利用に対する抵抗がなくなりつつある。本稿では、特に、「語彙・意味」と「日本語教育」における電子ツールの活用がフォーカスされたが、今後、日本語学研究全般で、電子資料の利用、産学協同などの形での Edutech など、オン・オフの融合が進むと考えられる。

キーワード：　ポストコロナ、韓国、日本学研究、韓国日本語学会、展望論文

はじめに

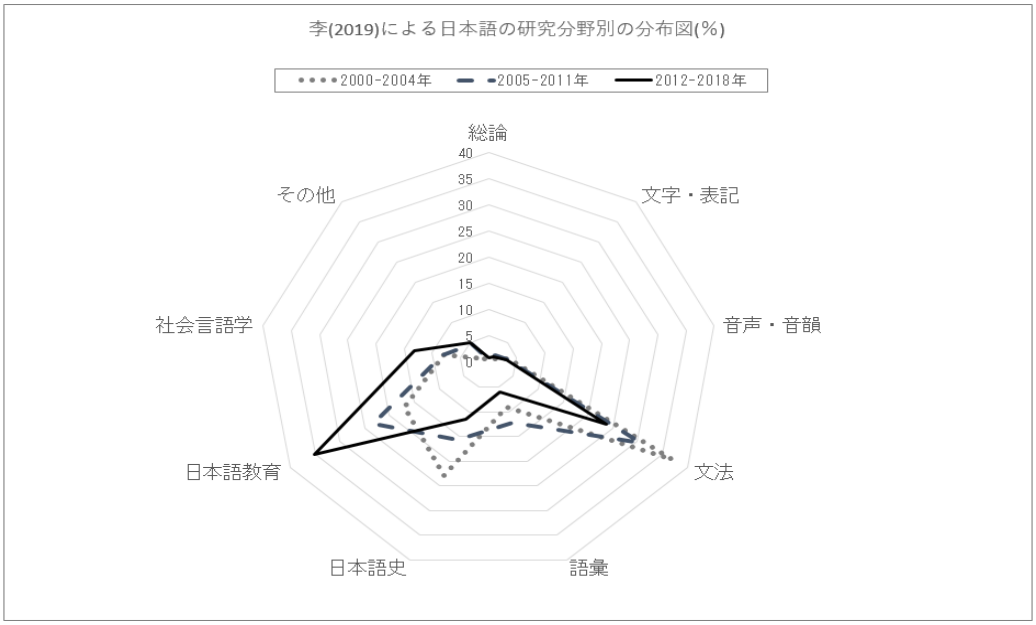
韓国日本語学会(JLAK：The Japanese Language Association of Korea)は、韓国における日本語学研究の専門、先端学会を目指している。1999 年 9 月、日本語を専門的に、より詳細に研究する学会の必要性に共感する研究者達の発議により、多数の話し合いを経て、正式に発足することに至った。

続いて、2000 年 3 月に創刊された学術誌『日本語学研究』は、 現在、KCI(Korea Citation Index：韓国学術誌引用索引)の登載誌[1)]として年 4 回発行されており(3・6・9・12 月 20 日)、「音声・音韻」「文法(統語論・形態論等)」「語彙・意味」「語用論・社会言語学」「日本語史」「日本語教育」「その他(翻訳・通訳等)」の 7 つの分野に分けて専門領域を設け、

査読および編集を厳正に行っている。また、韓国日本語学会の編集委員会は、50 輯(2016 年 12 月発行)を記念し、隔年に一度、「展望論文」として、韓国の日本語学研究の分野別現状と展望をまとめて掲載することにしている。これは、韓国の日本語学の動向を国内外に発信することで日本語学の裾を広げ、日本語学研究者同士の交流を計らうためである。

そこで、本稿では、韓国日本語学会の学術誌『日本語学研究』の「展望論文」を中心に、ポストコロナ時代における韓国の日本学研究の現状と展望を考えてみたいと思う。なお、本稿に参照された展望論文は、「2015 年-2017 年」(51 輯：2017 年 3 月)、「2017 年-2018 年」(59 輯：2019 年 3 月)、「2019 年―2020 年」(67 輯：2021 年 3 月)の三つの期間である。

李康民(2019)は、韓国の五つの学術誌[2)]に掲載された研究論文を日本語学分野の各領域別に調査を行い、2000 年から 2018 年に至る日本語学研究の現状を報告している。その結果を、高慧禎(2021：23)は、以下のように図式化している。



〈図 1〉　各周期別における日本語学の分野別の分布図

上記の<図 1>から、2000 年から 2018 年にかけた韓国の日本語学研究の動向を見ることができる。各周期別に比較してみると、40%近くを占めていた「文法」領域の研究が 20%台になり、逆に、15%台であった「日本語教育」領域の研究はだんだんと増え、35%になっている。また、「日本語史」および「語彙」は「文法」同様の減少傾向を見せており、「社会言語学」および「その他」は「日本語教育」と似たような増加傾向を見せていることから、基礎的な日本語学、いわゆる純日本語学より応用日本語学の方が、他の分野より活発な研究成果を出していることが見て取れる。

１．音声・音韻

閔光準(2017)、酒井真弓(2019)に続いて、高慧禎(2021:24)は、登載誌 18 種を対象とし、2019-2020 年の研究論文を比較し、語学論文 822 本の中から「音声・音韻」関連は 56 本(6.8%)であったことを示している。また、全体の研究傾向を以下のようにまとめている(高慧禎 2021：25〈表 2〉)。

〈表 1〉 周期別の音声学・音韻論研究分野の論文数と割合（括弧内は%）

周期	調査時期	研究領域				合計
		音声学·音韻論	音声教育	対照言語	文字表記·漢字音教育	
1	2015-2016	25(34.2)	42(57.5)	6(8.3)	-	73(100)
2	2017-2018	10(29.4)	20(58.8)	2(5.9)	2 (5.9)	34(100)
3	2019-2020	18(32.1)	25(44.7)	4(7.1)	9(16.1)	56(100)

研究領域の詳細では、「音声学・音韻論」は 30%前後で保てられているが、「文字表記・漢字音教育」、「対象言語」は 10%を満たさず、「音声教育」は過半を超えていることがわかる。ただし、3 周期(2019-2020 年)の「文字表記・漢字音教育」の 16.1%には、注目すべきである。単なる文字であった漢字が、音と結びつくことで、音声教育の一環とみなされ、研究成果も増えているのではないかと考えられる。

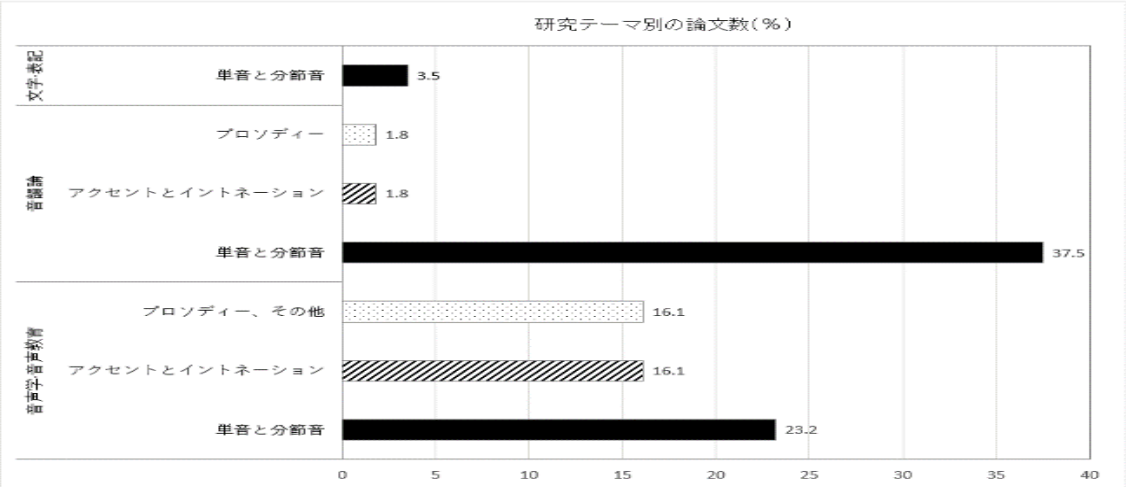
次は、著者の国籍および作成言語のまとめである(高慧禎 2021：25〈表 3〉)。著者の国籍としては韓国人の割合が徐々に減り、論文の作成言語は日本語から韓国語に移行しているように思われる。

〈表 2〉 周期別の著者数と論文作成の言語の割合（括弧内は%）

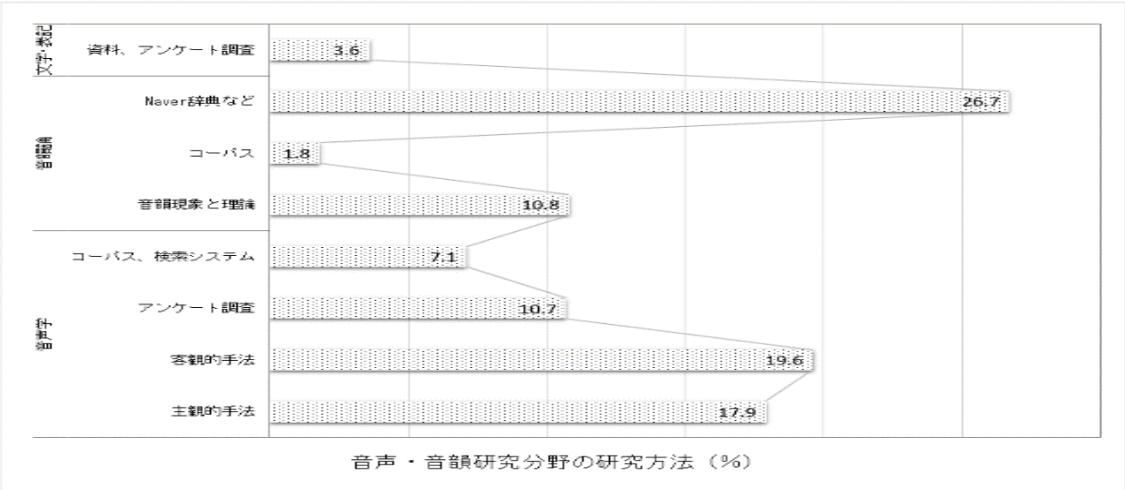
周期	著者の国籍			著者数	論文作成の言語		総論文数
	韓国人	日本人	中国人		韓国語	日本語	
1	29(82.9)	6(17.1)	-	35(100)	37(50.7)	36(49.3)	73(100)
2	19(73.1)	7(26.9)	-	26(100)	15(44.1)	19(55.9)	34(100)
3	28(71.8)	10(25.6)	1(2.6)	39(100)	33(58.9)	23(41.1)	56(100)

また、研究テーマ別分布としては、 以下の〈図 2〉のように、音声学と音声教育の場合は、単音と分節音に関する研究が 23.2%の割合でやや高く、続いてアクセントとイントネーションに関する研究とプロソディーなどに関する研究がそれぞれ 16.1%を占めていることが確認できた。一方、音韻論の場合は、前で触れた音声学と音声教育分野の結果とはやや異なり、単音と分節音に関する研究が 37.5%の割合で一番高く、アクセントとイントネーションに関する研究は 1.8%、プロソディーなどに関する研究が 1.8%を占めていることが分かった(高慧禎 2021：29)。

音韻論と音声教育の領域で用いた分析方法を見ると、〈図 3〉として示したように、コーパスや検索システムを活用した論考が持続的に出てきたということである。また、日本語教育の領域でも、音響分析を通じた実験研究が増えている。こういった分析方法を用いた研究は、これからも持続的に増えていくだろう。なぜかというと、韓国内での研究環境を考えてみると、研究パラダイムに合う日本語母語話者の音声データを確保するのが難しいため、研究に多くの制約が伴う。しかしながら、最近は、インターネットさえ繋がれば、音響分析ができる初心者向けのフリーソフトが手に入るようになったし、また、コーパスを活用した日本語の大量な音声データも容易に確保できるようになったからである(高慧禎 2021：28)。



〈図 2〉　音声・音韻の研究テーマ



〈図 3〉　音声・音韻の研究方法

以上で、まず、「音声・音韻」分野の研究推移を見ると、日本語の音声学· 音韻論に関す

る研究(32.1%)より、音声教育に関する研究(44.7%)に成果が集中されていることが明らかになった。このような傾向は、韓国内で日本語母語話者の音声データ収集が難しい研究環境から起因した結果であると考えられる。最近では、コーパスを活用した音声 DB の転写資料と通信言語の文字資料が音声研究に取り込まれているという点を指摘しておきたい。

次に、領域別の研究テーマを見ると、音声研究(55.3%)は、超分節音に注目した研究が頻繁に行われていたのに対し、音韻および文字･表記に関する研究(39.3%)は、単音と分節音に注目した音韻理論と漢字音の研究が大半を占めていることが分かった。

今後、実証的な音声学と理論的な音韻論的研究が、相互有機的な関係の中で行われ、日本語教育とも連携されることで若手研究者も「音声・音韻」研究にかかわってくることを期待したい。

２．文法

以下の〈表 3〉は、「文法」領域の論文数を調べたものである。

〈表 3〉 2019-2020 年の「文法」論文数

発行機関	学術誌	対象巻(号)	発行回数(年)	論文総数／語学論文数	文法論文数
韓国日本学会	日本学報	118-125	4 回	113／27	5
韓国日語日文学会	日語日文学研究	108-115	4 回	137／58	15
韓国日本語学会	日本語学研究	59-66	4 回	86／86	19
韓国日語教育学会	日本語教育研究	46-53	4 回	96／96	7
韓国日本言語文化学会	日本言語文化	46-53	4 回	113／52	23
韓国日本語教育学会	日本語教育	87-94	4 回	104／67	13
日本語文学会	日本語文学	84-91	4 回	186／78	18
大韓日語日文学会	日語日文学	81-88	4 回	151／58	18
韓国日本語文学会	日本語文学	80-87	4 回	121／40	9
韓国日本文化学会	日本文化学報	80-87	4 回	158／48	12
東アジア日本学会	日本文化研究	69-76	4 回	109／26	7
韓国日本近代学会	日本近代学研究	63-70	4 回	136／24	9
韓国外国語大日本研究所	日本研究	79-86	4 回	81／25	8
檀国大日本研究所	日本学研究	56-61	3 回	49／12	3
漢陽大日本学国際比較研究所	比較日本学	45-50	3 回	107／28	7
中央大日本研究所	日本研究	50-53	2 回	49／19	10
東国大日本学研究所	日本学	48-51	2 回	50／10	2
高麗大グローバル日本研究院	日本研究	31-34	2 回	49／5	1
計			64 回	1895／759	186

鄭相哲(2017)、李暻洙（2019）に続いて、張根壽（2019）は 2019-2020 年の「文法」研究のまとめをおこなっている。〈表 3〉のように、韓国の 12 の学会と 6 つの大学研究所で発行された学術誌の「文法」領域の論文数を調べている(張根壽 2019：152〈表 1〉)。

また、論文を例示しながら、論文を類型別に、単語の意味・形態・統語に関する研究、文法カテゴリーに関する研究、日韓対照研究、日本の文法研究の動向に分けてその内容と特徴を記述した。それによって、韓国における日本語文法の研究は文法現象を記述・説明する方法論を含め、日韓の対照研究が活発に行われていることが確認された。これは母語でない第 2 言語としての言語研究・外国語教育という側面からも妥当な方法論であると言える。今回の調査からは特に、日韓の対照研究の、伝統的な単語の 1:1 の対応形式の研究から語彙レベルの研究を含め、多様な文法カテゴリーに関する研究が進められていることが確認された。

韓国における日本語研究は、この 2 年間で発表された論文数からみると依然として活発に行われているが、その中、文法関連の論文は減少の傾向を見せている。これには、文法研究の方法論の変化および多様性が関わっているのではないかと考えられる。対照研究の方法が伝統的な文の構造を解明する理論研究から言語形式の文法と意味を中心とした記述文法を経て、文法教育にもその知見が利用されていることは、「日本語教育」の優位ともかかわっていると思われる。

しかし、対照言語学、誤用研究、中間言語、言語類型論のような応用言語学への発展は言語研究との関連性、外国語教育の必要性から考えても自然な流れである。さらに、今回の調査では具体的な論文の紹介はできなかったが、伝統的な研究領域の「文」レベルの文法研究が「談話」レベルへとその領域を広げている動きも見られた。これらのいくつかの要因が絡まって、文法論文の減少は文法そのものを研究するという方法から文法を利用した研究へと移行する流れにあると解釈できる。日本語教育における文法教育、誤用分析、中間言語・第二言語習得を含め、コミュニケーション研究などの分野でも文法は活用されている。

このように考えると、文法の研究単位として「文」というものも改めて考える必要がある。私たちが実際にことばを発するときには、単一の文を用いて発話をするよりは、ほとんどの場合、話し手と聞き手とのやりとりの中で行われる。たとえば、話しことばでは話し手と聞き手の間で成立する文脈や場面の中で互いに会話を通して行い、書きことばでは文脈・テキストを考慮して行うのが普通である。この意味で、これからの文法研究は談話・テキストを考慮した研究へ拡大していくものと思われる。

３．語彙・意味

韓国の語彙・意味研究については、張元哉(2017)、姜炅完(2019)に続いて、孫榮奭 (2019)が現状と展望を次のようにまとめている(2019-2020 展望論文)。まず、韓国研究財団の主

題分類で「日本語と文学」に分けられた学術誌の中から、単語及び語彙との関連性が高いと判断した論文を 155 編選んだ。 その上で、論文を「語義」「語構成」「語種」「位相」「通時的語彙研究」「社会文化的語彙研究」「日本語教育」「計量的語彙研究」「語彙のデータベース及びコーパス構築」の９分類に分けて、それぞれの研究を概観され分析を行っている。

はじめに、単語の意味（語義）は、語彙研究の最も重要なテーマの一つで、関連研究数が一番多かった。特に類義語の研究が目立っている。類義語に続き、多義語の研究も多く、慣用句の意味に関する研究もあった。

次に、形態素による単語の組み立てを研究する語構成論では複合動詞の研究が多かった。また、複合動詞以外の複合語研究もあり、語構成の研究には漢語を対象としたものもある。語種のほうでは、外来語の研究が多かったが、漢語の研究も見られている。

共通の意味を表す単語でも、さまざまな条件(使い手、文章や場面など)によって違ったものになるときがある。こうした現象を意味する位相の分野でも、多くの研究が行われた。他に、新語・流行語に関する研究もあった。

そして、通時的な語彙研究では、個別単語の意味・用法の変遷に関する研究が大半であった。社会文化的な語彙研究も、前期に続き、数多く見られる。孫榮奭（2019：75）では、日本語教育と言語習得の分野では、特に語彙に注目した研究を紹介している。

次に、マクロの視点から語彙を捉え、その使用実態を計量的に調査・分析した研究を紹介している。最後に、語彙研究とともに、研究に活用できるデータベース及びコーパスを自作した事例を二つほど 紹介している。

2019 年から 2020 年まで発表された語彙関連論文を取り上げ、研究の成果を概観した結果、語義(特に、類義語)、語種、位相の研究が盛んであり、前期(2017-2018 年)に続いて語彙に関する社会文化的研究が活発に行われたことがわかった。そして、日本語と他の言語(主として韓国語)との対照研究方法が多く採られ、その数は、孫榮奭（2019）で扱った論文の約 3 割に当たる。なお、語彙に関する全論文の 2 割近くが、研究資料として日本国立国語研究所の『BCCWJ』を利用している。『BCCWJ』が最長 1971 年から 2005 年までの現代書き言葉のコーパスであることから、現代日本語はこの時期の書き言葉を中心に研究が行われているとも解釈できる。

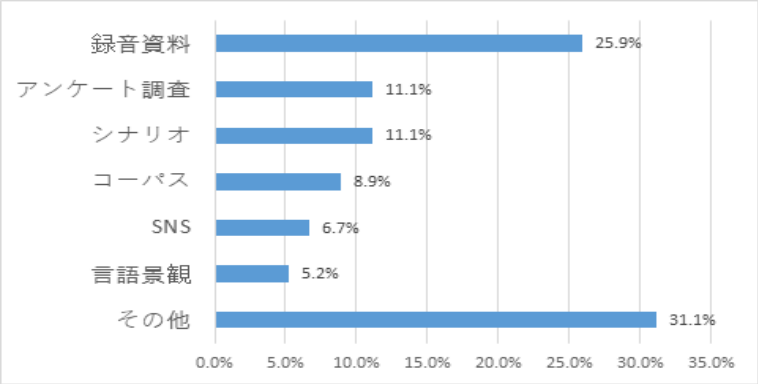
『BCCWJ』の利用率が高いことは、韓国の語彙研究に限った傾向ではない。2019-2020 年度の日本における語彙研究の動向をまとめた市村太郎(2020)でも同じ傾向が指摘されている。『BCCWJ』が完成度の高いコーパスであり、日本語研究に多大に貢献していることに疑いはないが、数えきれないぐらい膨大で 多様な日本語をより十全に把握するためには、『BCCWJ』と他の研究資料とを比較した研究、あるいは 『BCCWJ』にはない言語データにもとづく研究も今後ますます盛んになる必要があると考える。

４．語用論・社会言語学

語用論· 社会言語学研究の現状と展望に関しては、2015-2016 展望論文である李吉鎔（2017）、2017-2018 展望論文の洪珉杓（2019）があり、2019･2020 年における韓国国内の研究論文については、盧姓鉉(2021)が現状と展望をまとめている。

韓国研究財団の学術誌引用索引サイトで「日本語と文学」に分類された登載学術誌(18 種/2019･2020 年発行本)に掲載された研究論文は、2019 年に 947 本、2020 年に 849 本、合わせて 1796 本であり、そのうち語用論･社会言語学関連は 135 本(7.5%)を占めている。学術誌別の語用論･社会言語学関連の論文数を見ると、韓国日本語学会の『日本語学研究』に 22 本(17.8%)の論文が掲載されており、日本語学専門学術誌だけあって高い割合を占めている。 2019･2020 年における語用論･社会言語学研究は、氏名から判断して韓国人による単独研究が多い。

一方、語用論･社会言語学の分野では、個々の言語・コミュニケーション現象についてデータを分析する研究が多い。2019･2020 年における語用論･社会言語学の研究論文(135 本)においても、言語データを 分析した研究は 126 本(93.3%)にも達しており、分析資料は録音資料、アンケート調査、シナリオ、コーパスなど、多岐にわたっている。分析資料の種類は以下のとおりである（盧姓鉉 2021：57〈図 2〉)。



〈図 4〉　語用論･社会言語学研究の分析資料

さらに、135 本の論文から 675 個のキーワードを取り出してカウントしてみたところ、出現頻度の高い順から「日本語(31 回)」「談話(23 回)」「対照、韓日、会話(17 回)」「ストラテジー(13 回)」「多文化(11 回)」「発話、敬語、接触場面」となっていた。キーワードの分布から、「韓日対照研究」「日本語研究」という枠組みから「談話、ストラテジー、発話、敬語」という言語項目と「多文化、接触場面」という言語社会的な特徴が見えてくる。

盧姓鉉(2021：57－60) では、「韓日対照研究」「日本語研究」という枠組みの中で、各言語現象は社会的要因との関わりからどのように研究されてきたか、その動向について概観している。まず、「対照研究」では、 表現形式の機能及び実態、言語行動の機能及び実

態、ストラテジー、その他に分けて概観している。 また、日本語研究における「日本語」は、日本を代表し公の性格を担う「国語としての日本語」、日本語学 習者が日本語を習得していく過程で構築した「中間言語としての日本語」、日本語が通用しない言語環 境で親から受け継いだ「継承語としての日本語」の三つに分け、各々の研究動向を概観した。

その結果、韓日対照研究、国語･中間言語としての日本語研究は、分析資料の多様化・良質化が図られ、機能や実態記述中心の研究成果が引き続き蓄積されていることが明らかになった。また、韓日対照研究に おいてメカニズムの究明やモデルの提案が試みられたこと、国語としての日本語研究においてコーパス 構築が試みられたことは注目に値すると言えるだろう。なお、継承語としての日本語研究は、継承日本語の使用能力・ 意識・継承日本語教育に対する実態調査が図られ、在韓日本人の二言語使用・意識から言語政策・言語 活動・言語接触へと実態調査研究の幅が広げられている。

要するに、語用論・社会言語学的研究は、多くの研究者により、分析資料の多様化・良質化が図られ、 研究対象が広げられ、その実態の記述成果が蓄積され、社会との関わりから各言語現象の具体的な姿が 明らかになりつつある。だが、生越直樹(2012)や李吉鎔(2017)にも指摘されている、相互作用としての言語 行動研究、実態記述中心の研究から要因分析中心の研究への移行、実態調査からメカニズム･モデル構 築への発展は、2019･2020年においても未だに課題として残されている。

５．日本語史

日本語史研究の現状と展望は、康仁善(2017)、朴孝庚(2019)、李承英(2021)が、各時期に分けて、それぞれ展望論文を書いている。 その中で、李承英(2021)は、2019 年 1 月から 2020 年 12 月にかけての日本語史研究の動向について、韓国で発行された学術誌に掲載された日本語史関係の論文 91 本を対象とし、研究分野別、時代別に展望を行っている。

日本語史は、音韻史･文字史･ 文法史などの境界が曖昧なところもあり、言語学や文学、外国語学にも乗り入れられるのが現状であるため、分野を精密に分けることが難しいのだが、 李承英(2021)は、朴孝庚(2019)同様、「文字表記」、「音韻」、「語彙」、「文法」、「その他」の５つの分野に分けて時代別に展望を行っている。

まず、文字･表記の研究には、漢字、仮名、表記体の研究があり、主に古文書・古記録・古辞書の例を中心に 各語の表記の変遷を論じる研究が多かった。日本語史の研究の中で、もっとも論文の数が多かったのは音韻史である。音韻史に関する論考は 25 本で、多様な視点からの研究が多く見られた。語彙の研究は、各時代の資料に基づいた論究、大量のコーパスを利用した論究、近代語から現代語に 移行する時期の翻訳語の論究が多く見られた。

また、文法史の研究は、主には時代別の資料を用いての用例調査に基づき、実証的に分析している論考が多い。まず文法史の研究に使われた資料は、中世から近世にかけての朝鮮資料を含めた外国資料と抄物、 狂言、物語などの日本資料が主流である。

そして、上記の分野分類には入らないが、近世に入って、日本語史関連の資料について書誌学的な考察を行っている論文、日本語と韓国語の翻訳関係、韓語学習書、両国の教育制度についての論文などが多数発表されている。

以上で、李承英(2021)は、2019 年から 2020 年にかけて、韓国で発表された日本語史関連の研究論文 91 編を対象に文字 表記、音韻、語彙、文法、その他の 5 分野に分けて概括している。全体的な特徴は、次のように整理できる。

第一に、文字・表記・語彙分野は徐々に減少する傾向であり、音韻分野の論文は徐々に増加することが 分かった。とくに、音韻研究の場合、漢字音研究が以前と同じく、持続的に進められており、研究資料 の時期は主に中世から近世に当てられている。

第二に、語彙研究では、近代のコーパスを利用した研究が活発に行われていることや、データベース化に よる漢字研究もみられる。語彙の研究は近世から近代へと移行する時期に集中している。

第三に、文法研究では、言語の変化時期である中世時代の研究に焦点が当てられており、抄物を資料とした研究が多数行われている。

第四に、開化期日本で作られた韓国語学習書や『捷解新語』のような倭学資料研究も過去に続き、持続的に行われている。

今後は、コーパスの整備により、大量データを利用した量的検証型の研究が増加すると予測される。また、他分野からの日本語史研究への参入も多くなるだろう。このような学際化の進行は基本的には望ましいと思う。ただ、電子テキストや検索技術の発達にもかかわらず、実際に資料を読み取ったり、時間をかけたりして解釈できる能力が欠けているなら、日本語史研究への貢献は期待しがたいであろう。今後、個別の研究の深化はもちろん、研究者の力が有機的に結合した新しい研究が行われる時代になることを望みたい。

６．日本語教育

日本語教育研究に関しては、早矢仕(2017)が 2015－2016 年に発表された展望論文および趙南星(2019)の 2017－2018 年の展望論文をまず参照した。金志宣(2021)は、 日本・日本語関連学術誌に掲載された日本語教育研究論文を選び出し、テーマによる分類をもとに 2019 年から 2020 年までの研究動向を概観している。金志宣(2021：40)によると、2019 年から 2020 年まで、19 種の学術誌に 2063 本の論文が掲載され、そのうち日本語教育研究論文は 321 本で、全体の 15.6%を占めていた。日本語教育研究論文の著者の分布をみる と、韓国人著者の論文が 235 本（73.2%）、日本人著者の論文が 66 本（20.6%）、その他（中国人著者・台 湾人著者・多国籍共同著者の論文）が 20 本（6.2%）であった。

金志宣(2021：42)では、日本語教育研究の動向を確認するため、以下のように、各分野の論文数とその割合をまとめている。日本語教育研究 論文を分野別にみると、「教授・学習」（24.9%・80 本）および「言語要素」（20.9%・67 本）の割合が高く、 両分野を合わせ

て 45.8%と全体の半分近く占めていることが分かる。残りの 54.2%は、「社会言語・文化」（9.0%・29 本)、「教師・学習者」(8.7%・28 本)、「習得・誤用」(8.1%・26 本)、「言語技能」(7.2%・23 本)、「教科書・教材」(5.9%・19 本)、「その他」(5.9%・19 本)、「日本語教育一般」(5.0%・16 本)、「評価」(4.4%・14 本）の順に占められていた。

〈表 4〉 日本語教育研究の分野別論文数と割合

分野		論文数	割合(%)
1. 言語要素	1-1. 音声・発音	18	5.6
	1-2. 文字・表記	11	3.4
	1-3. 語彙	11	3.4
	1-4. 文法	17	5.3
	1-5. 談話・文章	10	3.2
	小計	67	20.9
2. 言語技能	2-1. 会話	2	0.6
	2-2. 作文	18	5.6
	2-3. 聴解	2	0.6
	2-4. 読解	1	0.3
	小計	23	7.2
3. 社会言語・文化	3-1. 敬語・待遇表現	4	1.2
	3-2. 文化・日本事情	12	3.7
	3-3. 異文化・多文化	13	4.1
	小計	29	9.0
4. 教授・学習	4-1. 教授法・授業実践	48	14.9
	4-2. ICT活用・オンライン授業	32	10.0
	小計	80	24.9
5. 評価		14	4.4
6. 習得・誤用		26	8.1
7. 教科書・教材		19	5.9
8. 教師・学習者		28	8.7
9. 日本語教育一般（日本語教育(学)の動向・展望・提言)		16	5.0
10. その他（就職・生涯教育・通翻訳・日本語教育史など)		19	5.9
計		321	100

特に、日本語教育研究の中で、「教授・学習」に 関するものが全体の 24.9%で最も多くなっている。趙南星（2019）の調査でも同様の結果が得られたことから、ここ数年の日本語教育研究の動向がうかがえる。 金志宣(2021)では、「教授・学習」分野を、さらに、「教

授法・授業実践」、「ICT 活用・オンライン授業」に分けているが、「教授法・授業実践」には、主に、新たな試みとして教授法や学習活動を取り入れた授業実践の報告・研究が見られ、「ICT 活用・オンライン授業」には LMS、SNS、WEB、AI など ICT を活用した授業や、MOOC をはじめ E-Learning、Blended Learning、Flipped Learning など、さまざまな非対面型・対面型（オンライン・オフライン）の教育研究が見られる。

金志宣(2021：44)によると、韓国の場合、2020 年以前は、サイバー大学や放送通信大学校を除いたほとんどの大学で、オンライン授業の比重が授業全体の 1%程度に過ぎず、教育パラダイムの動向に追いついていないのが現状であった。しかし、コロナ禍という非常時のもと、韓国を含む世界中の教育機関でろくに準備もできないまま否応なしにオンライン授業が始まり、これまで遅々として進まなかった ICT を活用した学びやオンライン授業が急速に浮上している。

日本語教育の方も例外ではなく、日本語教育研究の中で「教授・学習」の「ICT 活用・オンライン授業」に関するものが全体の一割を占めていることとは無縁ではないだろう。このような現状を踏まえ、金志宣(2021)は、日本語教育研究のうち ICT 活用・オンライン授業に関するものを、「同期型・非同期型オ ンライン授業」、「ブレンディッドラーニングとフリップトラーニング」、「ICT を活用した学習活動・授業」、「e - ラーニングの現状や課題・展望」、「その他」に分けて概観している。

韓国では、2000 年以降、コンピューターやインターネットなどを活用した遠隔教育が目立つようになっているが、こうした ICT を活用した授業や非対面のオンライン授業に関する研究は、ポストコロナの今後、さらに広がることが予想される。また、このような現状を踏まえ、本格的なモバイル・アプリケーションの開発・運用、プロトタイプの開発が必要であり、デザインや機能については学校と関連機関が共同でコンテンツを制作・活用しながら、相互作用の機能を備えたサービスを企画・開発していく必要があると考えられる。

おわりに

以上で、韓国日本語学会の展望論文を中心に、韓国における日本語学研究の現状と展望をまとめてみた。「音声・音韻」「文法(統語論・形態論等)」「語彙・意味」「語用論・社会言語学」「日本語史」「日本語教育」、各分野別に論文数の差はあるものの、全体的に、韓国研究財団の登載誌であるおよそ 18 種の学術誌を調査対象とされている。一律に比較はできないが、「日本語教育」の論文数が一番多く、次が「文法」であり、「語彙・意味」、「語用論・社会言語学」が続いている。また、「日本語史」および「音声・音韻」の論文数は少ない。

これは、2015-2016 年(洪珉杓 2017) および 2017－2018 年(李恩美 2019)に続く研究動向であり、韓国の日本語学研究では、現在、「日本語教育」「文法」「語彙・意味」の上位 3 分野の論文が、全体の 7 割を超えている。特に、「日本語教育」の強勢が目立つ。また、例

年と比べ、「文法」分野の論文数の減少と「語用論・社会言語学」の躍進にも目を留めておきたい。

ポストコロナで、韓国も非対面研究・教育が進み、使用者にもオンライン・ツール利用に対する抵抗がなくなりつつある。本稿では、特に、「語彙・意味」と「日本語教育」における電子ツールの活用がフォーカスされたが、今後、日本語学研究全般で、電子資料の利用、産学協同などの形での Edutech など、オン・オフの融合が進むと考えられる。

注

1) 韓国研究財団は、各研究分野において、SCI ジャーナルを基準に、KCI(Korea Citation Index: 韓国学術誌引用索引:www.kci.go.kr) を創設し、学術誌を厳格に審査、認定している。それによって、韓国の全ての研究機関、研究団体から発行される学術誌は、最初、「一般誌」からスタートし、一定基準に至ると、KCI に学術誌の審査を申請できるようになる。また、その査定を通った学術誌は、「KCI 搭載候補誌」となる。そして、そこから一定年数が経って、更に厳しい基準を満たすと、「KCI 搭載誌」になるための審査を申請することができる。

「KCI 搭載誌」とは、文字通り、上記の KCI サイトに搭載される学術誌のことである。会員数、学術大会の開催数、参加者人数、参加者の国籍など、学会あるいは研究団体の研究・教育力を基に、学術誌の発行部数、紙面数、著者数、引用指数、影響力ファクターなど、内容の専門性、国際性、研究発展性などを問う様々な基準が設けられているので、ある意味、「KCI 搭載誌」となれば、韓国研究財団がその分野における学術誌の位置を認め、研究発展性においても太鼓判を押しているとも言える。「KCI 搭載誌」に掲載される論文は、全て DOI を持ち、全世界にも公開される。 また、「KCI 搭載誌」は、申請が通っても、3 年ごとに、再度認定審査が義務付けられている。再認審査は、新規審査よりも格段に厳しく、しかも、それにパスされないと「候補誌」に降格され、韓国研究財団からの学術誌発行支援や学術大会支援が受けられなくなり、KCI への登録、サイトによる論文公開もできなくなる。

KCI で「日本語および文学」として登載された学術誌は、総計 18 であり、その中の学会誌は、以下のような 13 誌である(学会名『学術誌』(創立年度)順に示す)。 韓国日本学会『日本学報』(1973)、韓国日語日文学会『日語日文学研究』(1978)、韓国日本語教育学会『日本語教育』(1984)、大韓日語日文学会『日語日文学』(1991)、日本語文学会『日本語文学』(1992)、韓国日本語文学会『日本語文学』(1995)、韓国日本文化学会『日本文化学報』(1996)、韓国日語教育学会『日本語教育研究』(1999)、東アジア日本学会『日本文化研究』(1999)、 韓国日本語学会『日本語学研究』(1999)、韓国日本近代学会『日本近代学研究』(1999)、韓国日本言語文化学会『日本言語文化』(2002)。

2) 調査対象は、韓国国内発行の学術誌で、『日本学報』(韓国日本学会)、『日語日文学研究』(韓国日語日文学会)、『日本語文学』(韓国日本語文学会)、『日本語学研究』(韓国日本語学会)、『日本語教育研究』(韓国日語教育学会)の五つである。

参考文献

姜炅完（2019）「語彙研究の現状と展望（2017-2018 展望論文）」『日本語学研究』59、51-66 頁。

康仁善（2017）「日本語史研究の現状と展望（2015-2016 展望論文）」『日本語学研究』51、57-65 頁。

高慧禎（2021）「音声· 音韻研究の現状と展望（2019-2020 展望論文）」『日本語学研究』67、21-38 頁。

金志宣（2021）「日本語教育研究の現状と展望（2019-2020 展望論文）」『日本語学研究』67、39-51 頁。

盧姓鉉（2021）「語用論･社会言語学研究の現状と展望：2019･2020 年における韓国国内の研究論文を中心に（2019-2020 展望論文）『日本語学研究』67、53-68 頁。

閔光準（2017）「音声· 音韻研究の現状と展望（2015-2016 展望論文）」『日本語学研究』51、9-19 頁。

朴孝庚（2019）「日本語の史的研究の現状と展望（2017-2018 展望論文）」『日本語学研究』59、83-100 頁。

孫榮奭（2019）「語彙研究の現状と展望（2019-2020 展望論文）」『日本語学研究』67、69-86 頁。

李康民（2019）「한국의 일본어 연구－동향과 과제－」『日本研究論叢』51、現代日本学会、254-271 頁。

李吉鎔（2017）「語用論· 社会言語学研究の現状と展望（2015-2016 展望論文）」『日本語学研究』51、41-56 頁。

이경수（2012）「한국의 일본어교육 연구 현황과 과제」『日本学報』91 韓国日本学会、9-23 頁。

李暻洙（2019）「文法研究の現状と展望（2017-2018 展望論文）」『日本語学研究』59、23-49 頁。

李承英（2021）「日本語史研究の現状と展望（2019-2020 展望論文）」『日本語学研究』67、135-150 頁。

李恩美（2019）「〈巻頭言〉韓国における日本語学研究の現状と展望（2017-2018 展望論文）」『日本語学研究』59、5-6 頁。

張根壽（2019）「文法研究の現状と展望（2019-2020 展望論文）」『日本語学研究』67、151-168 頁。

張元哉（2017）「語彙･意味研究の現状と展望（2015-2016 展望論文）」『日本語学研究』51、33-39 頁。

鄭相哲（2017）「文法研究の現状と展望（2015-2016 展望論文）」『日本語学研究』51、21-31 頁。

趙南星（2019）「日本語教育研究の現状と展望（2017-2018 展望論文）」『日本語学研究』59、101-125 頁。

洪珉杓（2017）「〈巻頭言〉韓国における日本語学研究の現状と展望（2015-2016 展望論文）」『日本語学研究』51、3-8 頁。

_____（2019）「語用論· 社会言語学研究の現状と展望（2017-2018 展望論文）」『日本語学研究』59、67-82 頁。

市村太郎（2020）「語彙（理論・現代）」『日本語の研究』16-2、日本語学会、45-52 頁。

生越直樹（2012）「言語行動の日韓対照研究:その成果と問題点」『韓国語教育論講座』 第 2 巻、くろしお出版、571-586 頁。

酒井真弓（2019）「音声・音韻研究の現状と展望（2017-2018 展望論文）」『日本語学研究』59、7-21 頁。

早矢仕智子（2017）「日本語教育研究の現状と展望（2015-2016 展望論文）」『日本語学研究』51、67-77 頁。

Japanese Studies in South Korea in the Post-Corona Era
: Focus on prospect papers of the Japanese Language Association of Korea

SHIN, Eun-Jin

Abstract

In this paper, it has described the current status and prospects of Japanese studies in South Korea in the post-corona era. Focused on the "Prospect Paper" of the "Journal of Japanese Language" of the Japanese Language Association of Korea(JLAK). The prospect paper covers three periods: 2015-2017, 2017-2018, and 2019-2020. In each period, seven fields has investigated: phonetics/phonology, grammar, vocabulary, pragmatics/sociolinguistics, Japanese history, Japanese education, and others.

Although it is not possible to uniformly compare each field, in Korean Japanese language research, the top three fields of "Japanese education," "grammar," and "vocabulary" currently account for more than 70% of the total papers. In particular, the strength of “Japanese education” stands out. Also, I would like to draw your attention to the decrease in the number of papers in the field of "grammar" and the breakthrough in "pragmatics and sociolinguistics" compared to previous years.

In the post-corona era, non-face-to-face research and education are progressing in South Korea, and users are losing their resistance to using online tools. In this paper, It has focused on the use of electronic tools in "vocabulary" and "Japanese education". It will be thaugt that progress Online teaching and hi-breed learning in Korea.

Keywords：　Post-Corona, South Korea, Japanese Studies, JLAK, Prospect Paper

『日本霊異記』「捉雷縁」の比較文学的研究

葛 継勇（鄭州大学）

要旨

『日本霊異記』上巻所収の「捉雷（電）縁」説話は、主人公の少子部栖軽の「生前に雷を捉える説話」と「死後に雷を捉える説話」との二つからなる。この説話のもととなる説話が『日本霊異記』の出典と目される『搜神記』や『詩経』などの中国古典籍に収められているが、そこには主人公の名前として「蜾蠃」とある。それを日本的な「栖軽」と改めているのは説話の信憑性を高めるためであると思われる。前半の「生前に雷を捉える説話」には、中国文化的な要素がみえるが、『日本書紀』の関連説話をうまく取り込んでおり、日本での独自性が見いだせる。後半の「死後に雷を捉える説話」では、木に雷が挟まれるという中国文学のモチーフを受容しており、さらに「生前に雷を捉える説話」と同じく奇異な話の筋を追って聴き手の興味をそそる話し手の技巧が活かされている。この「捉雷縁」説話は、まさに中国農耕文化的要素を吸収して日本的に変異したものだと考えられる。

キーワード：　『日本霊異記』、『日本書紀』、「捉雷縁」説話、作成意図、農耕文化的要素

はじめに

『日本霊異記』巻上の第一縁には、「捉電縁」という説話が収められている。本稿で検討するうえで、その内容をまず示したい。

少子部栖軽者、泊瀬朝倉宮廿三年治天下雄略天皇〈謂大泊瀬稚武天皇〉之随身肺脯侍者矣。天皇住磐余宮之時、天皇与后寐天安殿、婚合之時、栖軽不知而参入。天皇恥、輟。時當空雷鳴。即天皇勅栖軽而詔：「汝鳴雷奉請。」答白：「将請。」天皇詔言：「爾汝奉請。」栖軽奉勅従宮罷出、緋縵著額、擎赤幡桙乗馬、従阿倍山田前之道与豊浦寺前之路走往。至于軽諸越之衢、叫囁請言：「天鳴電神、天皇奉請呼云々。」然而自此還馬走言：「雖電神而何故不聞天皇之請耶。」走還時、豊浦寺与飯岡間、鳴電落在。栖軽見之、呼神司入輿篭而持向於大宮、奏天皇言：「電神奉請。」時電放光明炫、天皇見之、恐、偉進幣帛、令返落処者。今呼電岡〈在古京少治田宮之北者〉。

然後時、栖軽卒也。天皇勅留七日七夜、詠彼忠信、電落同処作彼墓。永立碑文柱言：「取電栖軽之墓也。」此電悪怨而鳴落、踊践於碑文柱、彼柱之析間、電揲所捕。天皇

聞之、放電不死。雷慌、七日七夜留在。天皇勅使樹碑文柱言：「生之死之捕電栖軽之墓也。」所謂古時名為電岡、語本是也。

（小子部栖軽は、泊瀬の朝倉の宮に二十三年天の下治めたまひし雄略天皇〈大泊瀬稚武の天皇と謂す〉の随身、肺脯の侍者なり。天皇、磐余の宮に住みたまひし時、天皇、后と大安殿に寐テ婚合したまへる時に、栖軽知ら不して参ゐ入りき。天皇恥ぢて輟みぬ。時に當りて空に雷鳴る。即ち天皇、栖軽に勅して詔はく「汝、鳴雷を請け奉らむや」とのたまふ。答へて曰さく「請けたてまつら将」とまをす。天皇詔曰はく「爾あらば汝請け奉れ」とのたまふ。栖軽勅を奉り宮より罷り出で、緋の蘰を額に著け、赤き幡桙を擎げて、馬に乗り、阿部の山田の前の道と豊浦寺の前の路とより走り往きて、軽の諸越の衢に至り、叫囁び請けて言はく「天の鳴雷神、天皇請け呼び奉る云々」といふ。然して此より馬を還して走りて言はく「雷神と雖も、何の故にか天皇の請けを聞か不らむ」といふ。走り罷る時に、豊浦寺と飯岡との間に鳴雷落ちて在り。栖軽見て即ち神司を呼び、輿篭に入れて大宮に持ち向かひ、天皇に奏して言さく「雷神を請け奉れり」とまをす。時に雷光を放ち明り炫けり。天皇見て恐り、偉シク幣帛を進り、落ちし処に還さ令めしかば、今に雷の岡と呼ぶ〈古京の小治田の宮の北に在り〉。

然して後時に栖軽卒せにき。天皇勅して留むること、七日七夜、彼の忠信を詠ひ、雷の落ちし同じ処に彼の墓を作りたまひ、永く碑文の柱を立てて言はく「雷を取りし栖軽が墓」といふ。此の雷悪み怨みて鳴り落ち、碑文の柱を踊え践み、彼の柱の析けし間に雷揲リテ捕へらる。天皇聞きて雷を放ちしに死な不。雷慌れて七日七夜留まりて在り。天皇の勅使、碑文の柱を樹てて言はく「生きても死にても雷を捕へし栖軽が墓」といふ。所謂古京の時に名づけて雷の岡と為ふ、語の本是れなり。）

本文中に「電」と「雷」の混用が見られるが、同じく雷神を指す語である。この説話には、二つの物語が載せられている。すなわち、少子部栖軽の「生前に雷を捉える説話」と「死後に雷を捉える説話」とである。

少子部栖軽が生前に雷を捉える説話については、関連する記事が『日本書紀』巻十四の雄略天皇七年七月条にも見られる。

丙子、天皇詔少子部連蜾蠃曰：「朕欲見三諸岳神之形。〈或云、此山之神為大物代主神也、或云菟田墨坂神也。〉汝膂力過人、自行捉来。」蜾蠃答曰：「試往捉之。」乃登三諸岳、捉取大蛇、奉示天皇。天皇不斎戒、其雷虺虺、目精赫赫。天皇畏、蔽目不見、卻入殿中、使放於岳。仍改賜名為雷。

（丙子に、天皇、少子部連蜾蠃に詔して曰はく、「朕、三諸岳の神の形を見むと欲ふ。或いは云はく、此の山の神をば大物主神と為ふといふ。或いは云はく、菟田の墨坂神なりといふ。汝、膂力人に過ぎたり。自ら行きて捉て来」とのたまふ。蜾蠃、答

へて曰さく、「試に往りて捉へむ」とまうす。乃ち三諸岳に登り、大蛇を捉取へて、天皇に示せ奉る。天皇、斎戒したまはず。其の雷虺きて、目精赫赫く。天皇、畏みたまひて、目を蔽ひて見たまはずして、殿中に却入れたまひぬ。岳に放たしめたまふ。仍りて改めて名を賜ひて雷とす。）

『日本書紀』の記載には百年後に成立した『日本霊異記』との相違点が明らかに見られる。両者の相違は、百年の経過の伝承の転化、筆録者の在り方の違いにあると思われるが、異伝の一つと見るのが妥当だと言わていれる[1)]。

いままで『日本霊異記』「捉電縁」が注目され、小子部栖軽の出自、雷神説話の成立、雷神説話の中国的要素などをめぐって膨大な研究が蓄積されていた[2)]。ただし、この説話の構造と作成意図との関わりについてまだ研究し検討する余地があると思う。本稿では、「生前に雷を捉える説話」をめぐり、小子部栖軽の関連する物語の由来を検討しながら、「生前に雷を捉える説話」と「死後に雷を捉える説話」の構造を比較文学的観点から探究し、「捉雷縁」の作成意図を解明してみたい。

１．小子部栖軽の姓・名をめぐる物語の由来

小子部の姓と関連する記事は、同じく『日本書紀』巻十四の雄略天皇六年三月条に以下のように見られる。

丁亥、天皇欲使後妃親桑、以勧蚕事。爰命蜾蠃〈蜾蠃、人名也。此云須我屡〉聚国内蚕。於是、蜾蠃誤聚嬰児奉献天皇。天皇大咲、賜嬰児於蜾蠃曰：「汝宜自養。」蜾蠃即養嬰児于宮牆下、仍賜姓為少子部連。

（丁亥に、天皇、后妃をして親ら桑こかしめて、蚕の事を勧めむと欲す。爰に蜾蠃〈蜾蠃は人の名なり。此をば須我屡と曰ふ〉に命せて、国内の蚕を聚めしめたまふ。是に、蜾蠃、誤りて嬰児を聚めて、天皇に奉献る。天皇、大きに咲ぎたまひて、嬰児を蜾蠃に賜ひて曰はく、「汝、自ら養へ」とのたまふ。蜾蠃、即ち嬰児を宮墻の下に養す。仍りて姓を賜ひて、少子部連とす。）

本条では小（少）子部連という姓の成立を述べている。すなわち、蜾蠃は蚕を集める勅を奉るが、間違えて各地から多くの嬰児を集めてきて献上したため、天皇はこれらの嬰児を蜾蠃に賜い、養育させた。この嬰児を養育することから、少子部連の姓が与えられたとという。

蚕の読みは「かいこ」であり、飼い子を意味する。つまり食べ物を与えて養い育てる子の意であるから、子供を集めて養うことと関連付けたのであろう。『新撰姓氏録』山城国諸蕃の「秦忌寸」の条には「（大泊瀬稚武天皇）天皇遣使小子部雷、率大隅・阿多・隼人等捜

括鳩集、得秦民九十二部一万八千六百七十人、遂賜於酒。爰率秦民、養蚕織絹（天皇、使小子部雷を遣し、大隅・阿多・隼人等を率て、捜括鳩集めしめたまひ、秦の民九十二部一万八千六百七十人を得て、遂に酒に賜ひき。爰に秦の民を率て、蚕を養ひ絹を織る）」とあるように、小子部雷（蜾蠃、栖軽）は、秦民を率いて「蚕を養い、絹を織る」ことを行ったとされる。この記事は後出のものであるが、「天皇、后妃をして親ら桑こかしめて、蚕の事を勧めむと欲す」ことを、「天皇之随身肺脯侍者」である小子部蜾蠃（栖軽）は容易に知ることができるはずである。したがって、この氏姓伝承は、小子部蜾蠃の後裔たちに伝えられたものであるが、信じられないものであろう。いったい、小子部蜾蠃のこの伝承は、どのように作られたのであろうか。

また、蜾蠃は『万葉集』巻四の三七九一番の歌には「飛び翔る蜾蠃のごとき腰細に取り飾らひ」とあり、ジガバチのことである。晋の干宝『搜神記』巻十三の「蜾蠃」条には、

> 土蜂、名曰蜾蠃。今世謂蜩蛹、細腰之類。其為物雄而無雌、不交不産。常取桑虫或阜螽子育之、則皆化成己子。亦或謂之螟蛉。『詩』曰「螟蛉有子、蜾蠃負之」是也。
>
> （土蜂、名づけて蜾蠃と曰ふ。今の世では蜩蛹と謂はれ、細腰の類なり。其の為す物は雄で雌無し、交じず産まず。常に桑虫或は阜螽の子を取りて之を育て、則ち皆己の子と化け成す。亦た或は之を螟蛉と謂ばれる。『詩』に「螟蛉有子、蜾蠃負之」と曰ふことは是なり。）

とあり、蜾蠃は常に桑虫或いは阜螽（蝗）の子を養い育て、自己の子とすることが記されている。このうち「桑虫」とは、蚕のことである。「詩」とは『詩経』のことを指し、『詩経』の「小雅·小宛」には「螟蛉に子あり、蜾蠃これを負う。」とあって、青虫である螟蛉は子供を養育せず、螟蛉の子は蜾蠃が背負って養い、ついに自分の子にするのである。そのため、「螟蛉」の語は、義理の子の代名詞とされる。『魏書』巻五十二の胡叟伝に「叟不治産業、常苦飢貧。然不以為恥。養子字螟蛉、以自給養（叟は産業を治めず、常に飢貧に苦しむ。然れば子を養し螟蛉を字とし、以って自ら給養す）」とあり、胡叟の養子は螟蛉と名付けられている。　これは、蜾蠃が蚕を集めるところを誤って嬰児を集めて献上したことに由来するのであろう。したがって、『日本書紀』に他人の子を養う蜾蠃（蠃）と表記されているのは、「螟蛉有子、蜾蠃負之」という『詩経』の典故にもとづくに違いないだろう。

『日本書紀』の約百年後に成立した『日本霊異記』の撰者は、前述の雄略天皇紀の蜾蠃関連説話を知り、または前述の雄略天皇紀の記事に基づいて「捉電縁」説話を作成したと想像することもできよう。しかし、柳田国男氏は『日本霊異記』の「捉雷縁」説話が『日本書紀』とは別種の資料に依ったものであると指摘している[3)]。この「別種の資料」が何かは明示されていないが、『搜神記』などの中国古典籍にある関連の物語からの影響があったと考えられる。近年、『日本霊異記』の関連説話は『搜神記』などの中国古典籍にある関

連の物語を翻案したものであると言われ[4]。そのため、『日本霊異記』の撰者は『搜神記』や『詩経』などの中国古典籍にある「蜾蠃」のことを知っていたと思われる。

しかし、『日本霊異記』には、「蜾蠃」ではなく、「栖軽」と表記されている。これはいったいなぜであろうか。

上述の「捉電縁」説話によると、主人公の小子部栖軽は雄略天皇の勅をうけて宮より罷り出で、軽の諸越の衢に至り、「天の鳴雷神、天皇請け呼び奉る云々」と叫び請けている。軽とは、現在の奈良県橿原市大軽あたりの古地名であり、下ツ道と上ツ道の延長上、「安倍―山田―雷―丈六」をつなぐ道との交点、すなわち古代交通の要衝である。諸越の衢といわれるように、この軽衢には市場が置かれ、古くから軽の市と呼ばれていた。また、軽の坂上には百済から献上された良馬が飼育されていたと『日本書紀』には記される。この栖軽という名は、軽に栖むことから、名付けられたものであろう。

先に見た『日本書紀』雄略天皇七年七月丙子条には、少子部連蜾蠃の名を改めて雷という名を賜ったとある。『新撰姓氏録』山城国諸蕃の「秦忌寸」の条には「天皇、使小子部雷を遣し、大隅・阿多・隼人等を率て、搜括鳩集めしめたまふ」とあるように、小子部蜾蠃（栖軽）は確かに雷の名前であらわれている。

「捉電縁」説話には、雷の落ちた場所を雷の岡と呼ぶと記されている。「今に雷の岡と呼ぶ。古京の小治田の宮の北に在り」とあるが、この付記は古い話の発想形式であり、語（こと）は物語であり、言葉という意味に解すべきではない。こうした言葉――例えば、諺・地名説明の記憶と興味と教訓は、日本の古くからの説話の発想であったのである[5]。

雷の落ちた場所、すなわち雷の岡が飛鳥の小治田宮の北にあることを明記するのは、説話の信憑性を増やし強めようとするためだと思われる。『日本霊異記』では蜾蠃ではなく、栖軽と表記されていることも、これと同じ考えによるであろう。

２．生前に雷を捉える説話の構造

少子部栖軽が生前に雷を捉える説話は、『日本霊異記』の「捉電縁」説話と『日本書紀』の雄略天皇紀に見られるが、両書には相違点が多いと言えよう。

まず、「雷を捉える」理由と「雷を見る」様子が異なっている。『日本霊異記』には、

> 天皇、后と大安殿に寐テ婚合したまへる時に、栖軽知ら不して参ゐ入りき。天皇恥ぢて輟ミヌ。時に當りて空に雷鳴る。即ち天皇、栖軽に勅して詔はく「汝、鳴雷を請け奉らむや」とのたまふ。

とあり、天皇とその后とが交合する時、空に雷が鳴るとされるが、『日本書紀』には、

> 天皇、少子部連蜾蠃に詔して曰はく、「朕、三諸岳の神の形を見むと欲ふ。汝、膂

力人に過ぎたり。自ら行きて捉て来」とのたまふ。

とあるように、三諸岳の神の様子を見たいという雄略天皇の考えが示されるだけである。また、『日本霊異記』にある「奉請」などの敬意用語と異なり、『日本書紀』には「捉来」と記される。

人間界の最高の権力者たる天皇と神々とがいかに関わりあうかは、重要な課題であった。『日本書紀』では、雄略天皇以前の天皇に対して、神々（例えば雷神）は優位性をもって描かれるが、雄略天皇の記事では「捉来」と書いてあるように、対等ないし雄略天皇の優位性が窺われる。『日本書紀』には単なる「三諸岳の神の形を見むと欲ふ」とあるころから、やはり雷神に遠慮をせず、ある意味では神に対する挑戦ともいえるだろう。しかし、『古事記』や『日本霊異記』に記されるように、神々の権威が発揚され、天皇を屈服させるのは、やや古態を保持している[6)]。

また、記紀に記されている伊邪那美・伊邪那岐の婚合神話のように、上古において男女婚合の前には、まず神に申告して、神から許可を得る行事を行う必要があった。『素女経』に「房中禁忌」の一つとして「雷電霹靂」と記されているように、雷鳴の際に男女が交わりをなすと、雷が落ちるという言い伝えが存在すると言われている[7)]。「時に當りて空に雷鳴る」ことから、「后と大安殿に寐テ婚合したまへる」雄略天皇は、先に雷神に申告したわけではないだろう。そのため、雷の参内という事態を引き起こすことになったと思われる。したがって、雷鳴と同衾に関するモチーフは、中国的な要素であり、日本独特のものではないと考える[8)]。

そして、天皇が雷を見る時の様子について、『日本霊異記』には、

時に雷光を放ち明り炫ケリ。天皇見て恐り、偉シク幣帛を進り、落ちし処に還さ令めす。

とあるが、『日本書紀』には、

天皇、斎戒したまはず。其の雷虺きて、目精赫赫く。天皇、畏みたまひて、目を蔽ひて見たまはずして、殿中に却入れたまひぬ。岳に放たしめたまふ。

とあるように、天皇の「斎戒したまはず」の様子も記されているのである。

神に逢う時「斎戒」しなければならないことを知るはずである雄略天皇は、「斎戒したまはず」、雷の怒りを招いたため、雷を直視しえず逃げている。これらの儀式や神事を丁重にとりおこなわず、雷をものにしない態度、制御しようとした作為は、やはり天皇としての失格的な行為と言えよう。『日本書紀』では雄略天皇を大悪天皇とするが、このようなこ

とも含むのだろう[9]。

つまり、両書では「雷を捉える」理由と「雷を見る」様子が異なっているが、いずれも雄略天皇が従来の作法を尊重しない悪人であるように描かれている。

次に、捉える神の名が異なることである。『日本霊異記』には、雷神を明記する。それに対して、『日本書紀』には「三諸岳の神」とされるが、「或いは云はく、此の山の神をば大物主神と為ふといふ。或いは云はく、菟田の墨坂神なりといふ」とあるように、「三諸岳の神」は大物主神、または菟田の墨坂神のことであるという異説がある。しかし、「乃登三諸岳、捉取大蛇、奉示天皇」とあり、大蛇を捉えたことを記すように、蛇の形をしている神である。『釈日本紀』の「述義八」所引の『天書』逸文にも「詔（蜾）蠃献御衆山大神。蠃手挌大神。蠃手挌七丈余献覧（詔して（蜾）蠃、御衆山大神を献せしめたまふ。蠃、手に大神を挌へむ。蠃、手に七丈余を挌へて献覧る）」とあり、「雷」神は蛇の形をしている神だとされる。また、「其雷虺虺」の「虺」とは『字匯』に「虺、蛇属、細頸大頭、色如綬文、大者長七八尺」とあり、すなわち蛇である。また『詩経』の「国風・邶風・終風」には「虺虺其雷」との一句があり、「虺虺」は雷鳴がとどろいているのを描いた語である。

蜾蠃が登った「三諸岳」とは、『日本書紀』巻五の崇神天皇十年九月壬子条に見られる「御諸山」（三諸岳と発音同じ、同じ山を指す）のことである。

> 是後、倭跡跡日百襲姫命為大物主神之妻。……爰倭跡跡姫命心裏密異之、待明以見櫛笥、遂有美麗小蛇。其長大如衣紐、則驚之叫啼。時大神有恥、忽化人形、謂其妻曰、「汝不忍令羞吾、吾還令羞汝。」仍践大虚、登于御諸山。
>
> （是の後、倭跡跡日百襲姫命、大物主神の妻と為る。……爰に倭跡跡姫命、心の裏に密かに異ぶ。明くるを待ちて櫛笥を見れば、遂に美麗しき小蛇有り。其の長さ大さ衣紐の如し。則ち驚きて叫啼ぶ。時に大神恥ぢて、忽に人の形と化りためふ。其の妻に謂りて曰はく、「汝、忍びずして吾に羞せつ。吾還りて汝に羞せむ」とのたまふ。仍ち大虚を践みて、御諸山に登ります。）

この記述によると、大物主神は蛇の形をしている神である。また、『日本霊異記』巻の上第三縁「得雷之憙令生子強力在縁」には、「然後所産児之頭纏蛇二遍、首尾垂後而生（然る後に産れし児の頭は、蛇を二遍纏ひ、首・尾を後に垂れて生る）」とあり、雷神から授けられた子は蛇と同時に生まれたという。

また、唐の戴孚『広異記』（766～779 年間成立）所収の欧陽忽雷説話には「与雷師戦、衣並焦巻、形体傷腐、亦不之止。自辰至酉、雷電飛散、池亦涸竭。中獲一蛇、狀如蚕、長四五尺、無頭目」とあり、ここでも雷神は蛇の形をしている神だとされる。これは、雷神と蛇とが同一視されている証拠の一つであり、雷神信仰と蛇信仰の持つ深い関連が見られる。

蛇は水の神またはその使者と見なされ、雨乞いの対象となり、雷神とも見なされたのである。雷神は農耕に携わる者には広く信仰されており、司水神の代表的な存在であるため、雷電を行使すると思われる龍とよく同一視されている。『山海経』巻十三には「雷沢有神、龍身而人頭。鼓其腹則雷」とあり、雷神は「龍身」の形態をとる。『周易』にも「震為龍」とあるように、震すなわち雷神は龍のかたちをしている。

つまり、両書にあらわれる神の名は異なるが、いずれも蛇の形をしている神である。蛇が龍と同様の存在と認識されることから、雷神は蛇神の変相であるとイメージされる。雷と蛇、龍とが同一の存在であるというのは古代中日両国人の共通認識だと思われる。

第三に、雷を捉える装身具と過程が異なることである。『日本書紀』には、

乃ち三諸岳に登り、大蛇を捉取へて、天皇に示せ奉る。

とあり、捉える過程については何も記されていないが、『日本霊異記』には、

（栖軽）緋の蘰を額に著け、赤き幡桙を擎ゲテ、馬に乗り、阿部の山田の前の道と豊浦寺の前の路とより走り往きて、軽の諸越の衢に至り、叫囁び請けて言はく「天の鳴雷神、天皇請け呼び奉る云々」といふ。然して此より馬を還して走りて言はく「雷神と雖も、何の故にか天皇の請けを聞か不らむ」といふ。走り罷る時に、豊浦寺と飯岡との間に鳴雷落ちて在り。栖軽見て即ち神司を呼び、輿篭に入れて大宮に持ち向かふ。

とあるように、かなり詳しく雷を捉える装身具と過程を説明している。そして、この中には、文化的な要素が潜んでいる。

「緋の蘰を額に著け」るのは、『日本霊異記』巻中の第七縁「智者誹妬変化聖人而現至閻羅闕受地獄苦縁」に見られる。

時閻羅王使二人来、召於光師。向西而往、見之前路有金楼閣。（中略）其門左右立二神人、身著鉀鎧、額著緋蘰。

（時に閻羅王の使二人来て、光師を召す。西に向かひ往き、見れば前路に金楼閣有り。（中略）其の門の左右に、二の神人立ち、身に鉀鎧を著、額に緋蘰を著けたり。）

つまり、この「緋の蘰を額に著け」るのは地獄王閻羅の使いの行為でもあるように、この姿は神の象徴と目されるのである。この「緋の蘰」とは、『古事記』所収の「天の岩戸説話」に見える「真拆鬘」（蘰と発音同じ）のことであり、神の象徴なればこそ、雷神を捉えることができたのであり、膂力が人に過ぎるという偉大な力を持っていると言われている[10)]。

雷は栖軽の駆け抜けた道に落ちたことからも、少なくともそれには邪霊を払う呪的意味

が認められる[11]。小子部連は神八井耳命を祖とする斎い人の系譜であって[12]、「電岡」はその祭りの場である[13]。「栖軽見て即ち神司を呼び、輿篭に入れて大宮に持ち向かふ」という表現は、まさに小子部栖軽が斎人としての役割を演ずるのではないか。

つまり、「馬に乗り、阿部の山田の前の道と豊浦寺の前の路とより走り往く」との躍動的表述は、「雷岡」地名の由来と関わらせると同時に、奇異な話の筋を追って聴き手の興味をいかにもそそる話し手の技巧を活かすという狙いもあったと言われている[14]。

３．死後でも雷を捉える説話の構造

少子部栖軽の死後に雷を捉えることについて、『日本霊異記』には、

> 然る後時に、栖軽卒せぬ。天皇勅して七日七夜留めたまひ、彼の忠信を詠ひ、電の落ちし同じ処に彼の墓を作りたまひき。永く碑文の柱を立てて言わく：「電を取りし栖軽の墓なり」といへり。此の電、悪み怨みて鳴り落ち、碑文の柱を踊え践み、彼の柱の析けし間に、電揲りて捕へらる。天皇、聞して、電を放ちしに死なず。雷慌れて、七日七夜留りて在り。

とあり、栖軽を恨む雷は「碑文柱」を踏んで復讐しようとするが、柱の裂け目に挟まってしまい、捕捉されてしまう。

この説話の中に「七日七夜」の語が出てくる。『魏書』胡国珍伝には「また詔して薨ずるより七七に至るまで、皆千僧斎を設くる」とあり、胡国珍の死後、七日に一度、千僧斎を設けて祭ると記されている。『瑜珈論』という仏経典にも、人の死後に生縁を求めるために七日を一期とすると記されている。おそらくこの仏教認識を受容した中原地域では、人の死後の七日ごとに霊座を設け、「碑文の柱」すなわち木主を置き祭るという習慣が盛んに行われ、これが後に日本などの周辺地域に伝播したのであろう。

唐の戴孚『広異記』所収の「狄仁傑説話」には、

> 唐代州西十余里有大槐。霹靂所撃、中裂数丈。雷公夾於樹間、吼如霆震。
> （唐の代州西十余里、大き槐有り。霹靂に撃たれる所、中に数丈裂く。雷公は樹の間に夾まれ、吼えること霆震の如き。）

とある。また、唐の杜光庭『神仙感遇伝』巻一の「葉遷韶説話」には、

> 避雨於大樹下。樹為雷霹、俄而卻合。雷公為樹所夾、奮飛不得遷。
> （大樹の下に雨を避ける。樹は雷に霹たれ、俄かに合わんとす。雷公は樹に夾まれる所、奮い飛びて遷することを得ず。）

とあり、雷公が樹の裂け目に挟まったことを記す。これらの記述から「死後に雷を捉える」説話に見える雷が木に挟まれるというモチーフは中国文学の構想から受容したものだと考えられる。

また、生前に雷を捉えた道具として、「赤き幡桙を擎ゲ」るのであるが、死後に雷を捉えるのは、「碑文の柱」である。いずれも木製の道具である。唐の張読『宣室志』に所収される「蕭氏子説話」には、

> 忽暴雷震蕩檐宇、久而不止。俄聞西垣下、窸窣有声、蕭恃膂力、曽不之畏。榻前有巨棰、持至垣下。俯而撲焉、一挙而中。
>
> （忽ち暴雷は檐宇を震蕩し、久しくて止まず。俄かに西垣の下に窸窣たる声有るを聞き、蕭は膂力を恃み、曽て之を畏れず。榻の前に有る巨棰を持ちて垣の下に至る。俯きて撲ち、一挙して中した。）

とあり、雷は「巨棰」によって殴られたという。「棰」とは棒のことである。「碑文の柱」は「棰」と同じく、いずれも木製の道具である。

ただし、『日本霊異記』巻上の第三縁「得雷之憙令生子強力在縁」には、

> 時電鳴。即恐驚、擎金杖而立。即電堕於彼人前。
>
> （時に電鳴る。即ち恐り驚き、金の杖を擎げて立つ。即ち電彼の人の前に堕ちる。）

とあり、雷を捉える道具は「金の杖」とされる。『延喜式』巻三の神祇三「臨時祭」には、「霹靂神祭」の祭料に「鍬二口」、解除料に「鍬四口」が供され、また「鎮水神祭」にも「鍬四口」が奉られることが記されている。『捜神記』巻十二の「楊道和説話」に「晋扶風楊道和夏于田中、値雷雨、至桑樹下。霹靂下撃之。道和以鋤格、折其肱。遂落地、不得去（晋の扶風の楊道和は夏、田の中に、雷雨に値ひて、桑樹の下に至り。霹靂は下りて之を撃つ。道和は鋤の格を以て其の肱を折る。遂に地に落ちて、去ることを得ず）」とあり、また『酉陽雑俎』巻八の「王幹説話」には「（王）幹遂掩戸、荷鋤乱撃。雷声漸小、雲氣亦斂（幹、遂に戸を掩い、鋤を荷ひて乱りに撃つ。雷の声漸く小くなり、雲氣亦斂むる）」とあるように、雷神は鍬・鋤などで殴ることができるものとして描かれている。

『日本書紀』巻五の崇神天皇九年三月戊寅条に「天皇夢有神人、誨之曰、以赤盾八枚、赤矛八竿、祠墨坂神。亦以黒盾八枚、黒矛八竿、祠大坂神（天皇の夢に神人有して、誨へて曰はく、赤盾八枚、赤矛八竿を以て墨坂神を祠れ。亦黒盾八枚、黒矛八竿を以て、大坂神を祠れとのたまふ）」とあり、墨坂神を祠る際に使う赤矛は前述の「赤き幡桙」と同じものであろう。

これらからすると、この「金杖」とは木製の柄と金属製の鍬・鋤で作った道具であろう。木製の柄であるため、避雷の呪能を持つと思われる。「赤き幡桙を擎ゲ」る栖軽の場合、雷は栖軽の駆け抜けた道に落ちたことから、この「赤き幡桙」は「金杖」と同じく避雷の呪能を有する器具であり、少なくともそれには邪霊を払う呪的意味が認められる[15]。

おわりに、「捉雷縁」の作成意図

『日本書紀』の所伝と比べてみると、『日本霊異記』において、「生前に雷を捉える説話」では雷神に対して畏敬の念が多く表出されるのに対して、「死後に雷を捉える説話」では雷神への態度には畏敬の念が感じられず、軽視へと転換したと言える。この説話のなかには、雷神が威神としての神威が衰え、軽視される観念が存在したと言えよう[16]。

『日本霊異記』に見られる「死後に雷を捉える説話」はもとからあったものではなく、後世的所産であると言われている[17]。すなわち、「死後に雷を捉える説話」は後日譚であり、雷神の失態を劇画化して描き出そうとしたもので、雷神の哀微に焦点が当てられているとされる。

雷神の哀微に関する説話は、先に参照した『捜神記』巻十二の「楊道和説話」や『酉陽雑俎』巻九の「王幹説話」、『広異記』の「狄仁傑説話」、『神仙感遇伝』「葉遷韶説話」などの九世紀以前に成立した中国説話集にしばしば見られる。そのため、「死後に雷を捉える」説話にある雷が木に挟まれるというモチーフは中国文学の構想から受容していると考えられる。

しかし、『日本霊異記』には、作者景戒特有の宗教意識の裏打ちのあることは、言うまでもない。「捉雷縁」説話は仏の霊威や功徳を説く話ではないが、仏教を信じず、固有信仰を保つ人々が崇拝する固有神の代表的存在、すなわち雷神の衰微を説くことを通じて、民衆の心に繋がり、固有信仰を脱出させて、仏菩薩やその眷属神の信仰と功徳を信じるよう勧めるものであろう。仏教布教のために編纂された『日本霊異記』の上巻冒頭という極めて重要な位置に非仏教説話である「捉雷縁」が置かれている意図は、そこにあるのではないか。

最後に指摘したいことは、『日本書紀』や『日本霊異記』に見られる「蚕＝子」「蛇＝雷神」の記述から、「捉雷縁」説話の成立背景にはやはり農耕文化の強い影響が見られることである。作者景戒はこの農耕文化の誕生と共に倫理化されてきた神話を効果的に取り込むことで、編纂意図を表現しようとしたのであろう。「捉雷縁」とは、まさに中国農耕文化的な要素を吸収して日本化した変異した説話だと考えられる。

漢字文化圏における中日比較文学の研究は、日本文学と中国文学との関係をもっぱら「影響」という相の下に明らかにしようとする立場に立ちながらも、文化的共性（普遍性）と個性（独特性）とを念頭に置き、ある固有の文化伝統を異なる文化伝統との比較対照のうちに考察して、その変容した文化、すなわち「文化変異体」[18]の実相を究明していくこと

であると考える。筆者の研究理念を示して本稿を締め括りたい。

なお、本稿は、中国国家社会科学基金重大項目「中日合作版・中日文化交流史」（番号：17ZDA227、研究代表者：葛継勇）による研究成果の一部である。

注

1)島明「小子部栖軽考――日本霊異記成立への序説」（『国学院雑誌』第 68 巻 6 号、1967 年 6 月）。

2)島明「小子部栖軽考――日本霊異記成立への序説」（『国学院雑誌』第 68 巻 6 号、1967 年 6 月）、原田行造「『日本霊異記』所収雷神説話と飛鳥元興寺」（『金沢大学教育学部紀要』第 24 号、1975 年 12 月）、寺川真知夫「『捉雷縁』の仏教的意味――固有神の衰微を説く話」（『日本国現報善悪霊異記の研究』和泉書院、1996 年）、寺川真知夫「『霊異記』の文字考証――上巻三縁の金杖と二十八縁の破損文字」（島田勇雄先生古稀記念会編『ことばの論文集』、明治書院、1981 年）などをご参照ください。

3)柳田国男『昔話覚書』三省堂、1943 年。

4) 河野貴美子「『日本霊異記』の予兆歌謡をめぐって--史書五行志・『捜神記』・『法苑珠林』との関係」（『説話文学研究』第 37 号、2002 年）、同「『日本霊異記』の編纂と『捜神記』・『法苑珠林』」（和漢比較文学会、中日比較文学学会共編『新世紀の日中文学関係 ： その回顧と展望』勉誠出版，2003 年）、同「『捜神記』と『日本霊異記』の類話をめぐる考察」（早稲田大学古代文学比較文学研究所編『交錯する古代』勉誠出版，2004 年）などをご参照。

5)島明「小子部栖軽考――日本霊異記成立への序説」（『国学院雑誌』第 68 巻 6 号、1967 年 6 月）。

6)原田行造「『日本霊異記』所収雷神説話と飛鳥元興寺」（『金沢大学教育学部紀要』第 24 号、1975 年 12 月）。

7)市村宏「霊異記第一話考」、『上代文学研究会報』第 16 号、1966 年 11 月。

8)中田祝夫氏は、「雷鳴と同衾の場合など、中国的要素ではなく、まことに『霊異記』独特のものであるに違いない」と指摘している。中田祝夫「解説」、『日本霊異記』、小学館、1975 年、20 頁。

9)『日本書紀』巻十四の雄略天皇二年十月是月条には「天皇以心為師、誤殺人衆。天下誹謗言：太悪天皇也（天皇、心を以て師としたまふ。誤りて人を殺したまふこと衆し。天下、誹謗りて言さく：大だ悪しくまします天皇なり）」とある。

10)島明「小子部栖軽考――日本霊異記成立への序説」（『国学院雑誌』第 68 巻 6 号、1967 年 6 月）。

11)寺川真知夫「『霊異記』の文字考証――上巻三縁の金杖と二十八縁の破損文字」（島田勇雄先生古稀記念『ことばの論文集』明治書院、1981 年）。

12)『新撰姓氏録』の「左京皇別上」には「小子部宿祢、（中略）神八井耳命之後也。大泊瀬稚

武天皇御世、所遣諸国、取斂蚕児。誤聚小児貢之。天皇大咲、賜姓小子部連（小子部宿祢、（中略）神八井耳命の後なり。大泊瀬稚武天皇の御世、諸国に遣され、蚕児を取り斂むべきを、誤りて小児を聚めて貢る。天皇大きに咲ひて、姓を小子部連と賜ふ)」とあり、また『古事記』巻中の神武天皇段には「爾神八井耳命、譲弟建沼河耳命曰：(中略）僕者扶汝命、為忌人而仕奉也（爾に神八井耳命、弟建沼河耳命に譲りて曰しけらく：(中略）僕は汝命を扶けて、忌人と為りて仕へ奉らむ)」とあり、小子部連は神八井耳命を祖とする忌人（斎い人）の後裔だとされる。

13) 山本節「雄略天皇と小子部栖軽」(『スサノオ第 3 号　特集　力と光と闇』、2005 年 1 月)。

14) 島明「小子部栖軽考――日本霊異記成立への序説」(『国学院雑誌』第 68 巻 6 号、1967 年 6 月)。

15) 寺川真知夫「『霊異記』の文字考証――上巻三縁の金杖と二十八縁の破損文字」(島田勇雄先生古稀記念『ことばの論文集』明治書院、1981 年)。

16) 寺川真知夫「『捉雷縁』の仏教的意味――固有神の衰微を説く話」、『日本国現報善悪霊異記の研究』和泉書院、1996 年。

17) 原田行造「『日本霊異記』所収雷神説話と飛鳥元興寺」(『金沢大学教育学部紀要』第 24 号、1975 年 12 月)。

18)「文化変異体」という概念は、今年（2022 年）8 月 6 日になくなった嚴紹璗氏によってはじめて提唱した。詳細は『比較文学与文化「変異体」研究』(復旦大学出版社、2011 年 6 月）をご参照ください。この場を借りて嚴先生の学恩に、あらためて感謝の言葉を申し上げたいと思う。先生の御冥福を衷心から祈りいたします。

参考文献

嚴紹璗（1987 年)『中日古代文学関係史稿』湖南文芸出版社。

寺川真知夫（1996 年)『日本国現報善悪霊異記の研究』和泉書院。

中田祝夫校注・訳（1975 年)『日本霊異記』小学館。

坂本太郎他校注（1979 年)『日本書紀』岩波書店。

倉野憲司、武田祐吉校注（1979 年)『古事記　祝詞』岩波書店。

黒板勝美（1952 年)『新訂増補国史大系　延喜式』吉川弘文館。

佐伯有清（1962 年)『新撰姓氏録の研究 本文篇』吉川弘文館。

竹田晃訳（1970 年)『捜神記』東洋文庫。

唐・段成式（1981 年)『酉陽雑俎』中華書局。

唐・戴孚（1992 年)『広異記』中華書局。

羅争鳴（2013 年)『杜光庭記伝十種輯校』中華書局。

A Comparative Literature Study on “Thunder Catching Story” in Nihon ryoiki

Ge Jiyong

Abstract

“Thunder Catching Story” in Nihon ryoiki consists of two parts, “Thunder Catching Story While He Was Alive” and “Thunder Catching Story After His Death”, both of which are related to the protagonist Tisakobe sugaru. In order to enhance the credibility of the story, Nihon ryoiki was not maked as “栖軽 Sugaru” based on “蜾蠃 Sugaru” derived from Chinese ancient classics as In Search of the Supernatural and The Book of Poetry. Elements of Chinese culture can be found everywhere in “Thunder Catching Story While He Was Alive” which also refers to the related stories in Nihon syoki containing the unique culture of Japan. The writing intention of the story is quite different from that of Nihon syoki where Yuryaku tenno was portrayed as a villain. “Thunder Catching Story After His Death” is clearly based on the idea of Chinese literature where the thunder was caught by a wooden pillar, but “Thunder Catching Story While He Was Alive” also shows a great skill in attracting the reader with an interesting storyline. In conclusion, it can be said that “Thunder Catching Story” absorbed the elements of Chinese farming culture and became a Japanese variation.

Keywords : Nihon ryoiki, Nihon syoki, “Thunder Catching Story”, intention of writing, elements of farming culture.

計量テキスト分析による大隈重信の演説資料に関する一考察

橋本 恵子（福岡工業大学短期大学部）

要旨

本稿では、計量テキスト分析の手法を用いて、大隈重信の「憲政に於ける輿論の勢力」の内容分析を行った。その結果、頻出語は「国民」「輿論」「於」「勢力」「政治」「帝国」「議会」「国家」「社会」「選挙」であった。先行研究で指摘された「覚醒」「鍵」という語は、それ自体は非頻出語であるが、いずれも頻出語と共起して出現していたことから、内容的に重要な語であると考えられる。コーディングにより、「あるんである」「憲政」「輿論」「勢力」「国民」「民主」「自由」「議会」「選挙」「漢文調語」というコード名で集計した結果、「輿論」「憲政」「国民」の出現頻度が高く、「民主」「自由」の出現頻度は低かった。また、「輿論」「憲政」「国民」「選挙」は演説資料全体で使用されていた。

章ごとの特徴は次の通りである。「1 章 憲政と輿論」では、「民主」「あるんである」以外の全てのコードが使用されていた。「2 章 大切なる鍵」では、全てのコード（「あるんである」「憲政」「輿論」「勢力」「国民」「民主」「自由」「議会」「選挙」「漢文調単語」）が使用されていた。「3 章 社会の統制力」では、他の章では使用されていた「勢力」が未使用であった。「4 章 帝国の将来の運命を支配する選挙」では、他の章では使用されていた「漢文調単語」が未使用であった。なお、今回の分析は、KH Coder を用いて行った

キーワード：　演説資料、大隈重信、計量テキスト分析、内容分析

はじめに

本稿では、大隈重信の演説資料である「憲政に於ける輿論の勢力」を計量テキスト分析の手法を用いて内容分析した結果について論ずる。

本演説は、1915（大正 4）年に録音された SP レコード（音声資料）であり、付録として全文翻刻がついている。また、『大隈伯演説集 高遠の理想』(1915)、さらに『大隈重信演説談話集』(2016) に収録された。今回の分析は、『大隈重信演説談話集』(2016) に収録された「憲政に於ける輿論の勢力」のテキストデータを、KH Coder を用いて行った。KH Coder は、計量テキスト分析やテキストマイニングのためのフリーソフトウェアである。計量テキスト分析とは、アンケート自由記述やインタヴュー記録のようなテキスト型ないし文章型のデータを計量的に分析する方法である。この方法は社会科学の分野で歴史がある内容

分析（content analysis）の考え方にもとづいている（樋口 2019：18）。

１．分析した演説資料

大隈重信の「憲政に於ける輿論の勢力」は、1915（大正 4）年 3 月に帝国議会の解散総選挙（第 12 回衆議院議員総選挙）に向けて行われた演説であり、1915 年 3 月 2 日に大隈邸で蓄音機に吹き込まれ、全国各地に回送された。この音声資料（SP レコード）は、日本の首相が直接政治を主題とした演説を吹き込んだ最初のものとされ、製作の目的やテーマ等を検討すると大正デモクラシーの基調を象徴した内容といえるだろう。

２．先行研究

本演説資料に関する研究として、揚妻（2009）、大日方（2017）が挙げられる。揚妻は、選挙権を持つことの責任感や「輿論」が政治を動かす力になることを聴衆に覚醒せんとする内容となっていると指摘している（2007：2）。また、大日方は、本演説のポイントとして、帝国議会開設から 25 年にもなるのに、まだ選挙が不完全だと述べている点、世論を政治家がちゃんと導くことが必要だとして、議会を左右する「鍵」を握るのは国民であり、国民の「覚醒」を促すことが必要だと主張している点、選挙の意味、憲政の意味を強調している点を挙げている（2017：190）。

筆者は、これまで日本史学の方面から研究され、言語学的分析がなされてこなかった本演説を音声面から考察し、大隈の演説の特徴を明らかするとともに、印象評定を行ってきた。演説資料の SP レコードには全文翻刻が付属しているが、実際の音声資料とは異なる部分がある。筆者自身が文字起こしした結果、例えば言いよどみや言い直しは全文翻刻では削除され、実際に聞き取り不能な部分には言葉が補足されていた。また、大隈の特徴的な文末表現である「～であるんであります」等は、「あるのであります」のように、話し言葉の発音通りではない部分が認められた。

音声面から本演説を考察した結果、大隈の演説には次のような特徴が認められた。①「～あるんであります」という文末、②謡曲調、詩吟、平板化、語尾上げ、語尾伸ばし、③佐賀（大隈の出身地：肥前）方言「シェ」が殆ど出現しない、④「自治」「貴重なる」「恰も」が、「ジジ」「キジョーナル」「アダカモ」と濁音化して発音、⑤「これ」→「コエ」と発音（ｒ音の脱落）、⑥「而して」「然るに」「かくの如き」等の漢文調単語の多用、⑨多彩な一人称（「自己は」「吾輩」「わたしは」「一は」）の使用等である（橋本 2019：163）。

３．分析方法

分析の手順は、まず、インターネットの電子図書館である「青空文庫」で公開されている「憲政に於ける輿論の勢力」のテキストデータを対象に、計量テキスト分析を行い、頻出語を抽出した。その際、テキストデータに振られているルビは、分析に不要なため削除

した。また、共起ネットワークや対応分析を行い、データの全体像を確認した。

次に、先行研究で指摘された「国民」「輿論」「憲政」「政治」「議会」「覚醒」「鍵」「選挙」「あるんである」「漢文調単語」等が、本演説資料中のどの部分に、どのように使用されているのかを調査するため、コーディング（コーディングルール・ファイルを作成）を行い、さらに分析した。

４．分析結果

4.1　頻出語

頻出語は表 1 の通りである。紙幅の関係から、出現数 5 以上のものを示した。「国民」「輿論」「於（於て、於いて、於ける）」「勢力」「政治」「帝国」「議会」「国家」「社会」「選挙」が上位 10 語であった。なお、表中の網かけ部分は、先行研究で指摘された語である。それらの語の殆どが頻出しているが、「覚醒」（1 回）、「鍵」（3 回）の出現数は少なかった。また、音声資料の中で使用されていた多彩な一人称は、「自己」（2 回）、「吾輩」（1 回）、「一は」（2 回）であり、「わたし」は使用されていなかった。

大隈の表現で特徴的な「あるんである」「あるのである」は、「ある」に集約されていたため、当初、抽出されなかった。そのため、分析に使用できるように「語の取捨選択」で、「あるんである」「あるのである」を強制抽出するように前処理設定した結果、5 例がみつかった（図 1 参照）。実際の音声資料では、文末の多くに使用されていた「あるんである」「あるのである」という表現が、テキストデータでは「～である」と修正されていたため、出現頻度が低くなっていた。それにもかかわらず、敢えて「あるんである」「あるのである」という、くどいともいえる表現がそのまま使われている理由は、その箇所が、特に強調したい内容であることを示しているためと考えられる。

表 1　頻出語

抽出語	出現数	抽出語	出現数	抽出語	出現数	抽出語	出現数	抽出語	出現数
国民	27	政治	14	社会	11	而	8	統制	6
輿論	26	帝国	12	選挙	11	憲法	7	すべて	5
於	15	議会	11	法律	9	信じる	7	起つ	5
勢力	15	国家	11	憲政	8	今	6	導く	5
								発達	5

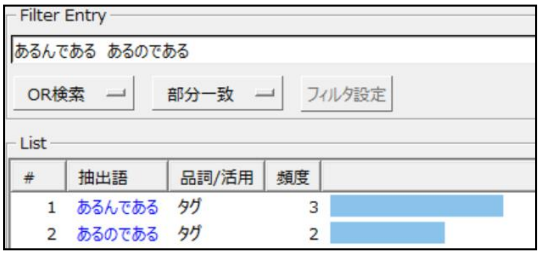


図 1　頻出語リスト

4.2　共起ネットワークと対応分析

図 2 は抽出語の共起ネットワークである。共起ネットワークは、よく一緒に使われていた語、つまり共起の程度が強かった語が線で結ばれる。内容分析の分野で古くから活用されている手法である。共起の強さは Jaccard 係数で測られている。Jaccard 係数は、語と語の関連性（共起性）の強さを表す指標である。1 に近ければ近いほど関連性が強く、0 に近ければ近いほど関連性が弱くなる。まずは、予断を交えずデータの全体像を探るため、抽出語全体の共起ネットワークを確認した。

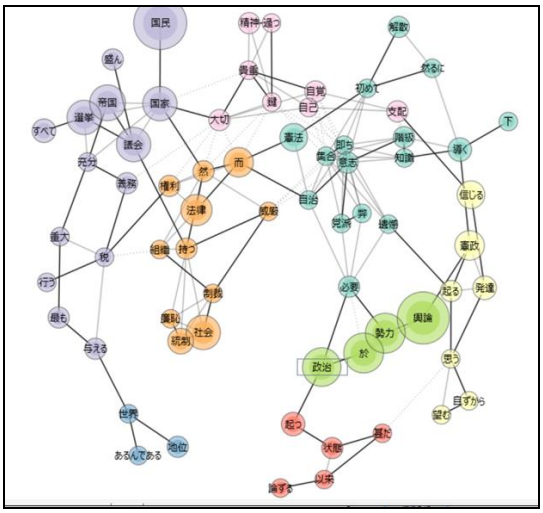


図 2　抽出語の共起ネットワーク

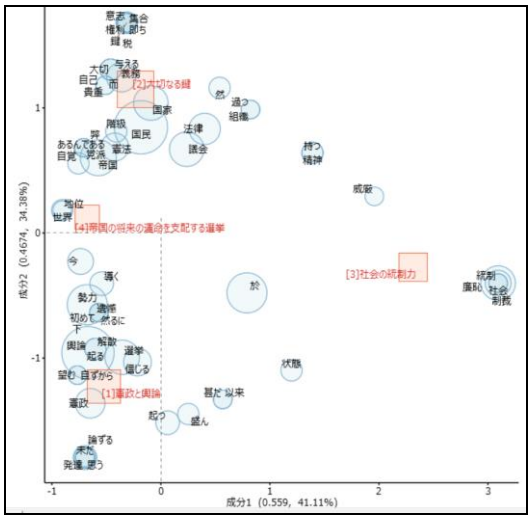


図 3　章ごとの対応分析

本演説は、[1]憲政と輿論、[2]大切なる鍵、[3]社会の統制力、[4]帝国の将来の運命を支配する選挙の 4 章からなっているため、各章の特徴を探るため、対応分析を実施した（図 3 参照）。対応分析では、原点（0, 0）に平均的なものが集まる。そのため、原点から見てどの方向に布置されているか、また、原点付近よりも端の方に、特徴語が布置されることに注目して分析する。

1 章では、「輿論」「導く」「勢力」「選挙」等の語が認められた。これらの語は、本文中で「憲政は輿論によって導かれるもの」「独裁政治の時代に於ても輿論の勢力は大なるもの」「自ずから輿論が起こらねばならない。」「選挙を繰返す事十回以上に経験を積んだに拘わ

らず、未だ選挙の状態が、遺憾ながら不完全なりという事を思いまして、甚だ憂慮に堪えぬ次第であります。」のように使用されていた。

2 章では、「国家」「国民」「議会」等の語が特徴的な語であった。本文中で「国家の意志は国民の意志」「政治家は、国民の指導者となって国民を導く、輿論を導く。ある場合には、輿論を制するという力がなくてはならぬ。」「帝国憲法は、国家の自治である。国民が集合して、而して国民的勢力が議会に集注さるるのである。」「国家的勢力は、何によりて導かるるかというと、即ち輿論である。この輿論の勢力が議会に集中されて、初めて帝国議会の威厳、帝国議会の信用がここに成立つのである。」のように使用されていた。

3 章では、「社会」という語が特徴的である。本文中では、「議会も過ちが多い。社会もまた過つ。これは社会の統率力が脆弱なる証拠」という表現がなされている。

4 章では、「地位」「世界」が特徴語であり、本文中で「帝国の地位は疑いもなく、世界の最も進んだ文明国と共同の地位に達せんとしつつあるのである。」と表現されていた。

4.3　コーディング

コーディングを行うことで、先行研究で指摘された分析者の観点を活かして、注目したいコンセプトを取り出し、分析をさらに深めることができる。つまり、特定のコンセプトを表わす「語の出現パターン」を記述したコーディングルールを作成することで、特定のテーマごとのコード数を集計することができる。

例えば、「国民」という事柄が表わすのは、「国民」以外に、「民衆」「民」等、様々な語がある。そこで、「民衆」「四民」「民」「臣民」という語に対して、「国民」とコード名をつけ、コーディングルールのテキストファイルを作成し、分析に使用した。表 2 は同様の方法で、その他の語についてもコーディングを行い、集計した結果である。コード名は、頻出語と先行研究で指摘された語を中心に、「あるんである」「憲政」「輿論」「勢力」「国民」「民主」「自由」「議会」「選挙」「漢文調単語」とした。コード数の集計の結果、出現頻度が最も高かったのは「輿論」であり、続いて「憲政」「国民」であった。演説の内容自体は大正デモクラシーを象徴するものであるが、「民主」「自由」の出現頻度は低かった。

表 2　コーディング／単純集計

コード名	あるんである	憲政	輿論	勢力	国民	民主	自由	議会	選挙	漢文調語
頻　　度	5	27	34	15	24	4	5	10	7	13

4.3.1　コーディング／クロス集計

コーディングルールを用いて、特定の語に注目し、クロス集計した結果を示す（図 4、図 5 参照）。

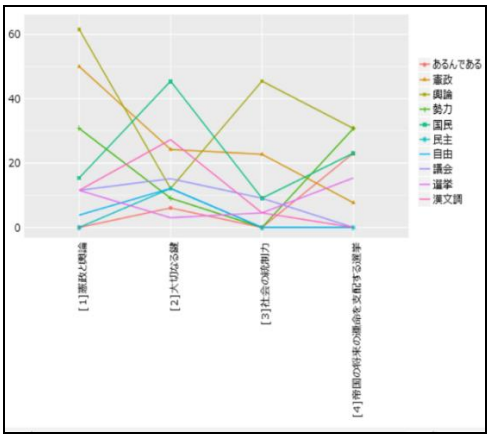


図 4　コーディング／クロス集計グラフ

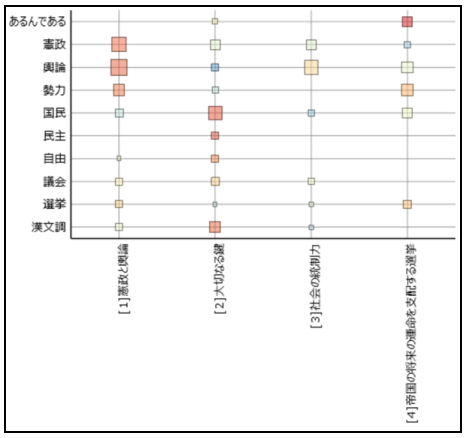


図 5　コーディング／クロス集計マップ

「あるんである」は 2 章と 4 章のみで使用されており、特に 4 章での使用が多かった。これは最終章の結論部分を強調するために使用したためと考えられる。「輿論」は全章で使用されているが、1 章で頻出しており、2 章での使用が少なかった。「憲政」も全章で使用されており、特に 1 章で頻出していた。「勢力」は 3 章では未使用だが、他の章では使用されており、特に 1 章と 4 章で多用されていた。「国民」は全章で使用されており、特に 2 章で最も多く使用されていた。「民主」は 2 章でのみで使用され、他の章では全く使用されていなかった。「自由」は 1 章と 2 章でのみ使用され、特に 2 章で多く使用されていた。「議会」は 1 章～3 章で使用され、2 章で最も多く使用されているが、4 章では全く使用されていない。「選挙」は全章で使用されており、特に 1 章と 4 章で多用されていた。「漢文調単語」は 1 章～3 章で使用されており、特に 2 章での使用が顕著であったが、4 章では使用されていない。

4.3.2　コーディング／共起ネットワークと対応分析

図 6 の各コードの共起ネットワークにより、関連の強いコードの分布が分かる。四つのグループに分かれおり、一つ目のグループでは、「輿論」「憲政」「勢力」は強い共起を示すが、「憲政」と「勢力」はそれに比べ弱い共起である。二つ目のグループは、「国民」「自由」が強い共起を示している。三つ目のグループは、「議会」「漢文調単語」が強い共起を示している。四つ目のグループは「民主」「あるんである」が強い共起を示している。「国民」は、「憲政」「自由」「漢文調単語」「民主」とも強い共起を示し、「憲政」「漢文調単語」とも弱い共起を示している。

次に、対応分析により、「章」に応じたカテゴリの特徴を確認した（図 7 参照）。これにより特定のテーマに注目することができる。先述したように、原点（0，0）近くに布置されたコードは特定の属性（章）と対応しないコードと判断できる。特定の属性（章）の方向に布置されたコードはその属性と対応するコードである。

1 章と 3 章では「憲政」「輿論」、第 2 章では「国民」「漢文調語」「自由」「民主」、第 4 章では「選挙」「勢力」「あるんである」と対応している。

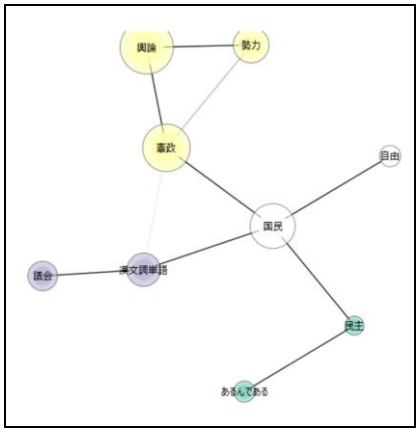


図 6　コーディング／共起ネットワーク

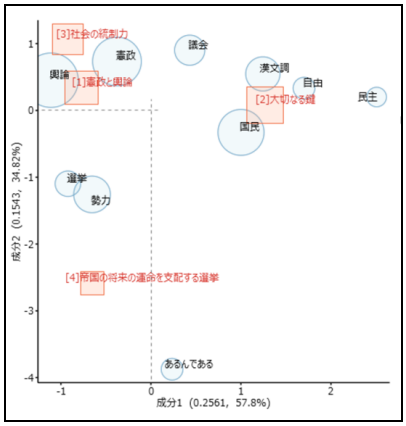


図 7　コーディング／対応分析

4.4　非頻出語

先行研究で挙げられていた「覚醒」「鍵」という語であるが、いずれも非頻出語であった。「覚醒」は、4 章で 1 回だけ使用されていた。しかし、本文中でどのように使用されているのか確認したところ、「選挙に臨んで、国民の覚醒を促すゆえんである。ここに於て輿論の大なる勢力はここへ現るることを望む」という表現がなされていた。

「鍵」は、2 章でのみ使用され、出現数は 3 回であった。本文中では、「陛下が国民に大切なる鍵を御渡しになった」「貴重なる国家を左右する、法律を左右する鍵」「国民の国家に対し、憲法に対する責任の大なる事は、即ち貴重なる陛下の賜ったところの鍵を、大切にこれを保つという事が必要である」という表現がなされていた。「覚醒」「鍵」は非頻出語であるが、これらの語と共起する関連語がいずれも頻出語であった。

おわりに

大隈重信の「憲政に於ける輿論の勢力」を計量テキスト分析により考察した結果、頻出語は「国民」「輿論」「於」「勢力」「政治」「帝国」「議会」「国家」「社会」「選挙」であった。先行研究で指摘された「覚醒」「鍵」というキーワードは、それ自体は非頻出語であったが、頻出語と共起して出現していたことから、内容的に重要な語であると考えられる。コーディングにより、「あるんである」「憲政」「輿論」「勢力」「国民」「民主」「自由」「議会」「選挙」「漢文調語」というコード名で集計した結果、「輿論」「憲政」「国民」の出現頻度が高く、「民主」「自由」の出現頻度は低かった。また、「輿論」「憲政」「国民」「選挙」は全ての章で使用されていた。本演説資料は、選挙演説であるため、これらの語は重要な語として全体で繰り返し使用されたものと考えられる。

章ごとの特徴は次の通りである。「1 章 憲政と輿論」では、「民主」「あるんである」以

外の全てのコードが使用されていた。「2 章 大切なる鍵」では、全てのコード（「あるんである」「憲政」「輿論」「勢力」「国民」「民主」「自由」「議会」「選挙」「漢文調語」）が使用されていた。「3 章 社会の統制力」では、他の章では使用されていた「勢力」が未使用であった。「4 章 帝国の将来の運命を支配する選挙」では、他の章では使用されていた「漢文調単語」が未使用であった。

以上、頻出語やコード名で集計した際に出現頻度が高かった語は、いずれも大正デモクラシーの基調となるものであることが具体的に確認できた。これにより、本演説が、大正デモクラシーを象徴した内容であることを計量的に明らかにすることができた。

参考文献

揚妻祐樹（2009）「言語資料として見た大隈重信の演説「憲政二於ケル輿論ノ勢力」(1) －SP レコードと速記の紹介－」『藤女子大学国文学雑誌 81』、1-23 頁。

大日方純夫（2017）「大隈重信は何を語ったか-『大隈重信演説談話集』を読む-」『早稲田大学史記要 48』、181-205 頁。

橋本恵子（2017）「大隈重信の演説資料の分析－「憲政ニ於ケル輿論ノ勢力」－」『「東アジアにおける日本学研究」国際フォーラム資料集』、26 頁。

橋本恵子（2018）「肥前語話者のコード切り替え―大隈重信「憲政ニ於ケル輿論ノ勢力」の音声資料をもとに―」『日本比較文化学会 2017 年度関西・中国史国・九州 3 支部合同研究会』。

橋本恵子（2019）「大隈重信の演説資料の分析―「憲政ニ於ケル輿論ノ勢力―」」『言語の研究―言語学、日本語学、日本語教育学、言語コミュニケーション学からの視座―』花書院、157-166 頁。

樋口耕一（2019）「計量テキスト分析における対応分析の活用－同時布置の仕組みと読み取り方を中心に－」『コンピュータ＆エデュケーション VOL.47』18-24 頁。

樋口耕一（2020）『社会調査のための計量テキスト分析―内容分析の継承と発展を目指して【第 2 版】KH Coder オフィシャルブック』ナカニシヤ出版。

早稲田大学編（2016）『大隈重信演説談話集』岩波書店。

資料

青空文庫、URL https://www.aozora.gr.jp/（2021 年 3 月 24 日閲覧）

An Examination of Speech Material by Shigenobu Okuma through Quantitative Text Analysis

HASHIMOTO, Keiko

Abstract

This article examines the content of “The Power of Public Opinion in Constitutional Government,” a speech prepared by Shigenobu Okuma, using the quantitative text analysis method. The analysis results identified “people,” “public opinion,” “*oite*” (in), “power,” “government,” “empire,” “diet,” “state,” “society,” and “election” as frequently used words. The words “awakening” and “key” pointed out in the preceding study are not frequently used in the speech; however, because both words co-occur with the above frequently used ones, they are considered important in terms of content. The results of processing the content using code names “*arundearu*” (be), “constitutional government,” “public opinion,” “power,” “people,” “democracy,” “liberty,” “diet,” “election,” and “classical Chinese-style word” indicated a higher frequency of occurrence for the codes “public opinion,” “constitutional government,” and “people,” while indicating a lower frequency of occurrence for the codes “democracy” and “liberty.” The results also indicated that the codes “public opinion,” “constitutional government,” “people,” and “election” were used throughout the material.

The characteristics of the content by chapter are as follows: In “Chapter 1 Constitutional Government and Public Opinion,” all the codes except for “democracy” and “*arundearu*” are used. In “Chapter 2 Important Key,” all the codes (“*arundearu*,” “constitutional government,” “public opinion,” “power,” “people,” “democracy,” “liberty,” “diet,” “election,” and “classical Chinese-style word”) are used. In “Chapter 3 Social Control,” the code “power,” which is used in all the other chapters, is not used. In “Chapter 4 Election to Determine the Future of the Empire,” the code “classical Chinese-style word,” which is used in all the other chapters, is not used. The analysis was conducted using KH Coder.

Keywords： speech, Shigenobu Okuma, quantitative text analysis, content analysis

特定技能 1 号での外食業への就業を希望する外国人のための教材開発の試み

飯嶋 美知子（北海道情報大学），五十嵐 啓子（北海道多文化共生ネット）

要旨

特定技能 1 号取得のための技能に関する試験への対応として、外食業分野では日本フードサービス協会が『特定技能 1 号 外食業技能測定試験 学習用テキスト【接客全般】』『同【飲食物調理】』『同【衛生管理】』の 3 冊をホームページで公開しているが、試験の合格率は低迷している。本研究では『特定技能 1 号 外食業技能測定試験 学習用テキスト【接客全般】』（以下、『学習用テキスト【接客】』）を分析し、それを踏まえて新たな教材を試作した後、教材に関する探索的調査を実施した。『学習用テキスト【接客】』は無償で公開されているため誰でも使用が可能であり、総ルビで各国語版もあるため受験者が利用しやすくなっている。しかし、重要項目や重要語が一目でわかるようになっておらず、練習問題等もないためにどこに重点を置いて学んでいけばよいかがわかりにくい。単語の索引は日本語版にしか付いておらず、各国語版で学ぶ受験者には重要語がどれかもわからない。日本語能力試験 N4 程度と想定される受験者のレベルを超える単語も多数使用されている。以上の分析を踏まえ、単語の索引に載っている単語を中心とした重要語を掲載した単語帳と、やさしい日本語による説明や練習問題を加えたメインテキストの試用版を作成した。それらについて特定技能等の在留資格で就業中の外国人を対象に調査を行った結果、やさしい日本語や練習問題が学習に有効であるという回答を得た。

キーワード：　特定技能制度、技能測定試験、外食業、教材、やさしい日本語

はじめに

特定技能は2019年4月より導入された外国人労働者を受け入れるための新たな在留資格である。特定技能 1 号の在留資格を得るには、国際交流基金日本語基礎テストまたは日本語能力試験 N4 以上に合格するとともに、就労希望分野の技能に関する試験に合格する必要がある[1)]。出入国在留管理庁（2019）によると、特定技能制度の導入開始後 5 年間に 14 分野で最大 345,150 人の受け入れが見込まれており、外食業は介護分野に次ぐ 53,000 人という多数となっている。外食業への就業を希望する外国人は、労働者受け入れを希望する日本企業と提携した海外の教育機関等で学ぶ場合もあるが、多くは日本国内外の日本語教育

機関等で日本語及び外食業技能測定試験[2)]のための教育を受けている。しかし、2020 年度の介護技能評価試験の合格率が 70.7%であるのに対し、外食業技能測定試験の合格率は 48.7%と低迷している[3)]。このような差が生じる一因として、受験者用の教材不足が考えられる。先行して外国人労働者を受け入れてきた介護分野では、さまざまな教材やウェブサイトを使用しての学習が可能だが、外食業では日本フードサービス協会がホームページで公開している『特定技能 1 号 外食業技能測定試験 学習用テキスト【接客全般】』『同【飲食物調理】』『同【衛生管理】』の 3 冊があるのみである。外食業技能測定試験は非公開のため、受験者はこれらの学習用テキストのみを頼りに試験の学習を進めなければならず、学習支援が十分であるとはいいがたい。

特定産業分野の学習支援に関する研究は、西郡（2020）で介護分野をめぐる日本語教育が多方面から論じられている。また、布尾・平井（2020）では外国人介護・看護労働者のキャリア形成と問題点について、インタビューの結果を踏まえて検討がなされている。介護分野の研究が中心である中で、飯嶋（2022）は『特定技能 1 号 外食業技能測定試験 学習用テキスト【接客全般】』内の単語の日本語レベルを調べているが、学習用テキスト全体の分析が不十分である。

そこで、特定技能の中で介護分野に次いで多くの外国人労働者の受け入れが見込まれる外食業に焦点を当て、技能測定試験の学習用テキストの内容を検討するとともに、良質な教材の開発が必要であると考えた。本研究では、学習用テキストの分析を踏まえて新たな教材の試用版を作成し、現時点での課題を明らかにすることを目的に探索的調査を行った。

１．研究対象と研究方法

1.1　研究対象

本研究では、3 分野の学習用テキストのうち『特定技能 1 号 外食業技能測定試験 学習用テキスト【接客全般】』（以下、『学習用テキスト【接客】』）を調査することとした。3 分野の中で専門用語が最も少ないため、日本語能力試験 N4 レベル程度（以下、日本語能力試験のレベルの前の「日本語能力試験」は略）の受験者が比較的取り組みやすい内容であると考えたためである。

1.2　研究方法

本研究ではまず吉岡（2008）を参考に、『学習用テキスト【接客】』の仕様及び内容について分析した。続いてその分析を踏まえ、川村（2011）を参考に、単語帳（試用版）とメインテキスト（試用版）を作成した。その後、それらに関してアンケートとインタビューを用い、少人数を対象とした探索的調査を実施した。

２．『学習用テキスト【接客】』の分析と結果

吉岡（2008）を参考に、『学習用テキスト【接客】』の仕様及び内容について表１の通りまとめた。表１の内容を中心に、筆者ら２名が『学習用テキスト【接客】』の仕様及び内容について分析した後、日本語教育の専門家２名、外食業の専門家１名にその分析に関する助言を受けた。以下はそのまとめである。

書名：特定技能１号 外食業技能測定試験 学習用テキスト【接客全般】	
著者：（一社）日本フードサービス協会	初版／最新改訂：2019 年 3 月／2021 年 3 月
サイズ／ページ数：A4／40	索引の単語数：201
表記：かな・漢字	ルビ：総ルビ
本書の構成（課の数、目次等）： 1.接客に関する知識　2.食に関する知識　3.店舗管理に関する知識　4.クレーム対応に関する知識　5.緊急時の対応に関する知識	
各課の構成：ある項目についてイラストや写真を交えながら説明していくという内容	
関連教材： ①『特定技能１号 外食業技能測定試験 学習用テキスト【衛生管理】』、②『同【飲食物調理】』、本書及び①②の英語版、ベトナム語版、クメール語版、ミャンマー語版、タイ語版、インドネシア語版、ネパール語版	

表１　『学習用テキスト【接客】』の仕様及び内容

2.1　『学習用テキスト【接客】』の特徴

『学習用テキスト【接客】』は日本フードサービス協会のホームページで PDF ファイルが無料で公開されており、誰でも利用が可能となっている。受験者への配慮から総ルビとなっており、英語、ベトナム語、クメール語、ミャンマー語の各国語版に加え、2021 年 3 月にはタイ語版、インドネシア語版、ネパール語版が公開された。また、2021 年 3 月には鮮明なイラストや写真が追加された改訂版が発行され、以前よりわかりやすい内容となった。

2.2　『学習用テキスト【接客】』の問題点

『学習用テキスト【接客】』の問題点としてまず挙げられるのは、試験対策のためにどこに重点を置いて学習すべきかが不明確な点である。巻末には重要語の索引があるが、その重要語が本文のどこにあるのかが探しにくく、重要項目や重要語の色分けなどもなされておらず、練習問題等もない。各国語版には索引が付いていないため、各国語版で学ぶ受験者はどれが重要語かも判断できない可能性がある。また、飯嶋(2022)の p.36 にあるように、『学習テキスト【接客】』の出現頻度上位 30 語の 46.7%が N4 を超えるレベルとなっている。すなわち、『学習テキスト【接客】』には、受験者の日本語レベルとして想定される N4 を超えるレベルの単語が多数使用されているということである。技能測定試験は非

公開だが、『学習用テキスト【接客】』は日本語で実施される技能測定試験に準拠しており、その内容が出題されるため、受験者が試験に対応するには、『学習用テキスト【接客】』内のN4を超えるレベルの単語も学ばなければならないことになる。

３．単語帳（試用版）及びメインテキスト（試用版）の作成

前章における『学習用テキスト【接客】』の分析を踏まえた上で、川村（2011）を参考に単語帳（試用版）及びメインテキスト（試用版）を作成した。

3.1　単語帳（試用版）の作成

単語帳（試用版）には『学習用テキスト【接客】』の巻末にある単語の索引に掲載されている単語を全て採用した。このほか、飯嶋（2022）を参考に、出現頻度が５回以上の単語も掲載することとした。さらに、外食業の現場で必要と思われる単語も掲載した。

単語帳（試用版）に掲載したのは、掲載ページ、『学習用テキスト【接客】』巻末にある単語の索引への掲載の有無、漢字表記、読み、品詞、日本語能力試験のレベル、やさしい日本語による説明、英語訳である。表２は単語帳（試用版）の一部である[4)]。

頁	索引掲載の有無	単語（漢字表記）	読み	品詞	日本語レベル	やさしい日本語	英語
1		確保（する）	かくほ	スル名詞	N1	手に入れること	security/to secure
1	○	お客様	おきゃくさま	名詞	級外	お店で食事をする人	customer

表２　単語帳（試用版）の一部

3.2　メインテキスト（試用版）の作成

メインテキスト（試用版）には、『学習用テキスト【接客】』の原文とやさしい日本語の両方を掲載した。やさしい日本語への変換には、変換機能を有するウェブサイト「伝えるウェブ エディタ」を活用した。やさしい日本語への変換の手順は、まず、『学習用テキスト【接客】』の原文を「伝えるウェブ エディタ」に入力する。すると、変換後のやさしい日本語が分かち書きで表記され、L1～L5[5)]の単語の日本語レベルを表示した分析結果が示される。続いて、やさしい日本語に変換された文章の日本語能力試験のレベルについて、国際交流基金（1994）を参考に検討した。その際、N4を超えるレベルでも索引にある単語や外食業の現場で必要と判断した単語はやさしい日本語には変換せず、単語帳（試用版）に掲載することで対応することとした。また、技能測定試験への対応を考え、分かち書きはしていない。表３はやさしい日本語への変換例である。

『学習用テキスト【接客】』原文	激しい地震が発生した場合 『学習用テキスト【接客】』p. 33
伝えるウェブによる変換後	強い地震が　起こったとき
分析結果	激しい(L3)地震(L4)が(L5)発生(L3)した(L5)場合(L4) ↓ 強い(L5)地震(L4)が(L5)起こっ(L3)た(L5)とき(L5)
最終的なやさしい日本語	強い地震が起こった場合

表 3　やさしい日本語への変換例

メインテキスト（試用版）には、『学習用テキスト【接客】』の原文とやさしい日本語の両方を左右の見開きになるように掲載した。原文も掲載したのは、技能測定試験は日本語で実施されるため、それに準拠して作成された『学習用テキスト【接客】』の日本語を理解する必要があるからである。また、テキスト内の重要語が一目でわかるよう、単語の索引にある単語はゴシック体の太字にし、出現頻度の高い単語及び必要と判断した単語には下線を付けた。表 4 はメインテキスト（試用版）の一部である [6)]。

『学習用テキスト【接客】』原文	やさしい日本語
①激しい**地震**が<u>発生</u>した場合 ア．まずは自分の身の安全を<u>確保</u>します。落下物から身を守るため、テーブルの下に身をかくします。 イ．自分の身の安全が<u>確保</u>できたら、**お客様**の様子を<u>確認</u>し、テーブルの下などに身をかくすよう大きな声で案内します。 『学習用テキスト【接客】』p. 33	①強い**地震**が起こった場合 ア．まずは自分が安全なところに行きます。落ちてきたものから体を守るため、テーブルの下に体をかくします。 イ．自分の安全がわかったら、**お客様**の様子を見ます。「テーブルの下などに体をかくしてください」と大きな声で案内します。

表 4　メインテキスト（試用版）の一部

メインテキスト（試用版）の各章末には外食業技能測定試験のサンプル問題 [7)] を参考に作成した選択式の練習問題を掲載した。また、メインテキスト（試用版）には、単語帳（試用版）及びメインテキスト（試用版）の使用方法として、「まず、単語帳で言葉の意味を確認する」「次に、『学習用テキスト』の原文を読む。わからない場合はやさしい日本語を読む」「最後に、練習問題を解いて理解度を確認する」という内容を掲載した。

４．単語帳（試用版）及びメインテキスト（試用版）に関する探索的調査

単語帳（試用版）及びメインテキスト（試用版）の現時点での課題を明らかにするため、

アンケートとインタビューを用い、少人数を対象とした探索的調査を実施した。

4.1　調査対象者、調査方法及び内容

調査対象者は５名で、その詳細は表５の通りである。特定技能で就労中の２名に加え、日本で就労している日本語が初級レベルの外国人の意見を収集した。

	国籍	性別	年齢	ビザ	業種	日本語能力試験
A	カンボジア	女	26	特定技能	外食業	N3
B	カンボジア	女	35	特定技能	外食業	N4
C	ベトナム	女	23	技能実習	食品加工業	N5
D	ベトナム	女	22	技能実習	食品加工業	N5
E	フィリピン	女	52	配偶者	清掃業ほか	なし

表５　調査対象者

調査は 2022 年８月に対面にて日本語で実施した。調査手順としては、まず、調査目的の説明をした。続いて単語帳（試用版）及びメインテキスト（試用版）の説明をし、両者を提示した後、アンケートの質問への回答を依頼した。質問は、「技能測定試験の学習にはどのような教材が必要か」「単語帳（試用版）のよい点とさらに必要な情報は何か」「メインテキスト（試用版）のよい点とさらに必要な情報は何か」の３点とした。また、アンケートに関連した内容については、適宜やさしい日本語で解説をしながらインタビューを行った。

4.2　調査結果

「技能測定試験の学習にはどのような教材が必要か」という質問に対しては、「単語帳」及び「問題集」という回答が 4、「メインテキスト」という回答が 3 であった。「漢字練習帳」が必要だという回答は０であった。「漢字練習帳」が不要と判断されたのは、『学習用テキスト【接客】』に全てルビが付いているためであると考えられる。

「単語帳（試用版）のよい点とさらに必要な情報は何か」という質問に対しては、よい点として「漢字の読み方がある」及び「やさしい日本語による説明」という回答が５であった。必要な情報としては、「母語の翻訳」という回答が４であった。

「メインテキスト（試用版）のよい点とさらに必要な情報は何か」という質問に対しては、よい点として「見やすい」及び「やさしい日本語がある」という回答が 5、「練習問題がある」という回答が 4、「わかりやすい」という回答が 3 であった。さらに必要な情報としては、「写真やイラスト」[8]「接遇の知識」「文化的背景知識」等の回答があった。

このほか、「受験の時パソコンの使い方がわからず解答に時間がかかった」（調査対象

者 B）、「『学習用テキスト【接客】』を自分だけで勉強するのは大変だと思う」（調査対象者 E）という回答もあった。

５．まとめ

以上のことから、単語帳（試用版）及びメインテキスト（試用版）については、いずれも「やさしい日本語」が有効であることが判明した。試験対策のために作成した練習問題も評価されたが、さらに問題集も必要だという回答もあった。まずは練習問題を充実させることで対応していきたい。単語帳（試用版）については、英語訳を掲載していたが、調査対象者は自分の母語の訳を必要としていることがわかった。しかし、全ての外国語の訳を掲載することは難しいため、例えば教育機関での授業では、予習として単語を翻訳アプリ等で翻訳して書き込みをさせてくる等の工夫が必要であろう。メインテキスト（試用版）については、重要語や重要項目の説明のほかに、イラストや図、文化的背景知識の説明も必要であることがわかった。また、受験の際はパソコンを使用する等、試験そのものに関する情報の掲載も必要だと思われる。

おわりに

今後はまず、今回の探索的調査で明らかになった課題を踏まえて教材の試用版を改良したい。その後、アンケートの質問項目数や内容を検討した上で、教材の完成に向け、対象者を増やして検証のための調査を実施する予定である。また、『学習用テキスト【接客】』以外の『特定技能 1 号 外食業技能測定試験 学習用テキスト【飲食物調理】』『同【衛生管理】』の分析も試み、それを踏まえて両分野の教材も作成したい。

注

1）特定技能には 1 号と 2 号があり、特定技能 2 号は特定産業分野で熟練した技能を有する外国人労働者のための在留資格で、日本語能力に関する試験は不要とされている。

2）外食業技能測定試験の詳細については、一般社団法人外国人食品産業技能評価機構（2022）を参照。

3）国際人材協力機構編(2021)の p. 97 を参照。

4）やさしい日本語による説明の箇所には全てルビを付けているが、本稿では省略した。

5）L1～L5 は「伝えるウェブエディタ」の作成元が日本語能力試験のレベルを参考に独自に定めた日本語レベルである。L1 は N1、L2 は N2、L3 は N3、L4 は N4、L5 は N5 にほぼ相当する。

6）メインテキスト（試用版）の漢字には全てルビを付けているが、本稿では削除している。また、『学習用テキスト【接客】』の使用については著作権上の問題は生じない。詳細は『学習用テキスト【接客】』の p. 42 を参照。

7）農林水産省がホームページでサンプル問題を 6 問のみ公開している。

8）『学習用テキスト【接客】』には写真やイラストがあるが、メインテキスト（試用版）には掲載していなかった。

参考文献

飯嶋美知子（2022）「『特定技能 1 号 外食業技能測定試験 学習用テキスト【接客全般】』の分析--漢字・語彙の日本語レベルを中心に」『東アジア日本学研究』第 7 号、33-41 頁。

川村よし子監修（2011）『やさしい日本語版 介護福祉士 新カリキュラム 学習ワークブック』①～⑤、静岡県。

国際交流基金（1994）『日本語能力試験 出題基準〔改訂版〕』凡人社。

国際人材協力機構編（2021）『2021 年度版 外国人技能実習・特定技能・研修事業実施状況報告（JITCO 白書）』国際人材協力機構教材センター。

西郡仁朗（2020）「介護福祉の日本語教育の現状と支援者の育成--介護の日本語 Can-do ステートメントを中心に」『日本語教育』175 号、18-32 頁。

布尾勝一郎・平井辰也（2020）「外国人介護・看護労働者のキャリア形成」『日本語教育』175 号、34-48 頁。

吉岡英幸編（2008）『徹底ガイド 日本語教材』凡人社。

アルファサード株式会社（2022）「伝えるウェブ エディタ」
https://tsutaeru.cloud/documentation/simplified-japanese-editor.html（2022 年 7 月 9 日閲覧）。

一般社団法人外国人食品産業技能評価機構（2022）「特定技能 1 号技能測定試験 外食業と飲食料品製造業の国内・国外試験情報」https://otaff1.jp/（2022 年 11 月 11 日閲覧）。

出入国在留管理庁（2019）『新たな外国人材の受入れ及び共生社会実現に向けた取組』
https://www.moj.go.jp/isa/content/001335263.pdf（2022 年 9 月 5 日閲覧）。

日本フードサービス協会（2019）『特定技能 1 号 外食業技能測定試験 学習用テキスト【接客全般】』
https://www.jfnet.or.jp/contents/gaikokujinzai/#text（2022 年 6 月 15 日閲覧）。

農林水産省（2019）「外食業特定技能 1 号技能測定試験（サンプル問題）」
https://www.maff.go.jp/j/shokusan/gaisyoku/gaikokujinzai.html（2022 年 7 月 9 日閲覧）。

An Attempt to Develop Study Materials for Foreign Persons Who Wish to Work in the Food Service Industry as Specified Skilled Workers (I)

IIJIMA Michiko, IGARASHI Keiko

Abstract

The Japan Food Service Association has produced three textbooks to assist with studying for

the Skills Assessment Test for Food Service Industry. "Specified Skilled Worker (I) Skills Assessment Test for Food Service Industry Textbook [Customer Service]", "Specified Skilled Worker (I) Skills Assessment Test for Food Service Industry Textbook [Preparation of Food and Drink]" and "Specified Skilled Worker (I) Skills Assessment Test for Food Service Industry Textbook [Hygiene Controls]" are all available on the association's website. However, the pass rate of the test remains low. In this study, we analyzed the "Specified Skilled Worker (I) Skills Assessment Test for Food Service Industry Textbook [Customer Service]" (hereinafter referred to as "Textbook [Customer Service]"), prototyped new study materials based on the textbook, and conducted an exploratory survey on study materials. "Textbook [Customer Service]" is available to the public free of charge, and as it has been translated into various languages, it could therefore be assumed to be easy for examinees to use. However, as it is not possible to quickly recognize and understand which items and words are important in "Textbook [Customer Service]", and as there are no practice questions, it is difficult to know where to focus when studying. Word indexes are only available in the Japanese editions of the textbooks, so examinees who study in other languages are not aware which words are important.　Many words are also used which exceed the average Japanese level of the examinees, which is assumed to be at approximately N4 as defined by the Japanese proficiency test. Based on the above analysis, we created a vocabulary book with important words taken from those listed in the word index, and a trial version of the main text with explanations in simplified Japanese and practice questions. We then conducted a survey of foreign persons working with a residence status such as Specified Skilled Worker, and received responses that simplified Japanese and practice questions were effective for learning.

Keywords: The specific skills system, skills assessment test, food service industry, study materials, simplified Japanese

移動を表す複合動詞「V1 出す」と「V1 出る」の前項動詞の特徴について

羅 菲凡（名古屋大学大学院生）

要旨

本研究はコーパス調査を利用して、日本語の移動を表す複合動詞「V1 出す」と「V1 出る」の前項動詞の特徴について論じるものである。

本研究ではコーパス（Web データに基づく複合動詞用例データベース（開発版））から抽出した「V1 出す」と「V1 出る」の前項動詞の上位 55 語を奥田（1992）の動詞分類によって分類した。その結果、①「V1 出す」の前項動詞は「意志活動」と「人間の生理・情動的な状態」を表す動詞以外のほとんどの動詞と結合する、②「V1 出る」の前項動詞は「さまがえ動詞」「うつしかえ動詞」「感性動詞」「人間的な接触」を表す以外のほとんどの動詞と結合することを明らかにした。

また、「V1 出す」と「V1 出る」の上位 55 語のうち、V1 が共通するものは 12 ペアがあり、この 12 ペアを置き換えても意味があまり変わらないもの、置き換えると意味が変わるもの、「V1 出す」に比べて「V1 出る」の方が使用制限が強いものの 3 つに分け、その違いを考察した。

キーワード：　複合動詞、「V1 出す」、「V1 出る」、前項動詞、自他性

はじめに

本研究は日本語の移動を表す複合動詞「V1 出す」と「V1 出る」の前項動詞の特徴について論じるものである。これらの前項動詞は、例（1）のように「V1 出す」のみに付くものもあれば、例（2）のように「V1 出る」のみに付くものもあり、例（3）のように両方に付くものもある。

（1）新しい活動・事業などに｛乗り出す/*乗り出る｝。[1)]
（2）計画を労働局長に｛*届け出す/届け出る｝。
（3）水が｛漏れ出す/漏れ出る｝。

このような「V1 出す」や「V1 出る」の前項動詞については、姫野（1987）や朱（2018）

などで論じられているが、細かな違いまでは明らかにされていない。そこで、本稿では「Webデータに基づく複合動詞用例データベース(開発版)」を利用して、両者の違いの詳細について追究しようとするものである。

１．先行研究

複合動詞「V1 出す」と「V1 出る」の語彙的・統合的な特徴について論じた先行研究には、姫野（1987）や朱（2018）などがある。

姫野（1987）は外部移動を表す他動詞の「V1 出す」と「V1 出る」を前項動詞と後項動詞の修飾関係により「～することによって出す」と言い換えられるもの、「～した後その状態で出す」と言い換えられるもの、「～するために出す」と言い換えられるもの、「分析不可能なもの」の四つのグループに分けている。一方、外部移動を表す自動詞の「V1 出す」と「V1 出る」の前項動詞は表 1 に示されるように「外部に出る」という意味を含むものと含まないもの（移動の方法・様相を示すもの）の二つに分けている。また、両者に共通する前項動詞および無意味形態素は 30 語あり、同一の文脈で「出す」が「出る」と言い換えられると指摘している。

表 1　姫野（1987）の移動を表す自動詞の「～出す」と「～出る」の複合動詞

前項動詞(V1)	同一の文脈で「出す」が「出る」と言い換えられるもの	言い換えられない	
		「～出す」	「～出る」
「外部に出る」という意味を含むもの	湧き出す/湧き出る、溢れ出す/溢れ出るなど 8 例	－	生まれ出る、咲き出る、現れ出る
その意味を含まないもの(移動の方法・様相を示すもの)	突き出す/突き出る、飛び出す/飛び出る、溶け出す/溶け出る、流れ出す/流れ出るなど 21 例	張り出す、せり出す、駆け出す、起き出す、操り出す	輝き出る、進み出る、捧げ出る、歩み出るなど 12 例
接頭辞・無意味形態 [2]	はみ出す/はみ出る 1 例	－	おん出る、さし出る

しかし、前項動詞が「移動の方法・様相を示すもの」の場合、「突き出す/突き出る」のように他動詞の場合もあれば、「飛び出す/飛び出る」のように意志的な自動詞もあり、「溶け出す/溶け出る」のように意志性を持たない自動詞もある。また、「突く」「飛ぶ」は人間に関する働きかけ動詞であるのに対し、「溶ける」「流れる」は自然に関する変化や出現動詞である。そこで、本研究では「V1 出す」と「V1 出る」の前項動詞の自他性と意味を考慮に入れ、細かく分類する。

朱（2018）は奥田（1983）(『日本語文法・連語論』) の動詞の分類を参照し、「V1 出す」と「V1 出る」の前項動詞の特徴について考察し、表 2 のように示している。

表 2　朱（2018）の表 4 と表 8 をまとめたもの

V1 出す			V1 出る		
V1の自他性	V1の分類	例	V1の自他性	V1の分類	例
他動詞	Ⅰ　働きかけを表す動詞	追い出す	他動詞	Ⅰ　言語活動を表す動詞	申し出る
	Ⅱ　生産を表す動詞	作り出す	自動詞	Ⅱ　移動を表す或いは移動性を含意する	飛び出る
	Ⅲ　所有権を表す動詞	売り出す		Ⅲ　出現を表す動詞	浮き出る
	Ⅳ　発見を表す動詞	見つけ出す		Ⅳ　態度を表す動詞	のざばり出る
	Ⅴ　思考活動を表す動詞	思い出す			
	Ⅵ　言語活動を表す動詞	言い出す			
自動詞	Ⅶ　移動を表す或いは移動性を含意する	飛び出す			
	Ⅷ　出現を表す動詞	浮かび出す			

しかし、朱（2018）は奥田（1983）の動詞分類をおおまかに使っているだけであり、「物に対する働きかけを表す動詞」の中で「生産動詞」しか見ていない。また、奥田（1983）のでは「対象」と動詞との関係を考察しただけで「主体」と動詞との関係を扱わない。そのため、本研究では奥田（1992）の動詞に関する「語彙的な分類」を使い、「生産動詞」のほかに「さまがえ動詞」「とりつけ動詞・とりはずし動詞」「うつしかえ動詞」「接触動詞」についても考察し、さらに細かく分類することにより、「V1 出す」と「V1 出る」の前項動詞の違いをより明確にする。

２．前項動詞の分類基準

本研究では奥田（1992）の動詞分類に基づいて「V1 出す」と「V1 出る」の前項動詞を再分類する。奥田（1992）は「語彙的な意味」によって動詞を以下のように分類している。

Ⅰ　人間の肉体的動作

①対象にはたらきかける動詞（さまがえ動詞/生産動詞/とりつけ動詞・とりはずし動詞/うつしかえ動詞/接触動詞）

②自己運動としての動作・変化（移動動詞/区間的な配置関係にはいる動詞/ふるまい動詞）

Ⅱ　心理的な活動（感性活動/思考活動/言語活動/意志活動/調査活動/態度的な活動/表現的な活動/論理操作）

Ⅲ　変化（物の様変わり/生き物の変化/人の生理的な変化/状態の変化・出現）

Ⅳ　状態（人間の生理・情動的な状態/場所の状態）

Ⅴ　自然現象(物の状態/物の運動)　　Ⅵ　やりもらい活動　　Ⅶ　人間的な接触

Ⅷ　社会的な活動(社会的な活動/態度的な活動/人間の社会的な状態の変化/人間の社会的な状態を変える活動/集団活動)　　Ⅸ　特性、関係、存在（特性/関係/存在）

３．コーパス調査

本研究ではコーパスとして「Web データに基づく複合動詞用例データベース(開発版)」を用いる。検索方法は「表記」を選択し、検索欄に「出す」/「出る」を入力して検索した。その結果、「V1 出す」の前項動詞は 148 語、「V1 出る」の前項動詞は 55 語出現した。このうち上位 55 語をそれぞれ表 3 と表 4 に示す。(開始の「V1 出す」は含まない。)

表 3　「V1 出す」の前項動詞上位 55 語

	V1	用例数		V1	用例数		V1	用例数		V1	用例数
1	取る	3,913	15	抜く	2,462	29	聞く	2,010	43	探す	1,844
2	思う	3,655	16	差す	2,338	30	見る	2,010	44	連れる	1,808
3	書く	3,395	17	抜ける	2,330	31	押す	1,963	45	撃つ	1,807
4	呼ぶ	3,218	18	踏む	2,282	32	掘る	1,960	46	張る	1,789
5	飛ぶ	2,922	19	振る	2,271	33	溶ける	1,923	47	選ぶ	1,751
6	引く	2,742	20	吐く	2,251	34	導く	1,899	48	投げる	1,746
7	読む	2,731	21	突く	2,225	35	産む	1,896	49	漏れる	1,686
8	持つ	2,721	22	乗る	2,221	36	洗う	1,888	50	叩く	1,684
9	追う	2,629	23	作る	2,162	37	創る	1,884	51	起きる	1,671
10	切る	2,596	24	貸す	2,114	38	生む	1,881	52	噴く	1,662
11	繰る	2,584	25	言う	2,107	39	盗む	1,881	53	漕ぐ	1,657
12	打つ	2,580	26	はむ	2,087	40	送る	1,849	54	助ける	1,655
13	払う	2,538	27	吸う	2,070	41	見つける	1,848	55	救う	1,650
14	煮る	2,506	28	割る	2,042	42	削る	1,845			

表 4　「V1 出る」の前項動詞 55 語

	V1	用例数		V1	用例数		V1	用例数		V1	用例数
1	届ける	3,062	15	生まれる	1,516	29	逆る	651	43	忍ぶ	152
2	願う	1,974	16	躍る	1,485	30	輝く	600	44	伸びる	140
3	浮く	1,906	17	にじむ	1,467	31	萌える	598	45	醸す	138
4	はむ	1,856	18	訴える	1,435	32	転がる	536	46	彷徨う	134
5	突く	1,838	19	這う	1,383	33	走る	532	47	泳ぐ	130
6	湧く	1,818	20	噴く	1,368	34	沸く	504	48	踏む	127
7	進む	1,804	21	溢れる	1,283	35	浮かぶ	494	49	舞う	124
8	飛ぶ	1,767	22	抜きん	1,260	36	抜く	449	50	弾ける	121
9	流れる	1,738	23	現れる	1,214	37	逃げる	240	51	漂う	101
10	名乗る	1,675	24	こぼれる	1,190	38	咲く	226	52	引く	100
11	漏れる	1,638	25	染む	1,181	39	逃れる	222	53	転げる	87
12	抜ける	1,566	26	滑る	1,011	40	生える	199	54	差す	71
13	吹く	1,563	27	溶ける	921	41	迷う	184	55	漕ぐ	63
14	申す	1,523	28	歩む	711	42	浮かれる	152			

表 3 と表 4 から分かるように、「V1 出す」の前項動詞は他動詞が上位に来て、自動詞は 55 位までに自己運動を表す「飛ぶ」「乗る」「起きる」、変化を表す「溶ける」「漏れる」「抜ける」、自然現象を表す自他両用の「噴く」の 7 語のみである。一方、「V1 出る」の前項動詞には他動詞も自動詞も来る。また、上位 55 語のうち「V1 出す」と「V1 出る」に共通して使われる前項動詞は 12 語であった（表 3 と表 4 の灰色部分）。

４．「V1 出す」と「V1 出る」の前項動詞の特徴

次に、表 3 と表 4 に示した「V1 出す」と「V1 出る」の前項動詞それぞれ 55 語を奥田（1992）の動詞分類によって分類すると、表 5 のようになる。

表 5　「V1 出す」と「V1 出る」の前項動詞の「語彙的な意味」による分類

V1 の意味			V1 出す		V1 出る	
			V1 の自他性	例（前項動詞）	V1 の自他性	例（前項動詞）
Ⅰ人間の肉体的動作	①対象にはたらきかける動詞	さまがえ動詞	他	切り-、煮-、振り-、吐き-、吸い-、割り-、洗い-、削り-	他	-
		生産動詞		作り-、掘り-、産み-、創り-、生み-		醸し-
		とりつけ動詞・とりはずし動詞		取り-、繰り-、抜き-、はみ-、張り-、選び-		抜き-（抜きん）、はみ-
		うつしかえ動詞		送り-、投げ-		-
		接触動詞		書き-、引き-、持ち-、打ち-、差し-、踏み-、突き-、押し-、撃ち-、漕ぎ-、叩き-		引き-、突き-、踏み-、漕ぎ-、差し-
	②自己運動としての動作・変化		他	追い-	他	-
			自	飛び-、乗り-、起き-	自	飛び-、進み-、這い-、泳ぎ-、滑り-、歩み-、彷徨い-、逃げ-/逃れ-、走り-、踊り-、舞い-
Ⅱ心理的な活動	①感性活動		他	聞き-、見-、見つけ-	他	-
	②思考活動			思い-		-
	③言語活動			呼び-、読み-、言い-		申し-、訴え-、名乗り-
	④意志活動			-		願い-
	⑤調査活動			探し-		-
Ⅲ変化			自	溶け-、漏れ-、抜け-	自	溶け-、漏れ-、抜け-、浮き-、浮かび-、伸び-、にじみ-、染み-、溢れ-
						現れ-、湧き-（沸き-）、生まれ-、（出現動詞）
						咲き-、生え-、萌え-
Ⅳ状態：人間の生理・情動的な状態			自	-	自	浮かれ-、忍び-、迷い-

V 自然現象	①物の状態	自他	噴き-	自	輝き-
				自他	吹き-（噴き-）
	②物の運動			自	流れ-、こぼれ-、転がり-/転げ-、漂い-、逆り-、弾け-
VIやりもらい活動		他	貸し-、払い-	他	届け-
VII人間的な接触			連れ-、導き-、盗み-、助け-、救い-		-

まず、「V1 出す」の前項動詞の特徴については、表 5 から分かるように、「V1 出す」の前項動詞は「意志活動」と「人間の生理・情動的な状態」を表す動詞以外のほとんどの動詞と結合する。そのうち、「自己運動」「変化」「自然現象」を表す動詞の場合は自動詞、その他の場合は他動詞である。

次に、「V1 出る」の前項動詞の特徴については、「さまがえ動詞」「うつしかえ動詞」「感性動詞」「人間的な接触」を表す以外のほとんどの動詞と結合する。そのうち、「生産動詞」「とりつけ・とりはずし動詞」「接触動詞」の場合は他動詞、その他の場合は自動詞である。

また、「V1 出す」と「V1 出る」の上位 55 語のうち、V1 が共通するものは以下の 12 ペアである。

Ⅰ人間の肉体的動作：

Ⅰ-①対象に働きかける動詞：

取り付け・取り外し動詞：「抜き出す/抜き出る」「食み出す/食み出る」

接触動詞：「引き出す/引き出る」「差し出す/差し出る」「踏み出す/踏み出る」「突き出す/突き出る」「漕ぎ出す/漕ぎ出る」

Ⅰ-②自己運動としての動作：「飛び出す/飛び出る」

Ⅲ変化：「溶け出す/溶け出る」「漏れ出す/漏れ出る」「抜け出す/抜け出る」

Ⅴ自然現象：「噴き出す/噴き出る」

以上の 12 ペアの中には「V1 出す」と「V1 出る」を置き換えても意味があまり変わらないものもあれば、置き換えると意味が変わるものもあり、また「V1 出す」に比べて「V1 出る」の方が使用制限が強いものもある。

まず、置き換えても意味があまり変わらない場合について説明する。この類に属するものには例（4）～（10）のように「はみ出す/はみ出る」「踏み出す・踏み出る」「溶け出す/溶け出る」「漏れ出す/漏れ出る」「抜け出す/抜け出る」「突き出す/突き出る」「噴き出す/噴き出る」の 6 ペアがある。これらは例（4）の「はみ出す/はみ出る」を除き、前項動詞の動作の結果、対象の位置変化が起きることを表している。例（9）の他動詞の「突き出す」と例（10）の自他両用動詞の「噴き出す」以外は自動詞として使われている。

(4) テレビの画面から文字が｛はみ出す/はみ出る｝。
(5) 花子が一歩前に｛踏み出す/踏み出る｝。
(6) 成分が｛溶け出す/溶け出る｝ことで、効果を発揮する。
(7) 漏水とは堤防から洪水の水が｛漏れ出す/漏れ出る｝ことです。
(8) 時間の経過にともなって、抑うつ状態から｛抜け出す/抜け出る｝ことができます。
(9) 湖面から人間の頭だけ｛を突き出す/が突き出る｝。
(10) 亀裂があればそこから水｛が・を噴き出す/が噴き出る｝。

次に、置き換えると意味が変わる場合について考える。この類に属するものには「抜き出す/抜き出る」「差し出す/差し出る」「飛び出す/飛び出る」の 3 ペアがある。まず、例 (11)〜(14) のように「V1 出す」は他動詞として使われ、「V1 出る」は自動詞として使われるペアを見る。

(11) 解答に必要な部分を抜き出す。
(12) 誰が抜き出るのか楽しみですね。
(13) 握手を求めて手を差し出す人は太郎である。
(14) 闇が過ぎ去り、光が力強く差し出ることになる。

例 (11) の「抜き出す」は「対象（必要な部分）の外部移動」の意味を表すのに対し例 (12) の「抜き出る」は「主体（誰）が他のものより突出している」という意味を表している。また、例 (13) の「差し出す」は「対象（手）を前へ出す」という意味を表すのに対し、例 (14) の「差し出る」は「主体（光）が照り入る」という意味を表している。

次に、例 (15) と例 (16) のように「V1 出す」と「V1 出る」がいずれも自動詞として使われるペアは以下に示す。

(15) 思わずそんな言葉が口から飛び出した。
(16) 心臓が飛び出るくらい驚いた。

例 (15) も例 (16) も「主体の移動」を表す点で共通している。しかし、「飛び出す」は「言葉」「話」「発言」など人間の言語に関する抽象名詞と共起しやすいのに対し、「飛び出る」は「目」「目玉」「心臓」など人間の身体部位に関する具体名詞と共起しやすいという違いがある。

最後に、「V1 出す」に比べて「V1 出る」の方が使用制限が強い場合について見る。この類に属するものには「引き出す/引き出る」「漕ぎ出す/漕ぎ出る」の 2 ペアがある。

（17）この水でご飯を炊くとその旨さ｛を引き出す/が引き出る｝。
（18）彼の演技力をさらに｛引き出す/*引き出る｝。
（19）船で海に｛漕ぎ出す/漕ぎ出る｝。
（20）準備を整え 4 時 45 分に自転車を｛漕ぎ出す/*漕ぎ出る｝。

「引き出す」は例（17）や例（18）のように色々な対象に使われるのに対し、「引き出る」は「旨さ」や「旨味」のように「～さ」や「～み（味)」の場合に使われやすいという違いがある。また、「漕ぎ出す」は例（19）や例（20）のように「船」にも「自転車」にも使われるのに対し、「漕ぎ出る」は「船」にしか使われないという違いがある。

おわりに

以上、「V1 出す」と「V1 出る」に結合する前項動詞を語彙的な意味によって分類し、その違いを考察した。その結果、V1 が「心理的な活動」における「意志活動」と「人間の生理・情動的な状態」の場合は「出す」と結合しにくいのに対し、V1 が「さまがえ動詞」「うつしかえ動詞」「感性動詞」「人間的な接触」の場合は「出る」と結合しにくいことが分かった。また、V1 が「人間の肉体的動作」「変化」「自然現象」を表す場合は「V1 出す」と「V1 出る」の両方と結合し、「置き換えても意味があまり変わらないもの」「置き換えると意味が変わるもの」「「V1 出す」に比べて「V1 出る」の方が使用制限が強いもの」の三つに分けられることが分かった。今後は「V1 出す」と「V1 出る」の前項動詞の特徴についてさらに詳しく分析し、「V1 出す」と「V1 出る」の意味的・統合的関係について明らかにしていく。

注

1）例（1）～（20）は全て Web データに基づく複合動詞用例データベース（開発版)から抽出した実例を基に不要な修飾成分などを省いて分かりやすく短く作例したものである。
2）姫野（1987）の無意味形態素とは「はみ出す」の「はみ」や「さし出す」の「さし」などのことである。ただし、本稿では「はみ」は「食む」、「さし」は「差す」から来ているため、無意味形態素ではなく動詞として捉えることにする。

参考文献

奥田靖雄（1983)「を格の名詞と動詞のくみあわせ」(言語学研究会『日本語文法・連語論（資料編)』むぎ書房)、21-149 頁。
奥田靖雄（1992)「動詞論」(奥田靖雄著作集刊行委員会『奥田靖雄著作集 3　言語学編（2)』むぎ書房)、5-114 頁。
朱笑笑（2018)『複合動詞「～出す」と「～出る」』上海外国语大学硕士学位论文。

姫野昌子（1987）「複合動詞『～出る』と『～出す』」『日本語学校論集』4 号、71-95 頁。
Web データに基づく複合動詞用例データベース（開発版）： https://csd.ninjal.ac.jp/comp/index.php

A study on features of the first verb of compound verbs "*V-dasu*" and "*V-deru*"

LUO, Feifan

Abstract

The purpose of this study is using the corpus to discuss features of the first verb of compound verbs "*V-dasu*" and "*V-deru*".

In this study, top 55 verbs of the first verb of "*V-dasu*" and "*V-deru*" were extracted from the corpus and these words were classified according to the verb classification of Okuda(1992). The results revealed that (1) the first verbs of "*V-dasu*" are combined with most verbs except those expressing "volitional activity(*ishi katsudou*)" and "human physiological/emotional state(*ningen no seiri/jyoudouteki na jyoutai)*", (2) the first verbs of "*V-deru"* are combined with most verbs except those expressing "changes of the status of things(*samagae*)" "transformation(*utsushigae*)" "sensibility(*kannsei*)" and "human contact(*ningenteki na sessyoku*)".

Among the top 55 verbs of the first verb of "*V-dasu*" and "*V-deru*", there are 12 pairs that have V1 in common, and they can be divided into three types: those whose meaning do not change when be replaced, those whose meaning will change when be replaced, and those whose restrictions are stronger in "*V-deru*" than in "*V-dasu*". And the differences between these three types have also been discussed in this study.

Keywords： compound verb, *V1-dasu*, *V1-deru*, the first verb, intransitive/transitive

「限定」を表すとりたて詞「ばかり」の意味分類と意味における曖昧性
―フォーカスの観点から―

陳 泳姍（名古屋大学大学院生）

要旨

本稿では、「限定」を表す「ばかり」の意味を再分類する。そして、「ばかり」の意味における解釈の曖昧性、およびその曖昧性が生じる条件を明らかにすることを目的とする。

本稿では、茂木（2002）を参考にし、「ばかり」がとりたてるのが、モノ・ヒトの存在であるか、動作・出来事の発生であるかによって、「ばかり」の意味を大きく「排他的存在の複数性」と「排他的動作の反復性」の２種類に分けた。

また、［(属性・性質）N（具体物・人）　バカリ　格助詞　V（動作・変化)］という構文に用いられる際に、「ばかり」の意味に「排他的存在の複数性」と「排他動作の反復性」という両方の解釈が得られるが、「ばかり」文の前後文脈に、「ばかり」の前接名詞と対比する他者があり、かつ述語が共有されているなら、「ばかり」が N フォーカスをとり、「排他的存在の複数性」と解釈される。その一方、「ばかり」がとりたてる自者と対比する他者は述語句であり、かつ同じ述語を用いた文を作れないなら、「ばかり」は B フォーカスをとり、「排他的動作の反復性」と解釈される。

キーワード：とりたて詞、ばかり、意味の曖昧性、フォーカス

はじめに

限定を表す「ばかり」は，次のように異なる文の中で異なる意味を表す。

(1)　一階には空き部屋ばかりがある。　（作例）
(2)　最近は外食ばかりをしている。　（作例）

(1) の「空き部屋ばかりがある」は、「一階」には「空き部屋」が数多くあることを表すと同時に、「空き」という特徴を際立たせ、他の部屋が存在しないという排他性を表している。これに対し、(2) は「外食する」という動作が繰り返して起き、外食以外の動作がほぼないという排他性を表している。

一方で、(3) では、「前に座っている人が呼ばれる」という動作が繰り返して起きたこと

を表すと同時に、他の人ではなく、「前に座っている」という人の特徴を際立たせ、呼ばれる人を限定する意味を表している。このように、動作の繰り返しを限定するか、人の存在を限定するかで、二つの意味が曖昧になる場合がある。

(3)　前に座っている人ばかりが呼ばれた。　（作例）

(1) と (2) のように、同じ「ばかり」が異なる文構造で違う意味を表す。また、(3) のように、「ばかり」文の解釈に意味の曖昧性が生じる場合もある。

本稿では、「限定」を表す「ばかり」の意味を再分類し、「ばかり」の意味における解釈の曖昧性、およびその曖昧性が生じる条件について記述していく。

１．先行研究

茂木（2002）は寺村（1991）、山中（1993）などを引継ぎ、アスペクト的観点から「ばかり」の意味を、「コトの多回的反復」を表す〈反復〉解釈と、「一時点の空間に複数のモノがある」ことを表す〈存在〉解釈に分けた。

(4)　冷蔵庫にはビールばかり入っている。　〈存在〉
(5)　僕ばかりが廊下に立たされた。　〈反復〉

また、茂木（2002）は「ばかり」文の解釈と動詞述語の対応関係を以下のようにまとめた。

(6)　「ばかり」は、
　a. 存在構文を内的構造として持つ述語を伴う文に現れた場合、存在構文の述語との呼応による解釈が可能である。（〈存在〉解釈）
　b. 動作や変化を表す述語を伴う文に現れた場合、動作性述語あるいは変化を表す述語との呼応による解釈が可能である。（〈反復〉解釈）
　c. 上のいずれの述語とも呼応できない場合、基本的に許容されない。

(7) のような位置変化動詞は「動作主が対象に働きかけ、その働きかけによって対象が移動した結果、ある場所に存在する」という動的働きかけと静的存在両方の意味をもつため、(7) は＜反復＞と＜存在＞両方に解釈できると茂木（2002）は述べている。

＜反復＞と解釈される時、「ばかり」がフォーカスする（とりたてる）のは「本を置く」という動作である。一方、＜存在＞と解釈される時、「ばかり」がフォーカスするのは「本」の存在であると考えられる。

（7）　男性が右の棚に本ばかりを置いた。（茂木 2002：182）

これに対し、次の例は茂木の説明に当てはめれば〈反復〉解釈になり、「ばかり」がフォーカスするのは「辛いおかずを食べる」という動作の繰り返しであることになる。しかし、沼田（2002）によると、（8）での「ばかり」のフォーカスは「辛いおかず」である。

（8）　ご飯他をろくに食べずに、〈辛いおかず〉自ばかりを食べていたから喉が渇いた。
（沼田 2000：168）

さらに、先ほどの（7）の例文に前後文脈を加えると、「ばかり」が一つの意味にしか解釈できなくなる場合もある。（7’）では、「ばかり」文の前文脈に、「ばかり」の前接名詞である本と対比する他者として、「いろんなもの」が提示され、（7’）での「ばかり」のフォーカスは「本」である。

（7’）　いろんなものを置きたいのに、太郎が右の棚に本ばかりを置いた。（作例）

茂木（2002）による一回か多回かというアスペクト的観点から「ばかり」を分析すると、「ばかり」がフォーカスする真の自者が見落とされる可能性がある。そのため、本研究では、茂木（2002）のアスペクト的観点からではなく、「ばかり」がフォーカスするのが、モノ・ヒトの存在であるか、動作・出来事の発生であるかによって、「ばかり」の意味を再分類する。また、沼田（2000）のとりたてのフォーカスに関する記述を参考にし、「ばかり」の意味における解釈の曖昧性、およびその曖昧性が生じる条件を記述していく。

２.「ばかり」の意味分類

本研究では、「ばかり」がとりたてるのが、モノ・ヒトの存在であるか、動作・出来事の発生であるかによって、「ばかり」の意味を大きく「排他的存在の複数性」と「排他的動作の反復性」の２種類に分けた。

「排他的存在の複数性」の意味を表す「ばかり」がフォーカスするのはモノ・ヒトの存在である。この存在は（9）のような一時点における存在と、（10）のような時間軸における繰り返される存在がある。（9）のような一時点が限定される場合では、「ばかり」の前接語は不特定多数のモノ・ヒトである必要があるが，（10）の場合は固有名詞でも可能になる。（9）と（10）のような「ばかり」に具体名詞が前接し、存在表現が後接する構文をとる場合、「ばかり」がフォーカスするのがモノ・ヒトの存在の多さであり、「排他的存在の複数性」と解釈される。構文パターンは以下のようになる。

(9)　［一時点］［場所］ニ　N（不特定多数の具体物・人）バカリ ガ ［存在表現］
教室に入ると、女の子ばかりがいる。　（作例）　「排他的存在の複数性」

(10)　［場所］ニ　N　バカリ　ガ　［存在表現］
教室の前の席にはいつも太郎ばかりがいる。（作例）　「排他的存在の複数性」

「排他的存在の複数性」の意味と解釈される「ばかり」がよく用いられる構文パターンは（11）である。

(11)　V（動作動詞）　バカリ　ダ。
彼は勉強せずに、ゲームをやるばかりだ。　「排他的動作の反復性」

（11）のような「排他的動作の反復性」の意味を表す「ばかり」がフォーカスするのは動作・出来事の繰り返される発生である。

３．「排他的存在の複数性」と「排他的動作の複数性」の曖昧性

「ばかり」が「排他的存在の複数性」と「排他的動作の反復性」の両方に解釈できる場合がある。しかし、沼田（2000）のフォーカスの観点から、それぞれの意味に解釈される時フォーカスする自者は明確されているが、それを自者としてフォーカスする条件については明確されていない。そのため、本節では、「ばかり」が「排他的存在の複数性」と「排他的動作の反復性」の両方に解釈できる際に、「ばかり」がとりたてる自者がモノ・ヒトの存在である場合と、動作・出来事の発生である場合の条件を記述していく。

「ばかり」が「排他的存在の複数性」と「排他的動作の反復性」という両方の解釈を持ち得るのは、(12）のように「N（具体物・人）　バカリ　格助詞　V（動作・変化」という構文をとる場合である。この構文では、何らかの属性・性質を持つ名詞に「ばかり」が後接し、「ばかり」に動作・変化の意味を表す動詞が後接する。

(12)　青の服を着ている人ばかりが指名される。　（作例）

沼田（2000：165）は、とりたて詞のフォーカスには次の３種類があると述べている。

(13)　a．直前フォーカス（N フォーカス）：とりたて詞の直前、あるいは格助詞を介して直前の要素がフォーカスとなるもの。
ご飯他をろくに食べずに、〈辛いおかず〉自ばかりを食べていたから喉が渇いた。
b．後方移動フォーカス（B フォーカス）：文中の名詞句などに後接するとりた

て詞が、その名詞句から述語までの範囲つまり述語句をフォーカスとするものをいう。

〈代金だけもらって〉自、仕事をしない他。

c．前方移動フォーカス（F フォーカス）：とりたて詞が述語に後接するにもかかわらず、述語とは離れて、フォーカスはその述語共起する前方の名詞句などであるものをいう。（沼田 2000：167-8）

例えば、(14) での「ばかり」が N フォーカスをとる場合、とりたてられる自者は「いらないもの」になる。B フォーカスをとる場合、とりたてられる自者は「いらないものを置く」という動作になる。「いらないもの」を自者としてフォーカスする場合、「ばかり」の意味は「観察する時、部屋にあるいらないものは他のものと比べて圧倒的に数が多い」という「排他的存在の複数性」と解釈される。これに対し、「いらないものを置く」ことを自者としてフォーカスする場合、「ばかり」の意味は「彼は他の動作をやらずに、ひたすら部屋にいらないものを置くことを繰り返す」という「排他的動作の反復性」と解釈される。そのため、「ばかり」が表す意味は「ばかり」がフォーカスする自者によって決定されることになる。同時に、「ばかり」が何を自者としてフォーカスするのか，その条件を明らかにする必要がある。

(14)　彼は部屋にいらないものばかりを置いた。　（作例）

さらに、沼田（2000）は N フォーカスの場合、自者と他者は基本的に同じ述語句を共有するが、自者と他者が同じ述語句を共有しない場合でも、二つの述語句が同義性を満たしていると判断することができれば、それから共通の述語句を考えることができるとする。例えば、(15) での自者である「人事権」と他者である「経理」は同じ述語を共有しないが、「押さえる」と「握っている」は同義で、どちらも「独占する」と置き換えることができる。

(15)　実際は、女房の専務が経理他を押さえ、〈人事権〉自も握っている。

（沼田 2000：166）

N フォーカスをとる (13a) と B フォーカスをとる (13b) は「N　とりたて詞　格助詞　動詞」という同じ構造を持つが、(13a) は N フォーカスをとり、(13b) が B フォーカスをとる。これは、(13a) では、他者である「ご飯」と自者である「辛いおかず」は同じ述語「食べる」を共有するが、(13b) は、同じ述語を用いた文を作れないため、N フォーカスが成立しないためである。

また、(16) では、(16b) は、子供がテレビを見る様子を観察するたびに、見ている番組の中で、アニメの数が圧倒的に多く、ニュース番組がほとんどないという意味を表す。「ば

かり」の前接名詞である「アニメ」と対比する他者として「ニュース」が提示され、かつ同じ述語が共有されているため、「ばかり」がＮフォーカスをとり、とりたてる自者はアニメである。それに対し、(16c) は、子供を観察するたびに、他のことをやらずに、テレビを見ることのみが繰り返されるという意味を表す。「ばかり」を含む節の述語である「アニメを見る」と、前文脈に現れる述語である「他のことをやる」は同類の事態ではないため、「ばかり」がＢフォーカスをとり、とりたてる対象は「テレビを見る」ことになる。

(16)　a. 子供はいつもアニメばかりを見る。
　　b. 子供はいつもニュース他を見なくて、〈アニメ〉自ばかりを見る。
　　＝子供がいつも見るのはニュース他ではなく、〈アニメ〉自ばかりだ。
　　c. 子供はいつも他のことをやらずに他、〈アニメばかりを見る〉自。　（作例）

［(属性・性質) N（具体物・人）　バカリ　格助詞　V（動作・変化)］という構文に用いられる際に、「ばかり」がフォーカスする自者は２つの可能性があるため、「ばかり」は「排他的存在の複数性」と「排他動作の反復性」という両方の解釈を持つ。「ばかり」が取り立てる自者を決める条件を図１に示す。「ばかり」文の前後文脈に、「ばかり」の前接名詞と対比する他者があり、かつ述語が共有されているなら、「ばかり」がＮフォーカスをとり、「排他的存在の複数性」と解釈される。これに対し、前後文脈に現れる対比表現の述語と「ばかり」を含む節の述語が同類の事態ではない場合、つまり、同じ述語を用いた文を作れない場合、「ばかり」はＢフォーカスをとり、「排他的動作の反復性」と解釈される。

名詞Ａ　述語Ｘ、名詞Ｂ-バカリ　述語Ｙ
述語Ｘと述語Ｙが同類の共通する動作のとき⇒　バカリの自者が名詞Ｂになり、
Ｎフォーカスをとる
「排他的存在の複数性」
述語Ｘと述語Ｙが共通の動作ではないとき⇒　バカリの自者が述語Ｙになり、
Ｂフォーカスをとる
「排他的動作の反復性」

図１「ばかり」がフォーカスする自者を決める条件

おわりに

本研究では、「ばかり」がとりたてるのがモノ・ヒトの存在であるか、動作・出来事の発生であるかによって、「ばかり」の意味を大きく「排他的存在の複数性」と「動作の反復性」に分けた。また、「ばかり」が［(属性・性質) N（具体物・人）　バカリ　格助詞　V（動作・変化)］という構文に用いられる際に、「排他的存在の複数性」と「排他的動作の反復

性」の間に曖昧性が生じることを述べた。「ばかり」文の前後文脈に、「ばかり」の前接名詞と対比する他者があり、かつ述語が共有されているなら、「ばかり」がＮフォーカスをとり、「排他的存在の複数性」と解釈される。これに対し、前後文脈に現れる対比表現の述語と「ばかり」を含む節の述語が同類の事態ではない場合、「ばかり」はＢフォーカスをとり、「排他的動作の反復性」と解釈される。

参考文献

寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版。

沼田善子(2000)「(第３章) とりたて詞」(金水敏・工藤真由美・沼田善子 (編)『日本語の文法２　時・否定と取り立て』岩波書店)、175-207 頁。

茂木俊伸(2002)「「ばかり」文の解釈をめぐって」『日本語文法』2-1、171-189 頁。

山中美恵子(1993)「現象−対比−主題−その関連性の解明に向けての覚書−」(『高度な日本語記述文法省作成のための基礎的研究』平成４年度科学研究費補助金総合研究(A)研究成果報告書 (研究代表者：益岡隆志))、106-135 頁。

Semantic Classification and Ambiguity in the Meaning of the Torihata Word *bakari* for Limited. From the perspective of focus

CHEN YONGSHAN

Abstract

In this paper, we reclassify the meaning of the word bakri for limited. It then aims to clarify the ambiguity of interpretation of the meaning of bakri and the conditions under which this ambiguity arises.

In this paper, the meaning of bakri is broadly divided into two types, "plurality of exclusive existence" and "repetition of exclusive action," depending on whether it is the existence of things or people or the occurrence of actions or events that is taken up by *bakri*.

In addition, when used in the construction [(attribute/property) N (concrete object/person)bakri case-marking particle V (action/change)], *bakri* can be interpreted both as "plurality of exclusive existence" and "repetition of exclusive action," but if there are others in the context before and after the *bakri* sentence that are in contrast with the noun prefixed to *bakri* and the predicate is shared, *bakri* takes the N focus and is interpreted as "plurality of exclusive existence". On the other hand, if *bakri* is a predicate phrase, and if it is impossible to make a sentence using the same predicate, then *bakri* takes the B focus and is interpreted as "repetition of exclusive action".

Keywords：　focas particles, bakari, ambiguity of meaning, focus,

中国語を母語とする中上級日本語学習者の同形類義語の習得に関する試験的研究

于 心（成都東軟学院），李 東哲（山東外事職業大学）

要旨

中国語母語話者の日本語学習者は漢字知識があるため、漢語の学習においては非漢字圏の日本語学習者より習得が早いと見なされている。しかし、同じ漢字であっても両者の間にはいろいろな相違点があり、それがかえって負の転移になりやすいことが考えられる。そのためここ数十年、日中同形語をめぐる研究が活発に行われているが、管見の限り、学習者の語彙知識の測定に関する研究に傾きがちで、語彙の使用や学習過程に着眼点を置いて分析した研究はそれほど多くない。

このようなこれまでの同形語研究の実態に鑑み、本研究では日中同形語の運用に着目すると同時に、インタビューの形式で学習者の語彙の理解度も合わせて調べた。その結果、日中同形語の習得において意味の重なる部分では「理解は正しいが、産出は間違っている」誤用が生じやすく、意味の異なる部分では「産出は正しいが、理解は間違っている」誤用が生じやすいことが明らかになった。また、学習者の学習過程に関する調査結果から、学習者は同形語を学習する際に対訳辞書（日中辞典類）の意味解釈に頼り過ぎてはいけず、授業中に教わった知識を重んじるとともに、単純に同形語の意味だけ覚えるのではなく、実際どのような語と結びついて使用されるかについても把握したほうが、効果的かつ包括的に同形語を習得できる近道であるという結論を得た。

キーワード：　同形類義語、中国語母語話者、語彙の理解、語彙の産出、学習過程

はじめに

中国語と日本語の間には大量の同形語が存在している。施(2019)の統計によると、同形語の中で最も多いのは同形類義語であるが[1]、この類は加藤(2005)、小森他(2008)、陳(2003、2009)などの研究によって最も区別しにくく、誤用しやすいことが明らかになっている。したがって、同形類義語の習得研究はとりわけ中国語母語話者の日本語学習者において大変重要な研究課題である。

本研究の目的は、中国における日本語学習者が日本語学習においてクラス学習など意図的な学習を主とし、リーディングなど付随的な学習を補助とする学習形態の現状を踏まえ

て中上級日本語学習者の語彙理解と学習過程が語彙産出に及ぼす影響に着目し、中国の日本語学習者が同形類義語をより効果的に習得できるようにすることである。

そこで、本研究では先行研究を踏まえたうえで、中国四年制大学日本語学科在校生[2)]を実験対象に「作文テスト」と「インタビュー調査」の２つに分けて学生の同形類義語の習得状況を調査し、そのデータに基づいて分析を行っている。データの分析では、まず作文における語彙使用の誤用をまとめ、続いて被験者のインタビュー結果を中心に、学習者の語彙に対する理解と学習方法、学習過程などについて考察した。そして最後に、同形類義語の理解と産出特徴および学習者の学習過程が同形類義語の学習に与える影響を総合的に分析し、中国における日本語学習者に適した学習方法について私見を述べた。

１．先行研究と問題点

日本における日中同形語研究の嚆矢は文化庁(1978)の漢字音読語分類研究である。文化庁(1978)では日本語教科書から抽出した漢字音読語を日中両言語の意味関係によってSame(意味がほぼ同じ語。以下、S 語と略称する)、Overlap(意味の一部が重なっている語。以下、O 語と略称する)、Different(意味が全く異なる語。以下、D 語と略称する)、Nothing(日本語の漢語と同じ漢字語が中国語にはないもの。以下、N 語と略称する)の４つに分類している。その後、三浦(1984)は日中同形語の意味範囲の広さに注目し、O 語をさらに中国語にのみ独自の意味がある Overlap Ⅰ(以下、O 語Ⅰと略称する)、日本語にのみ独自の意味がある Overlap Ⅱ(以下、O 語Ⅱと略称する)、両言語にそれぞれ独自の意味がある Overlap Ⅲ(以下、O 語Ⅲと略称する)に下位分類している。

また、陳(2003)では中国語を母語とする日本語学習者が日中同形語習得に及ぼす影響について考察しているが、日本語のレベルと関係なく習得しやすいのは S 語、習得が難しいのは D 語、そして、O 語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの間の学習難易度ははっきりしていないと指摘している。一方、小森他(2008)では陳(2003)などの研究結果を再検討し、O 語(2)[3)]と D 語の認知処理について考察すると同時に、正答率だけでなく、答える時の反応時間も含めて比較分析を行っている。その結果、学習者の日本語レベルにかかわらず、同形語の認知処理の過程では日本語より中国語で処理するほうが優先され、日本語のレベルが高い学習者は意識的にある程度中国語における語義の過剰化を抑えているため、その意味は正しく解釈できるものの、母語の干渉が完全には消えていないことを明らかにしている。

以上の先行研究により学習者の日本語レベルや同形語の意味範囲、意味使用の一般性、同形語自体の難易度が学習結果に影響することが明らかになっているが、これまでの同形語習得研究を概観すると、語彙の産出結果に集中することが多く、語彙の受容や学習過程に関する研究が少ない。また、その研究方法は主として「選択肢テスト」や「正誤判断テスト」のようなアンケート調査によるものや量的データの収集が中心となっているが、「インタビュー調査」などによる質的研究はわりと少ない。

しかし、語彙の学習は漸進的で、学習過程と語彙に対する理解は産出に直接影響を与えるため、学習過程、語彙認識、産出結果を同時に考察してこそ、語彙の学習特徴や誤用原因をより包括的に分析することができる。そこで、本研究では学習者の語彙の産出結果を基に、学習者の語彙の理解と学習過程についても考察することによって語彙の受容と語彙の産出の関係から同形類義語の学習特徴と誤用原因を明らかにしたい。

２．調査の概要

被験者は中国四川省にある成都東軟学院日本語学科の三年生６名[4]であるが、この６名はいずれも 2019 年日本語ゼロベースで入学し、2020 年 9 月から 11 月まで約２か月間行われた JLPTN1 語彙強化訓練[5]を受け、2020 年 12 月の JLPTN1 試験に合格している。

また､本調査で取り上げたターゲット語はすべて JLPTN1 語彙強化訓練の際に学習した同形語で、計 8 語[6]である（[表 1]）が、その中で日中間で意味は同じで、品詞やコロケーションは異なる[7]S 語が 2 語、そして０語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲがそれぞれ 2 語ずつである。

［表 1 ターゲット語］

ターゲット語	基調	一律	解明	提起	人手	収容	打開	交付
種　　類	S 語	S 語	０語Ⅰ	０語Ⅰ	０語Ⅱ	０語Ⅱ	０語Ⅲ	０語Ⅲ

テスト 1 ではターゲット語を使って被験者に短文を作らせた。制限時間は 25 分、辞書や携帯電話などの持ち込み禁止で、任意に１語につき、短文を２つずつ作らせる。次に、作文の正誤を問わず、すぐテスト２に移る。テスト２ではターゲット語の理解と学習過程に焦点を絞るために、被験者には次の５つの項目に沿ってインタビューを実施した。

①自分が作った文の意味
②自分が作った文の使用の場面
③ターゲット語に対する理解
④ターゲット語の学習環境
⑤ターゲット語を習った時の学習意識

３．データの分析

本実験は 2021 年 11 月 5 日、午後 2 時から 5 時まで、成都東軟学院のマルチメディア教室で行われた。テスト 1 では計 96 文のターゲット語の単文が得られ、テスト 2 では 150 分間のインタビュー録音データを回収できた。

3.1　意味の理解と産出の結果

データの統計の便宜をはかるために、被験者 6 名をそれぞれ A～F で表した。そして、次の[表 2]のように、例えば A の学生が作った短文を A-1、A-2 で示し、インタビューの中国語の回答を右横の「解釈」と「場面設定」においてそれぞれ取り上げた。

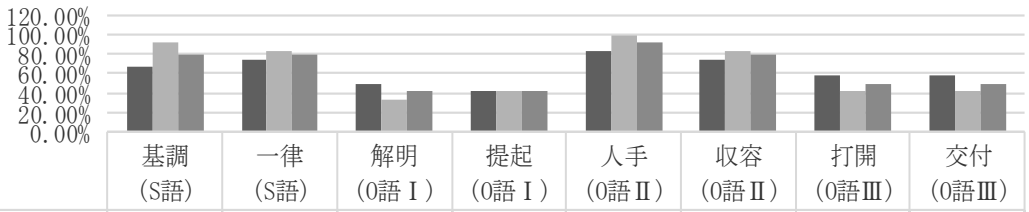
［表 2　「交付」の回答例］

被験者	作　文	解　釈[8]	場面想定（どのような場面を想定して作文したのか）
A	A-1:この工事の交付日は十月十日です。	交付日期（交付された日）	“比如这个工程的交付日期是 10 月 10 日，告诉客户这一天完工的意思。和截止日期意思一样。”(例えば、この工事の納期が 10 月 10 日であることを取引先に知らせ、その日に完成するという意味である。締め切り日と同じ意味である)
	A-2:八月十一日までに証明書を交付します。	交给，交出（渡す、提出する）	“意思就是比如交给对方什么手续书面资料。去学校交证明材料的时候，把证明书给交了。”（意味は例えば、相手に何かの手続きの書類を渡すという意味である。学校に行って証明書類を提出する時、証明書を提出した）

その後、被験者 A～F の「作文正答率」と「解釈正答率」についてそれぞれ統計することにした。例えば、A-1 における「交付日」は被験者によって「交付された日」と解釈され、場面の想定では「取引先にこの工事の納期は十月十日である」ことを知らせる場合とされている。A-1 における「交付日」は「交付された日」という解釈で正しいが、作文では「工事の交付日」と間違えているため、「解釈正答率」として統計した。逆に、A-2 において、A は中国語の「交付」を「わたす、提出する」意味と見なし、場面の想定は「学校に行って証明書類を提出する時」とされている。よって、「証明書を交付する」は正しいが、「学校に証明書類を提出する」という理解は間違っているため、「作文正答率」として統計した。

以上の算定方法により集計した結果をグラフで示すと、次の[図 1 ターゲット語の産出結果と語彙理解]のとおりである。

［図 1 ターゲット語の産出結果と語彙理解］



	基調（S語）	一律（S語）	解明（0語Ⅰ）	提起（0語Ⅰ）	人手（0語Ⅱ）	収容（0語Ⅱ）	打開（0語Ⅲ）	交付（0語Ⅲ）
作文正答率	66.70%	75.00%	50.00%	41.70%	83.40%	75.00%	58.30%	58.30%
解釈正答率	91.70%	83.40%	33.30%	41.70%	100.00%	83.40%	41.70%	41.70%
平均値	79.20%	79.20%	41.70%	41.70%	91.70%	79.20%	50.00%	50.00%

[図 1]を見ると、「作文正答率」と「解釈正答率」とでは、S 語(基調、一律)と 0 語Ⅱ(人手、収容)の「解釈正答率」は「作文正答率」より高くて 8 割以上で、被験者は S 語と 0

語Ⅱについてその意味は理解できるが、使い方は間違っている。それに対して、0語Ⅰ(解明、提起)と0語Ⅲ(打開、交付)の「作文正答率」はいずれも4割以上で、また「解釈正答率」より高い、被験者は正しく使ってはいるが、意味の理解は間違っている。概して言えば、言葉の理解と作文は必ずしも一致していない。また、正答率の「平均値」では、0語Ⅱ＞S語＞0語Ⅲ＞0語Ⅰの順に習得しにくいことがわかる。

3.2 作文とデータの分析

3.2.1 「理解は正しいが、産出は間違っている」誤用

まず、被験者の書いた短文におけるS語と0語Ⅱにおける誤用を1つずつ取り上げて見てみたい。

(1) 「人手」 B-2:コロナのせいで、人手が少ない。 (S語)
(2) 「一律」 C-1:君が何を聞いても、私は一律答えない。 (0語Ⅱ)

例(1)において、B-2はインタビューで「(日本語における「人手」は) 中国語の“人手”と同じ意味で、働き手という意味だと思う。そして、「人手不足」における“不足”は「少ない」と同じ意味だし、中国語にも“人手少”という表現があるため、「人手が少ない」は正しい表現だと思う」と説明してくれたが、これは明らかに中国語の“人手少”を日本語に直訳した間違いである[9]。一方、「一律」の用法についてC-1は「何を聞いても一切お答えできないと言いたかった。日本語では『一律禁止』や『一律無料』という表現をよく見かけるが、『例外なく』と同じ意味だと思う」と答えてくれた。結局、「一律」を「例外なく」という意味として正しく理解しているが、「一律答えない」という間違った表現を使っている。中国語の「一律(一概)不回答」を日本語に直訳したものと推定できる。同じような誤用の産出例としては「収容営」[10]、「工事の交付日」などがある。いずれも、頭の中でまず中国語で文を作り、それを日本語に訳して表現したことによる母語の負の転移である可能性が高い。

3.2.2 「産出は正しいが、理解は間違っている」誤用

今度は3.2.1とは逆に、作文の産出は正しいが、理解は間違っている0語Ⅰと0語Ⅲの誤用例について見てみたい。

(3)「解明」 E-1: 原因を解明して、事件を解決した。 (0語Ⅰ)
(4)「打開」 F-1: 安全な打開方法を探している。 (0語Ⅲ)

まず、例(3)の「解明」についてE-1は「二人のチーム員は誤解のために喧嘩をしたが、後にお互いに経緯を説明して誤解を解いて事件を円満に解決した。だから、『原因を解明す

る』は『喧嘩の原因をお互いに明白に話して、誤解が解けた』の意味だろう。それで『原因を解明して、事件を解決した』とした」[11]と説明した。「解明」は「説明して、解決した」という意味に理解されている。しかし、「原因解明」とは原因を解き明かすことや不明な点をはっきりさせるという意味なので、E-1 の理解は間違っている。次に、例(4)の「打開」について F-1 は「自分にとって、とても重要な箱を壊さないように安全な開ける方法を必要である」[12]と解釈している。しかし、「打開方法」は物理的に「箱を開ける方法」ではなく、「打開策」を意味しているため、F-1 の「打開」に対する意味の理解は間違っている。

要するに、日中両言語における独自の意味を有する熟語は学習者にとって習得しにくいと見られる。そこで、とりわけ中国語における意味範囲が広い語や日中でそれぞれ独自の意味を有する語の使用においては意味を混同する傾向がある。

４ 意図的学習と付随的学習との学習効果

前節の産出特徴と誤用原因に関する分析結果を踏まえ、この節では被験者による「学習過程」や「語彙学習の方法」に関するインタビュー調査で得られた答えについて分析し、ターゲット語の学習過程結果との関係について述べることにする。「基調」の学習過程に対する学生 A の回答結果を例にとると、学生 A は「A-1」に使用された「を基調とする」について授業で先生に教わったと明確に回答したので、「授業中」の項に計上した。また、「A-2」の「上昇基調」は新聞で意図せずに記憶していることから「新聞／漫画／小説など」の項に計上した。

［表 3　学習結果と学習過程］

被験者	ターゲット語の学習結果			ターゲット語の学習過程					見たことはない
	作文正答率	日本語独自義の使用率	解釈正答率	授業中	辞書/問題集など	新聞/漫画/小説など	映画/アニメなど	その他	
A	68.75%	37.50%	68.75%	50.00%	06.25%	31.50%	12.50%	00.00%	00.00%
B	50.00%	25.00%	68.75%	37.50%	37.50%	00.00%	12.50%	00.00%	12.50%
C	62.50%	00.00%	56.25%	56.25%	12.50%	06.25%	06.25%	00.00%	18.75%
D	81.25%	12.50%	87.50%	68.75%	06.25%	00.00%	18.75%	06.25%	00.00%
E	43.75%	06.25%	62.50%	37.50%	12.50%	00.00%	12.50%	06.25%	31.25%
F	62.50%	00.00%	56.25%	25.00%	06.25%	06.25%	25.00%	00.00%	37.50%

［表 3］は 6 名の被験者の「正答率」と「学習過程」に関するデータの統計である。ターゲット語はすべて JLPTN1 語彙強化訓練の際に出現した単語である。そこで、「正答率」は「授業中」と回答した割合が優勢であることから意図的学習が語彙習得に好影響を与えるということがわかる。また、被験者の回答を分析してみると、例えば学生 D の場合、「クラスの学習内容」が語彙習得の向上に効果があることを示すものの、日本語独自の意味を有する語の使用率は低い。それから「(先生が) 意味を教えてくれたのに、漢語だから時間が

かからなくてもいい」というインタビューの回答から、同形語であるため強いてその意味を覚えようとする意識が低く、語彙の習得は授業内容のまま足踏みし、向上しないという傾向が見られる。

一方、日本語独自の意味を有する語の使用率が一番高い学生Aは、インタビュー調査において、付随的学習方法を取っていることから、リーディングの語彙習得率に比例し、付随学習手法が語彙の運用能力に寄与していることが分かる。ただ、学生Aの「正答率」は68%にとどまっている。

また、学生Bには、「辞書、問題集など」と「正答率」がアンバランスで、「理解は正しいが、産出は間違っている」誤用も多かった。これは、日中同形類義語は両言語において意味の重なる部分があるものの、学習者向けの辞書や教科書における説明や解釈は断片的で、「理解は正しいが、産出は間違っている」の誤用が生じやすいと考えられる。それに対して、日本語独自の意味を有する語の使用率が高いことから、単語リストで語彙学習をする学習法は同形類義語の認知と運用に効果があることが分析によって明らかになっている。

要するに、教室における教師の指導活動は語彙学習の向上には効果があるが、語彙の化石化現象をもたらす恐れがある。しかも、リーディング、映画やアニメなど付随的な学習における学習ストラテジーは語彙を活性化させる効果があるが、使用の際に注意しなければ誤用が生じやすい。逆に、辞書や問題集などを機械的に暗記すれば、語彙に対する認知度は向上するが、実際の使用能力の向上には限界がある。

おわりに

本研究では、学習者の作文産出結果とインタビュー調査結果を通じて、学習者の日中同形類義語の習得状況について考察・分析したが、学習者は日本語と中国語における同形語の意味・機能の使用カテゴリーの相違点をはっきりと区別できていないため、語彙の理解と産出に偏りが生じていることがわかった。つまり、日中両言語において意味が共通する場合は「理解は正しいが、産出は間違っている」の誤用が多く、日中両言語においてそれぞれ独自の意味を有する場合は「産出は正しいが、理解は間違っている」の誤用が多いということが明らかになった。したがって、学習者に日中同形語を効率的かつ正確に習得させるためには共起関係と独自の意味範囲の区別に重点を置く必要があろう。また、教室における指導活動だけでなく、学習者に生の日本語を読む習慣を身に付けさせたほうが望ましい。

今回は被験者数が少なく、必ずしも日中同形語の習得状況が正しく捉えられているかどうかわかりかねるため、被験者の人数を増やし、各タイプの同形類義語を中心に行い、より詳細な実験データによるアプローチが今後の課題である。

注

1)同形語の分類基準や統計したコーパスのデータによって各クラスの数を集計した結果が異な

る。施建軍(2019) は、2000 年以降の光明日報(中)と毎日新聞(日)の内容をビッグデータ統計技術で集計した結果、0 語の数が最も多いと指摘した。

2)成都東軟学院日本語学科の在校生。

3)小森他（2008）では、日本語に独自の意味がある 0 語は 0 語(1)、中国語に独自の意味がある 0 語は 0 語(2)、両言語にそれぞれ独自の意味がある 0 語は 0 語(3)で表している。

4)被験者 6 名全員が N1 に合格したが、文字・語彙の成績評価では 3 名が A、3 名が C であった。また、学生 A は新聞や本を地道に読む習慣があるなど、6 人の学習者の学習習慣もさまざまである。

5)日本語能力試験に備えて成都東軟学院で独自に行った小グループ授業。

6) 被験者 6 名に「作文テスト」と「インタビュー調査」を行ったが、調査総時間数はおよそ一人当たり 50 分ほどである。もし、ターゲット語数を増やすと調査時間が伸び、被験者が適当に答えてしまい、テストの結果に影響を及ぼす恐れがあるため、ターゲット語数を 8 語に限定した。また、選択したターゲット語はそれぞれ異なるタイプの同形類義語が 2 つずつで、同形類義語の産出と理解の特徴がある程度反映されていると思われる。

7)例えば、日本語では「主な基調」と話しているが、中国語母語話者は母語の影響により「大基調」、「小基調」という間違った語連結を使っている。

8)「解釈」における中国語はインタビュー時の被験者の意味解釈で、(　) 内の日本語は学生の答えを筆者が日本語に訳したものである。右横の「場面想定」も同様である。

9)学習者が習っている教科書には「人手が少ない」という表現が出ていないし、日本語母語話者による実例も非常に少ないため、学習者が意識してこの表現を使っていたとは思えない。

10)中国語にも「収容所」ということばはあるが、戦争における軍の収容所は一般的に「収容営」という表現を使う。

11) と 12) の被験者の回答には正しくない日本語の表現があったが、そのままにしておいた。

参考文献

加藤稔人（2005)「中国語母語話者による日本語の漢語習得－他言語話者との習得過程の違い」『日本語教育』125、96-179 頁。

小森和子・玉岡賀津雄・近藤安月子（2008)「中国語を第一言語とする日本語学習者の同形語の認知処理：同形類義語と同形異義語を対象に」『日本語科学』23、81-179 頁。

施建軍（2019)『中日现代语言同形词汇研究』北京大学出版社。

陳毓敏（2003)「中国語を母語とする日本語学習者の漢語習得について―同義語・類義語・異義語・脱落語の 4 タイプからの検討－」『平成 15 年度　日本語教育学会秋季大会予稿集』179-179 頁。

_____（2009)「中国語母語話者の日本語の漢字習得研究のための新たな枠組みの提案:意味使用の一般性と意味推測可能性を考慮して」『日本語科学』25、105-117 頁。

文化庁（1978)『中国語と対応する漢語』大蔵省印刷局。

三浦昭（1984）「日本語から中国語に入った漢語の意味と用法」『日本語教育』53、102-112 頁。

A pilot study on the acquisition of homographs by intermediate and advanced learners of Japanese whose native language is Chinese

YU, Xin LI Dongzhe

Abstract

In light of this reality of past homograph studies, this study focused on the operation of Japanese-Chinese homographs and also examined learners' vocabulary comprehension in the form of interviews. The results revealed that in the acquisition of Japanese-Chinese isomorphs, "understanding is correct but production is incorrect" misuse is likely to occur in the overlapping parts of meaning, while "production is correct but understanding is incorrect" misuse is likely to occur in the parts with different meanings. The results of the survey on the learners' learning process also revealed that learners should not rely too much on the interpretation of the meaning of bilingual dictionaries (Japanese-Chinese dictionaries) when learning tautographs, and that it is more effective and comprehensive to respect the knowledge taught in class and not simply memorize the meaning of the tautograph, but also understand what words are actually used in connection with the tautographs. It was concluded that it is a shortcut to learn homographs effectively and comprehensively.

In light of this reality of past homograph studies, this study focused on the operation of Japanese-Chinese homographs and also examined learners' vocabulary comprehension in the form of interviews. The results revealed that in the acquisition of Japanese-Chinese isomorphs, "understanding is correct but production is incorrect" misuse is likely to occur in the overlapping parts of meaning, while "production is correct but understanding is incorrect" misuse is likely to occur in the parts with different meanings. The results of the survey on the learners' learning process also revealed that learners should not rely too much on the interpretation of the meaning of bilingual dictionaries (Japanese-Chinese dictionaries) when learning tautographs, and that it is more effective and comprehensive to respect the knowledge taught in class and not simply memorize the meaning of the tautograph, but also understand what words are actually used in connection with the tautographs. It was concluded that it is a shortcut to learn homographs effectively and comprehensively.

Keywords : Homographs, native Chinese speakers, vocabulary comprehension, vocabulary production, learning process

人間の動作を表すオノマトペについて
―「飲む」を例として―

郝 文文（名古屋大学研究生）

要旨

本稿は人間動作を表すオノマトペのうち「飲む」動作と共起するオノマトペの特徴について考察したものである。小野（2007）に記載されている「飲む」動作を表すオノマトペ 58 語を研究対象として、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（BCCWJ）を利用して、共起する対象語と出現数を調査した。その上で、日本語母語話者 28 人を対象とし、「飲む」動作を表すオノマトペ 12 語の許容度を調査した。その結果を以下に示す。

(1) 飲み物の温度によって、使われるオノマトペに違いがある。冷たい飲み物は勢いよく飲めるので、「ごくごく」「ぐいぐい」「ぐびぐび」「がぶがぶ」のようなオノマトペと共起しやすい。熱い飲みものは勢いよく飲めないので、これらのオノマトペと共起しにくい。

(2) スープ類は「水」などに比べ、「ごくごく」「ごくり」「がぶがぶ」の許容度が低い。

(3)「牛乳」と違い、「母乳」は勢いよく飲めないため「ごくり」「がぶり」とは共起しにくい。

(4) 同じアルコールでも、「ビール」は「ワイン」「ウイスキー」「日本酒」に比べ、様々な「飲む」動作を表すオノマトペと共起しやすい。

(5)「言葉」「不満」「セリフ」「涙」の場合は、「ぐっ」と共起しやすい。

キーワード：　オノマトペ、「飲む」、飲み物、共起、許容度

はじめに

本稿は人間がものを飲む際の動作を表すオノマトペについて考察するものである。例(1)～例（3）の「ごくごく」「ごくりと」「ぐっと」のように、飲み物の種類によって使われるオノマトペが異なる。しかし、日本語学習者にはその使い分けが難しい。

(1) {水/?熱いお茶/?味噌汁} をごくごく飲んだ。

(2) {水/牛乳/?母乳} をごくりと飲んだ。

(3) {水/ビール/?ワイン} をぐっと飲んだ。

そこで本稿では「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（BCCWJ）と日本語母語話者へのアンケート調査を利用して、「飲む」動作を表すオノマトペの特徴について考察する。

１．先行研究

小野（2007）は「ごくごく」「ごくりと」「ぐっと」などの人間の「飲む」動作を表すオノマトペ 58 語の意味について記述しているが、どのような飲み物にどのようなオノマトペを使うかについては詳しく説明していない。そこで本稿では飲み物の種類と使われるオノマトペの関係や特徴を考察する。

２．コーパス調査

本稿では BCCWJ を利用して、小野（2007）にある「飲む」動作を表すオノマトペ 58 語の用例を抽出した。検索対象は BCCWJ の全データで、「中納言」の短単位検索を使い、「キー」には「語彙素読み」で「ゴクゴク」などのオノマトペ 58 語を入力して検索した。これによって出現した用例から、飲み物と共起しないものを取り除き、各オノマトペの対象語と出現数を調べた。その結果を表１に示す。

表１　「飲む」動作を表すオノマトペの対象語と出現数

順	オノマトペ	対象語（出現数）	計
1	ごくりと	唾(51)、生唾(5)、固唾(2)、水(2)、息(2)、口のもの(1)、お酒(1)、ウイスキー(1)、ワイン(1)、焼酎(1)、ビール(1)、コーヒー(1)、コーラ(1)、牛乳(1)、ジュース(1)、味噌汁(1)、コーンスープ(1)、液体(1)	75
2	ごくごく(と)[1]	水(8)、お酒(4)、母乳(3)、液体(2)、ビール(4)、麦茶(2)、スープ(2)、牛乳(2)、ウォッカ(1)、ジュース(2)、スポーツドリンク(1)、飲み物(1)、炭酸飲料(1)、レモネード(1)	34
3	ぐっと	お酒(6)、お茶(3)、水(2)、ビール(2)、ウイスキー(2)、言葉(2)、茶碗酒(1)、水割り(1)、椀酒(1)、葡萄酒(1)、ワイン(1)、ウーロン茶(1)、エヴィアン(1)、飲み物(1)、不満(1)、セリフ(1)、息(1)、涙(1)	29
	がぶがぶ(と)	水(8)、お茶(6)、ジュース(4)、ビール(3)、お酒(3)、シャンパン(1)、コーヒー(1)、コーラ(1)、レモンスカッシュ(1)、清流(1)	
5	ぐいと	お酒(8)、ビール(4)、ウィスキー(3)、お茶(3)、ウーロン茶(2)、ブランデー(1)、ワイン(1)、水割り(1)、牛乳(1)、水(1)	25
6	ちびりちびり(と)	お酒(8)、ウイスキー(2)、日本酒(1)、水割り(1)、生酒(1)、ワイン(1)、ティー(1)	15
	ぐいぐい(と)	お酒(10)、ビール(2)、アルコール(1)、ワイン(1)、母乳(1)	
8	ごくんと	唾(6)、母乳(4)、水(2)、息(1)	13
9	ぐびぐび(と)	お酒(5)、スープ(1)、母乳(1)、ジュース(1)、薬(1)	9
10	ずるずると	コーヒー(1)、お酒(1)、汁(1)、和風出汁(1)、叶(人名)の(1)	5
	ぐびりと	お酒(2)、日本酒(1)、ビール(1)、コーヒー(1)	
12	こくりと	息(2)、野菜ジュース(1)、ウイスキー(1)	4
	がぶりと	お茶(2)、コーヒー(2)	
14	きゅっと	お酒(3)	3
15	こくこくと	お酒(1)、水(1)	2
	ごくっと	唾(1)、酢(1)	

	くいくいと	お酒(2)	
	ぐびっと	お酒(1)、缶ジュース(1)	
19	くっと	コーヒー(1)	1
	ぐーっと	ジュース(1)	
	ぴちゃぴちゃと	お茶(1)	
	がばがばと	ジュース(1)	
	ずずっ	スープ(1)	
24	ちゅっ、ごっくん、こくん、がばっ、ずるっ、こくっ、ぐっぐっ、がぶっ、ぺちゃぺちゃ、かぽっ、すすっ、ぐー、がぷがぷ、がぶりがぶり、がぼがぼ、がぼっ、きゅー、くい、くー、くくー、ぐびりぐびり、ごっくごっく、ごぶごぶ、こっくん、こくりこくり、ごくりごくり、ごくんごくん、ごっくり、じゅるっ、ずーずー、ずーっ、ちゅーちゅー、ちゅるちゅる、とっちり、ひっく		0
合　計			278

全 278 件中、上位 6 位まで（7 語）は「ごくり」「ごくごく」「ぐっ」「がぶがぶ」「ぐい」「ちびりちびり」「ぐいぐい」であった。1 位の「ごくり」の場合、最もよく共起する語は「唾」で、普通の飲み物との共起頻度は低い。2 位の「ごくごく」は連続して一度に飲むものと共起し、「唾」とは共起しない。3 位の「ぐっ」と 5 位の「ぐい」はいずれも一瞬で飲み物を飲むことを表すが、「ぐっ」は「言葉」「不満」「セリフ」「息」「涙」など飲食物ではないものとも共起できるが、「ぐい」はそれができない。また、4 位の「がぶがぶ」は一度に大量に飲める液体と共起し、6 位の「ちびりちびり」は少しずつ飲む酒類と共起し、「ぐいぐい」は勢いよく多量に飲める酒類と共起しやすいことがわかる。

３．アンケート調査

次に、BCCWJ から抽出したオノマトペのうち、上位 12 語[2)] に対して、日本語母語話者（大学一年生）28 人にアンケートで許容度調査を行った。これは「（飲み物）をごくりと飲んだ」のような言い方が正しいと思えば「○」、正しくないと思えば「×」、わからない場合は「？」を記入してもらうものである。その結果、「○」を付けた人の割合を表 2 に示す。表 2 において 80%以上のものに色を付けた。

表 2　「飲む」の対象語と共起するオノマトペの許容度（%）

		ごくりと	ごくごく(と)	ごくんと	ぐっと	ぐいと	ぐいぐい(と)	ぐびりと	ぐびぐび(と)	がぶり	がぶがぶ(と)	ちびりちびり(と)	きゅっと
1	水	92.9	100.0	85.7	85.7	78.6	64.3	67.9	89.3	53.6	96.4	75.0	17.9
2	熱いお茶	71.4	46.4	67.9	46.4	50.0	32.1	28.6	35.7	14.3	32.1	85.7	7.1
3	冷たいお茶	92.9	100.0	92.9	82.1	78.6	64.3	71.4	89.3	50.0	96.4	75.0	17.9
4	ホットコーヒー	67.9	42.9	67.9	42.9	46.4	39.3	25.0	39.3	17.9	32.1	78.6	10.7
5	アイスコーヒー	89.3	96.4	85.7	67.9	64.3	57.1	57.1	75.0	42.9	78.6	78.6	14.3
6	ジュース	92.9	100.0	92.9	71.4	71.4	60.7	71.4	89.3	57.1	92.9	78.6	14.3
7	コーラ	89.3	100.0	96.4	75.0	75.0	64.3	71.4	89.3	53.6	89.3	78.6	14.3
8	ビール	89.3	100.0	92.9	92.9	96.4	78.6	85.7	96.4	50.0	82.1	85.7	17.9
9	ワイン	71.4	64.3	67.9	57.1	67.9	57.1	50.0	60.7	46.4	60.7	89.3	14.3
10	ウイスキー	75.0	64.3	71.4	71.4	85.7	67.9	67.9	67.9	46.4	57.1	89.3	14.3
11	日本酒	78.6	67.9	75.0	78.6	89.3	67.9	67.9	71.4	42.9	57.1	89.3	21.4

12	母乳(胸から)	39.3	71.4	46.4	3.6	7.1	7.1	14.3	32.1	17.9	21.4	46.4	0.0
13	牛乳	89.3	100.0	92.9	60.7	67.9	50.0	60.7	75.0	42.9	92.9	78.6	7.1
14	コーンスープ	67.9	57.1	71.4	35.7	39.3	21.4	21.4	35.7	17.9	42.9	82.1	3.6
15	わかめスープ	60.7	53.6	67.9	32.1	35.7	14.3	14.3	28.6	14.3	39.3	82.1	0.0
16	味噌汁	60.7	50.0	60.7	28.6	32.1	21.4	17.9	32.1	17.9	35.7	67.9	3.6
17	唾	96.4	7.1	82.1	35.7	14.3	10.7	3.6	7.1	3.6	3.6	3.6	21.4
18	息	60.7	3.6	35.7	57.1	7.1	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	0.0	17.9
19	不満	14.3	0.0	21.4	46.4	7.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	7.1

前節のコーパス調査の結果では、「ごくり」が最もよく共起する語は「唾」で、普通の飲み物との共起頻度は低くなっていた。しかし、アンケート調査では、「ごくり」は「水」（92.9%）、「冷たいお茶」（92.9%）、「ジュース」（92.9%）などとの許容度が高くなっている。これは「ごくり」は「ごくごく」のように液体を続けて飲むことを表すのではなく、一口飲むことを表すオノマトペであることに由来すると思われる。「水」「冷たいお茶」「ジュース」などは続けて飲むことが多いため、コーパスからの出現頻度は低くなるが、一口飲む場面を思い浮かべれば言えないことはないため、アンケートでは許容度が高くなると考えられる。

４．「飲む」の対象語別のオノマトペの特徴

次に、「飲む」の対象語の種類ごとにどのようなオノマトペが使われるかを見る。以下、4.1 節では対象語が飲食物[3)]の場合、4.2 節ではそれ以外の場合について見る。

4.1　「飲む」の対象語が飲食物の場合

まず、「飲む」の対象飲食物の場合を見る。これらを大きくノンアルコールとアルコールに分け、それぞれのオノマトペの特徴について考察する。

Ⅰ　ノンアルコールの場合

ⅰ　「水」「お茶」「ジュース」「コーヒー」「コーラ」の場合

まず、「水」「お茶」「ジュース」「コーヒー」「コーラ」の場合を見る。「お茶」は「熱いお茶」と「冷たいお茶」、「コーヒー」は「ホットコーヒー」と「冷たいコーヒー」に分けた。これらと 12 語のオノマトペの許容度を表 3 に示す。

表 3　「水」「お茶」「ジュース」「コーヒー」「コーラ」におけるオノマトペの許容度（%）

	水	熱いお茶	冷たいお茶	ホットコーヒー	アイスコーヒー	ジュース	コーラ
ごくごく(と)	100.0	46.4	100.0	42.9	96.4	100.0	100.0
ごくりと	92.9	71.4	92.9	67.9	89.3	92.9	89.3
ごくんと	85.7	67.9	92.9	67.9	85.7	92.9	96.4
ぐっと	85.7	46.4	82.1	42.9	67.9	71.4	75.0
ぐいと	78.6	50.0	78.6	46.4	64.3	71.4	75.0
ぐいぐい(と)	67.9	28.6	71.4	25.0	57.1	71.4	71.4
ぐびぐび(と)	89.3	35.7	89.3	39.3	75.0	89.3	89.3

ぐびりと	64.3	32.1	64.3	39.3	57.1	60.7	64.3
がぶがぶ(と)	96.4	32.1	96.4	32.1	78.6	92.9	89.3
がぶり	53.6	14.3	50.0	17.9	42.9	57.1	53.6
ちびりちびり(と)	75.0	85.7	75.0	78.6	78.6	78.6	78.6
きゅっと	17.9	7.1	17.9	10.7	14.3	14.3	14.3

表 3 を見ると、「水」「冷たいお茶」「ジュース」「アイスコーヒー」「コーラ」のような冷たい飲み物と、「熱いお茶」「ホットコーヒー」のような熱い飲み物とではオノマトペの許容度に違いのあることがわかる。これは熱い飲み物は勢いよく飲めないので、「ごくごく」「ぐいぐい」「ぐびぐび」「がぶがぶ」のような連続して勢いよく飲むことを表すオノマトペや「ごくり」「ぐびり」「がぶり」のような瞬間的に勢いよく飲むことを表すオノマトペとは共起しにくいのに対し、「ちびりちびり」のようにゆっくり飲むことを表すオノマトペとは共起しやすいのであると考えられる。

ii 「母乳」「牛乳」の場合

次に、「母乳」と「牛乳」の場合について見る。「母乳」と「牛乳」における 12 語のオノマトペの許容度を表 4 に示す。

表 4 「母乳」「牛乳」におけるオノマトペの許容度（%）

	牛乳	母乳(胸から)		牛乳	母乳(胸から)
ごくごく(と)	100.0	71.4	ぐびぐび(と)	75.0	32.1
ごくりと	89.3	39.3	ぐびりと	50.0	7.1
ごくんと	92.9	46.4	がぶがぶ(と)	92.9	21.4
ぐっと	60.7	3.6	がぶり	42.9	17.9
ぐいと	67.9	7.1	ちびりちびり(と)	78.6	46.4
ぐいぐい(と)	60.7	14.3	きゅっと	7.1	0.0

表 4 を見ると、「牛乳」は「水」や「ジュース」と同様に「ごくごく」「ごくり」「がぶがぶ」のようなオノマトペと共起しやすいが、「母乳」は「ごくごく」以外のオノマトペとは共起しにくいことがわかる。「牛乳」は「水」や「ジュース」のようにコップなどから口に液体を流し込んで飲むのが普通であるのに対し、「母乳」はお母さんの乳首や哺乳瓶に口を付けて、連続して吸うのが普通であるため、一回的動作を表す「ごくり」や「がぶり」との許容度が低くなると考えられる。また、赤ちゃんが母乳を呷るように飲んだり、抑制しながら少しずつ飲んだりすることはあまり想定されないため、「がぶがぶ」や「ちびりちびり」の許容度が低くなっていると考えられる。

iii 「スープ」の場合

次に、「スープ」の場合について見る。「コーンスープ」「わかめスープ」「味噌汁」に分けて調査したが、違いはあまりみられなかった。

表 5　「スープ」におけるオノマトペの許容度（%）

	コーンスープ	わかめスープ	味噌汁
ごくごく(と)	57.1	53.6	50.0
ごくりと	67.9	60.7	60.7
ごくんと	71.4	67.9	60.7
ぐっと	35.7	32.1	28.6
ぐいと	39.3	35.7	32.1
ぐいぐい(と)	21.4	14.3	17.9
ぐびぐび(と)	35.7	28.6	32.1
ぐびりと	21.4	14.3	21.4
がぶがぶ(と)	42.9	39.3	35.7
がぶり	17.9	14.3	17.9
ちびりちびり(と)	82.1	82.1	67.9
きゅっと	3.6	0.0	3.6

表 5 を見ると、「コーンスープ」「わかめスープ」「味噌汁」は「水」や「冷たいお茶」などに比べ、「ごくごく」「ごくり」「がぶがぶ」の許容度が低い。これは「スープ」や「味噌汁」は、中に具が入っていたり、熱かったり、食事中少しずつ飲むのが普通だったりするため、勢いよく飲むことはあまりしないためであると考えられる。また、「コーンスープ」と「わかめスープ」は「ちびりちびり」と共起しやすいのに対し、「味噌汁」は相対的に共起しにくい。このことから、「コーンスープ」や「わかめスープ」は「味噌汁」に比べて少しずつ飲むイメージが強いと考えられるが、詳しいことは今後の課題とする。

Ⅱ　アルコールの場合

次に、「ビール」「ワイン」「ウイスキー」「日本酒」について見る。これらと 12 語のオノマトペの許容度を表 6 に示す。

表 6　アルコールにおけるオノマトペの許容度（%）

	ビール	ワイン	ウイスキー	日本酒		ビール	ワイン	ウイスキー	日本酒
ごくりと	89.3	71.4	75.0	78.6	ぐびぐび(と)	96.4	60.7	67.9	71.4
ごくごく(と)	100.0	64.3	64.3	67.9	ぐびりと	78.6	57.1	67.9	67.9
ごくんと	92.9	67.9	71.4	75.0	がぶがぶ(と)	82.1	60.7	57.1	57.1
ぐっと	92.9	57.1	71.4	78.6	がぶり	50.0	46.4	46.4	42.9
ぐいと	96.4	67.9	85.7	89.3	ちびりちびり(と)	85.7	89.3	89.3	89.3
ぐいぐい(と)	85.7	50.0	67.9	67.9	きゅっと	17.9	14.3	14.3	21.4

「ビール」は「ワイン」「ウイスキー」「日本酒」に比べ、様々な「飲む」動作を表すオノマトペと共起しやすい。このことから、「ビール」は様々な飲み方で飲まれることがわかる。一方、「ワイン」「ウイスキー」「日本酒」は「ビール」に比べて、「ごくごく」「ぐいぐい」「ぐびぐび」「がぶがぶ」との許容度が低い。これらは同じアルコール飲料でも、「ビール」のように勢いよく飲むことはあまりせず、少しずつ飲むのが普通である

ためであると考えられる。また、「きゅっと」はコーパスからお酒の例が 3 例出現し、お酒を飲むときのオノマトペとして使えると思われるが、今回の調査では「日本酒」で 21.4%しか許容度がなかった。これは被験者が大学の学部一年生で、飲酒経験があまりないためではないかと考えられる。

4.2　「飲む」の対象語が飲食物ではない場合

次に、「飲む」の対象語が飲食物ではない場合を見る。これらの場合、同じ「飲む」でも体外から飲食物を摂取するという意味ではなく、主体の内部から発せられるものを体外に出さず、主体内にとどめるという意味を表す点で特徴がある。そのため、後の例文にも示すように内部移動を表す「V１-込む」を用いて、「飲み込む」の形で使われることが多い[4)]。

ここで対象語と共起するオノマトペとの組み合わせに関して、先に表１で示した BCCWJ からの出現数を抜粋すると、表 7 のようになる。また、これらの組み合わせに関する日本語母語話者の許容度を示すと、表 8 のようになる。

表 7　飲食物でない場合の出現数（件）

対象語	オノマトペ（出現数）	計
唾	ごくり(59)	66
	ごくん(6)	
	ごくっ(1)	
息	ごくり(2)	6
	こくり(2)	
	ぐっ(1)	
	ごくん(1)	
言葉	ぐっ(2)	2
涙	ぐっ(1)	1
不満	ぐっ(1)	1
セリフ	ぐっ(1)	1
叶の(不明)[5)]	ずるずる(1)	1
合　計		78

表 8　飲食物でない場合の許容度（%）

	唾	息	不満
ごくりと	96.4	60.7	14.3
ごくごく(と)	7.1	3.6	0.0
ごくんと	82.1	35.7	21.4
ぐっと	35.7	57.1	46.4
ぐいと	14.3	7.1	7.1
ぐいぐい(と)	3.6	3.6	0.0
ぐびぐび(と)	7.1	3.6	0.0
ぐびりと	10.7	3.6	0.0
がぶがぶ(と)	3.6	3.6	0.0
がぶり	3.6	3.6	0.0
ちびりちびり(と)	3.6	0.0	0.0
きゅっと	21.4	17.9	7.1

表 7 と表 8 を見ると、コーパス調査の結果の出現数の多い組み合わせの場合、アンケート調査でも許容度が高くなっていることがわかる。すなわち、「唾」の場合は「ごくり」「ごくん」という２つのオノマトペが使えるが、「ごくり」と最も共起しやすい。吉永（2019）は「オノマトペの語末の「リ」が動作・状況を一纏まりとして表わす働きがある」（p. 75）と指摘している。例（4）のように、「唾を飲む」は、人が緊張した時の生理現象を表し、それによって緊張状態に一瞬の区切りができるため、「ごくり」が使われやすいと考えられる。

（4）　わたしは深呼吸し、ごくりと唾を飲み込んだ。（小池真理子『夜は満ちる』）

「息」の場合は、「ごくり」「ぐっ」などのオノマトペと共起している。例えば、例（5）

の「ごくり」は驚きで呼吸を止めた後、口から息を出さずに飲み込む様子を表している。例（6）の「ぐっ」は驚いて、一瞬息を止める様子を表している。

（5）　敬之助はごくりと息を飲み、胸を張るようにした。（鈴木英治『一輪の花』）

（6）　彼女の裸身が、俺の目の前に曝け出された。俺はぐっと息を飲んだ。（横田順『彌悲しきカンガルー』）

また、「言葉」「不満」「セリフ」「涙」の場合は、「ぐっ」と共起しやすいという特徴がある。例えば、例（7）は何か「言葉」を言おうとしたが、我慢して言わないようにすることを表している。また、例（8）は涙が出そうになった時に、涙がこぼれないように我慢することを表している。

（7）喉元まできた言葉をぐっと呑み込んだ。（Yahoo！ブログ）

（8）涙をぐっと呑み込んだ。（ダイアン・デヴィッドソン(著)/加藤洋子(訳)『クッキング・ママの超推理』）

おわりに

以上、本稿では人間動作を表すオノマトペのうち「飲む」動作と共起するオノマトペ 58 語を研究対象として、コーパス（BCCWJ）調査とアンケート調査を利用し、共起する対象語の出現数及び許容度を調査した。これにより、アルコールとノンアルコールの違いや、同じ液体でも一般に食べ物とされる「スープ」などとの違い、さらには飲食物ではない「唾」「息」「言葉」「不満」「セリフ」「涙」の場合について見た。今回は紙幅の関係で概略を論じるにとどまっているが、今後さらに対象語とオノマトペの関係について詳しく考察していきたい。また、日本語学習者の習得も見ていきたい。

注

1）　本稿では「と」の有無を区別せずに、両者を合計した出現数を示している。

2）　BCCWJ から得られた出現数 14 位まで（出現数 3 語以上）のオノマトペのうち「ずるずると」と「こくりと」を外した 12 語である。「ずるずると」は汁をすする音を表すため除外し、「こくりと」は 1 位の「ごくり」の表記ミスであると思われるため除外した。

3）「水」「お茶」「ウイスキー」「ワイン」「他の酒」「ビール」「ジュース」などを飲食物とし、「息」「不満」「唾」などを飲食物ではないとする。

4）　表 7 の 78 例の「飲む」のうち 42 例（53.85%）が「飲み込む」の形であった。これは飲物の場合は全 200 例中 16 例（16%）しか「飲み込む」の形がないので、特徴的な数字であると思われる。

5）　これは「ずるずると俺が叶のを飲み込んでいく。」（甲山蓮子『お試しください！』）という文にあるもので、「叶の」は「叶（かなえという女性の名前）」の身体部位であると思われる。しかし、はっきりしたことは分からないため、「不明」とした。

参考文献

小野正弘（2007）『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』小学館。

吉永尚（2019）オノマトペの語形パタンに関する一考察『園田学園女子大学論文集』1.（53）75-81 頁。

・使用したコーパス

・国立国語研究所　現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）

Onomatopoeia for Human Actions: "Drink" as an Example

HAO, Wenwen

Abstract

This paper examines the characteristics of onomatopoeia co-occurring with the action of drinking. In this study, the onomatopoeia words that were argued being related to the action of “drinking” by Ono (2007) were selected as target words. By using the Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese (BCCWJ), the number of co-occurring target words and the co-occurrences were examined. Moreover, the contextual appropriateness of 12 onomatopoeic words expressing the “drinking” action was evaluated by surveying 28 native speakers of Japanese. Based on the results, the co-occurrence relationships between each onomatopoeia and the target word (drinks) were analyzed as shown below.

(1) There are differences in the onomatopoeia used depending on the temperature of the drink. Cold drinks can be drunk quickly, so they are more likely to co-occur with onomatopoeia such as ‘*gokugoku*’, ‘*guigui*’, ‘*gubigubi’* and ‘*gabugabu*’. In contrast, hot drinks cannot be drunk quickly, so they seldom co-occur with this onomatopoeia.

(2) Soups are less compatible with ‘*gokugoku*’, ‘*gokuri*’ and ‘*gabugabu*’ than water.

(3) Unlike milk, breast milk cannot be drunk quickly, so this term rarely co-occurs with ‘*gokuri*’ and ‘*gaburi*’.

(4) Among the alcoholic beverage, beer is more likely to co-occur with a variety of onomatopoeia describing the action of drinking than wine, whisky, or sake.

(5) Regarding words, complaints, actor’s lines, and tears, onomatopoeia ‘*gut*’ is more likely to co-occur with them.

Keywords： onomatopoeia, "drinking", beverage, co-occurrence, appropriateness

吉川英治『三国志』における曹操の人物像に関する比較研究
—「痴児」を主眼に—

張 智超（成都東軟学院）

要旨

文学作品は時代の縮図であり、作家の精神の縮図でもある。広く知られる歴史小説における人物像は往々にして歴史上の本当の姿より、人々に印象を残しやすいだろう。

吉川『三国志』の曹操像は、正史上の勇敢で機知に富んだ曹操、また、その以前の各版本おける陰険で残忍な悪党の曹操と異なり、人間的な魅力に満ち、感情豊かで、人情や愛欲に溢れた「痴児」と言われるものだ。「痴児」というのは唐時代の杜甫が最初に詩に使われる言葉だが、吉川英治の多くの作品に「痴児」と呼ばれる人物が存在している。

本稿は吉川『三国志』における「痴児」となる曹操の人物像をキーワードにし、「痴児」をめぐる描写、そしてそれに込めた英治の感性とキャラクター創造を中心に論じたものだ。また、英治の他の作品における「痴児」として描き上げられた人物にも論及し、英治小説における「痴児」は、肉親に深い愛情の持ち主であり、痴や、狂、愚の性格を持ち、志半ばで断腸の思いを持って最期を遂げた悲劇的な英雄だということを明らかにした。

キーワード：　吉川英治『三国志』、曹操の人物像、比較研究、「痴児」

はじめに

曹操は、日本をはじめ、諸外国でも有名な人物であろう。しかし、「奸」雄と呼ばれる曹操に対する印象やイメージは日中両国の読者間において、かなりのギャップがあるのではないか。このようなギャップは、曹操の形象化をめぐる創作上の両国間の差異と深く関係していると考えられる。とりわけ、中国の決定版と言われる『毛宗崗批評本三国演義』（以下は「毛宗崗本」と略称した）[1]と日本の三国志ブームを巻き起こした吉川英治『三国志』（以下は吉川『三国志』と略称した）[2]の影響によるものである。

本稿は「毛宗崗本」と吉川『三国志』における曹操像を概観的に比較した上で、吉川『三国志』によって創造された未熟で愚かな「痴児」という曹操像に着目し、英治の創作意図を分析し、「痴児」をめぐる描写、そしてそれに込めた英治の感性とキャラクター創造を中心に論じるものである。また、吉川『三国志』以外の作品の中に、「痴児」として描き上げられた人物にも論及し、「痴児」という形象はどのような特徴・象徴性を持つのかという課

題を明らかにしていく。

１.『三国志演義』と吉川英治『三国志』

四大奇書である『三国志演義』[3]は、中国だけでなく日本でも名高い。『三国志演義』の祖本はすでに失われた。現代中国における通行本は清王朝初期に刊行された「毛宗崗本」である。一方、印刷技術の発展で書籍の出版が容易になり、江戸時代になると漢籍が大量に日本に持ち込まれ、『三国志演義』もその中の一書物として、日本に伝わってきた。後に、『三国志演義』は日本人の漢学者に愛される一方で、和訳本の『通俗三国志』[4]の刊行により、江戸時代の庶民層においても『三国志』ブームが巻き起こされた。

また、明治維新以降、多くの知識人は西洋文明を吸収し、新しい翻訳理論と方法を活用して江戸時代の旧訳を再翻訳することに試みた。高い評判を得た久保天随の『新訳　演義三国志』[5] はその中の一つだと挙げられる。この本は若い頃の英治にも愛読され [6]、そして、それは彼の『三国志』執筆における重要なきっかけにもなった。四十五歳の英治は日中交戦の華北戦場に足を踏み入れ、戦争の残酷さや黒い焦土を目の当たりにし、『三国志』執筆につながった。戦争を身をもって経験したためか、英治によって創出された三国の英雄、特に曹操という人物は他の版本より人間性に満ち、悲壮感に溢れている。

２．曹操像

『正史　三国志』[7]における曹操は名門出身の官僚後胤で、若年には「機知があり、権謀に富み、男立て気取りでかつて放題、品行を整えることはしなかった」と「治世にあっては能臣、乱世にあっては姦雄」[8]、非常に才能のある人物だと評価されている。黄巾の乱の平定や、董卓の討伐にあたり、機知に富んで勇敢に戦った。また、荀彧などの様々な人材を適材適所で起用することで、戦乱の華北地方が治まった。ところが、後期には赤壁の戦いや漢中の戦いで敗れ、悔しさと天下統一の夢を抱いて、六十五歳で亡くなった。

歴史上の曹操は「そもそも並はずれた人物、時代を超えた英傑というべきであろう」と高い評判され、真の「英雄」だと言える。

2.1　「毛宗崗本」における曹操像

従来の研究によると、「毛宗崗本」は現代中国で最も読まれている版本、いわゆる「決定版」だとされた。創作の時代背景[9]、また著者の立場[10]により、この本は「尊劉抑曹」と「勧善懲悪」という性格で成立されたと言えよう。とりわけ、主役の配置において、そのような性格はかなり目立っている。「毛宗崗本」においては、「智絶(智の極み)」の諸葛亮、「義絶(義の極み)」の関羽、「奸絶(悪の極み)」の曹操、という「三絶」に主役を置き、劉備（または劉備陣営の主要人物）は「善役」であるのに対して、曹操は「悪役」として扱われている。

例えば、董卓の暗殺が失敗し、都の洛陽から実家の陳留に逃亡する曹操は、その途中で匿ってあげた呂伯奢を誤解で殺してしまい、「我、人に背けども、人、我に背かせじ」と弁明するというエピソードや、復讐のために、「陶謙」を攻撃する曹操軍は、敵軍だけでなく、民間人を皆殺しにしたというエピソードで、彼は殺人鬼として描き上げられた。確かに、皇帝権力を凌駕し、皇帝を操るという悪役性格の曹操像は『三国志演義』にもあるが、「毛宗崗本」のように、曹操を「奸絶」にして、完全に悪役化したのはそれ以前の三国作品にはほぼなかったことである。決定版と呼ばれる「毛宗崗本」の流布によって、冷酷かつ残忍で、そして疑い深い性格で脚色された「奸絶」の曹操像は現代までも長く引き継がれてきた。

2.2　吉川『三国志』における曹操像

昭和期に成立した吉川『三国志』は、日本の大衆小説の代表作だとも言える。英治の改作意図としては、朱子学の「正統論」の束縛から脱し、従来の「勧善懲悪」や「因果応報」を改作作業から排しようとするものだと考えられる。「毛宗崗本」と異なり、「曹操に始まって孔明に終る二大英傑の成敗争奪の跡を叙したもの」[11)]を主旋律とした吉川『三国志』における人物描写には、人情、そして人間の複雑さ、また日本人の感性に相応しい英雄観が盛り込まれている。これによって、曹操は再び英雄の形象に復帰した。なお、吉川『三国志』における曹操像は人間的な魅力に満ち、より人情と愛欲や、伝統道徳に溢れたものである。この点について、「番外余録」は、「曹操という者の性格には、いかにも東洋的英傑の代表的な塑像を見るようなものがある。その風貌ばかりでなくその電撃的な行動や多感な情痴と熱においても、まことに英雄らしい長所短所の両面を持っていて」と述べている。このような人間味に溢れた曹操像の中には、従来の中国における曹操像と最も異なるのは、戦場で両親・故郷を恋しく思って泣く、また窮地に追い込まれて父に助けを求める「痴児」と呼ばれるものである。

３．吉川英治と「痴児」

「痴児」という言葉は愚かな子供を意味し、杜甫の『百憂集行』で「痴児不知父子禮、叫怒索飯啼門東」という詩句に初めて登場した。『百憂集行』は晩年の杜甫に書かれたものだ。若い自分への懐かしい気持ちと、世の中の苦痛を知らない子供たちに対する残念な気持ちが盛り込まれている。しかし、昔から「痴児」という言葉が存在しているとしても、日中両国では現代医療分野[12)]以外にこの言葉はほぼ使われていないようである[13)]。これは英治の作品だけ見当たる言葉だと言えるが、英治の作品における人物描写に使うトレードマークだとも言えよう。

3.1　「痴児」と曹操の人物像

吉川『三国志』における感情豊かで、人情や愛欲に溢れた「痴児」の人物像について例を挙げて述べよう。

まず、典韋の死を知った曹操についての描写を例に挙げよう。勇将であり、親衛隊長として曹操に仕える典韋は、曹操を守るために戦死した。

> 曹操は、帰京後も典韋の霊をまつり、子の典満を取り立てて、中郎に採用し、果てしなく彼の死を愁んでいた。そこへ、呉の孫策から急書がとどいた。曹操は、一議におよばず承知のむねを返辞して、即日三十万余の大兵を動員した。一面は痴児のごとく、めそめそ悲しむくせがあるかと思えば、たちまち果断邁進、三軍を叱詫するの一面を示す彼であった。（吉川『三国志』（三）草莽の巻（づづき）：仲秋荒天の一）

百戦錬磨で、そして勇猛果敢に大軍を指揮・統帥する、また冷酷かつ残忍の「奸」雄のキャラクターだけ読み取れる「毛宗崗本」における曹操像とは異なり、吉川『三国志』は、深く信頼している大将の死を受け、愛するおもちゃをなくした子供、さらに言えば少女のごとく、「めそめそ悲しむ」という感情をストレートに表す曹操像を描き上げられた。しかも、原文に示された通り、めそめそ悲しむというのは曹操の「くせ」である。このような、人情や愛欲に溢れ、しかも、軍の指揮者または国の指導者ではなく、幼い子のように感情を表す癖は、吉川『三国志』における「痴児」となる曹操の最も代表的な形象だと考えられる。

このような「くせ」を持つせいか、失敗に陥った「痴児」の曹操はよくめそめそ悲しんでしまう。次に、曹操が大敗を喫した場面を例に述べよう。

> 人心地もなく、迷いあるいて、ただ麓へ麓へと、うつろに道を捜していたが、気がつくと、いつか陽も暮れて、寒鴉の群れ啼く疎林のあたりに、宵月の気はいが仄かにさしかけている。「ああ、故郷の山に似ている」ふと、曹操の胸には父母のすがたがうかんできた。大きな月のさしのぼるのを見ながら、「親不孝ばかりした」驕慢児の眼にも、真実の涙が光った。（吉川『三国志』（一）群星の巻：生死一川の一）

大敗に陥り、生死の窮地に追い込まれた曹操は、涙を流して親のふところを懐かしむ迷子のように描写されている。また、驕慢児というのは「痴児」と照応する形容だと考えられる。このような形容と描写を用いることで、「痴児」というキャラクターをさらに強め、豊かにする効果を収められた。また、それは、危険な状況に陥って瀬戸際になっても、怯まずに泰然自若に敗残兵を取りまとめて指揮する「毛宗崗本」の曹操像とかなり対照的である。

3.2　他の作品における「痴児」

「痴児」は英治の愛用言葉として、吉川『三国志』のみならず、『新書　太閤記』[14]や、『源頼朝』[15]、『剣の四君子』[16]などの作品にも使われている。特に吉川『三国志』とほ

ぼ同時期の作品の『新書　太閤記』と『源頼朝』である。これから、これらの作品にある「痴児」に関する代表的な場面を例に挙げて述べよう。

『新書　太閤記』において、桶狭間の戦いに勝利し、意気揚々としていた織田信長が、清須城で二十九歳の元旦を迎える。早朝、彼が父の信秀のお位牌を祀るという場面を例に挙げよう。

> おそらくは、生前、（この痴児、今の乱世に生れて、どうして国を持って、生きてゆけるだろうか？）と、案じぬいたままで世を去ったであろうと思われる彼の父、織田信秀の霊も、そこにあった。（『新書　太閤記(一)』春の客の一）

それは英治が第三者立場に立って書いたものであるが、中には、「痴児」の信長に対して、彼はいつか乱世の覇者になれるかという父・信秀が持つ疑念もあれば、かつての「痴児」は今や国主になったことを父に知られたら、喜んでくれるだろうという暗喩もある。

一方、『源頼朝』には、太政入道[17]が別荘で贅沢な生活を送っている子孫たちをみれば、若い頃、単衣を着て、病気の両親に医者を呼ぶお金さえもなく、苦しい青年時代を振り返ったら、時に一人で腹立たしくなって、「いっその事、天譴があらわれて、こんな痴児はみな、海嘯に攫われてしまえ」と嘆いたというエピソードがある。しかし、自分の子孫は世の中の苦痛を知らない「痴児」とわかっていても、父、そして一族の家長としての平清盛がそのような「痴児」たちを最後まで庇護してきた。

また、『源頼朝』におけるもう一人の主人公である源義経が十七年ぶりについに勇気を出し、後白河院の密使である大江公朝に母の常磐御前の消息を聞く場面を次のように描写している。

> 常磐――とい一言を聞くだけでも、彼の血、皮膚、髪は恋しさにおののき疼いた。その胸の中のものを公朝に指されたとたんに、彼は何の見得もない一個の痴児となって。（『源頼朝』途中の人）

自分を守るために、平清盛の妾になった母の常磐御前と再び会うことが不可能だと、義経がわかったら、「まだ見ぬ母を一目でもと恋いわずらう過去への儚い痴児のこの悩みを」という描写がある。義経は母に抑えきれない恋しさ、そして苦しみを持ち、過去の儚い夢で生きている「痴児」のようである。英治の作品にある「痴児」という言葉は始終絶ち切らない親子の絆に纏わっていると考えられる。

また、『新平家物語』における藤原信頼や『剣の四君子』における名剣士一刀斎も「痴児」として挙げられる。英治は一刀斎という人物を

狷介不羈なところがある。酒を飲めば、大気豪放、世の英雄をも痴児のごとくに云い、一代の風雲児をも、野心家の曲者のごとく誹る。（『剣の四君子』兄弟子善鬼の三）

と描写・評価し、一刀斎を「英雄」でありながら「痴児」、「風雲児」でありながら「野心家」、という両面性の持つ人物に描き上げた。

これらの人物と対照的にみれば、『三国志』における曹操は

曹操は詩人であり…痴や、愚や、狂に近い性格的欠点をも多分に持っている英雄として、人間的なおもしろさは、遥かに、孔明以上なものがある曹操も、後世久しく人の敬仰をうくることにおいては、到底、孔明に及ばない。（吉川『三国志（八）』篇外余録:諸葛菜　1989）

というように評価されている。織田信長、源義経、藤原信頼、一刀斎、それに曹操、英治に創られた「痴児」たちはいずれも痴や、狂の性格を持っているが、志半ばで断腸の思いを持って最期を遂げた悲劇的な英雄だと言えよう。

おわりに

「痴児」は絶ち切れない肉親との絆、また親に対する深い愛情を持つ文学上の形象である。なお、人間性に満ちた「痴児」は英治作品における悲劇的な英雄像に不可欠な特徴とも言えよう。「痴」や、「愚」という人格の持つ英雄は、往々にして失敗に陥ってしまう。これは「毛宗崗本」における卑劣さや陰険さで失敗を招いた典型的な中国伝統の「奸」雄像とは全く異なるものと考えられる。

このような悲劇的な英雄像となる「痴児」はそれ以降の大衆小説に深い影響を及ぼしている。今後の研究課題として、英治の人生体験を研究視野に取り入れ、「痴児」という形象についてさらに研究していく。

注

1) 父の毛声山は明・万暦年間（1573～1619）に『李卓吾先生批評三国志』をもとに、『三国志演義』を改定しはじめ、子の毛宗崗は清時代の初頭（17 世紀末）にそれを完成させた。

2) 吉川英治が 1939 年 8 月から 1943 年まで『中外商業新報』で連載した『三国志』だ。

3) 明・羅貫中（約 1330－約 1400）の作品といわれ、中国後漢末に起こった黄巾の乱から魏・呉・蜀三国鼎立を経て、再び晋に統一された歴史物語だ。

4) 日本の天竜寺の僧である湖南文山が『李卓吾先生批評三国志』を翻訳し、江戸の元禄二年（1689）から刊行した。

5) 1906 年に「支那文学評厳書」の第一巻で久保天随による『三国志演義』の一部の翻訳が掲

載された。同氏は後の 1912 年に『三国志演義』の全編を完訳し、至誠堂より出版した。英治に愛されたのは至誠堂で出版された『新訳　演義三国志』だ。

6) 吉川『三国志』の序文では「これを書きながら思い出されるのは、少年の頃、久保天随氏の演義三国志を熱読して、三更四更まで燈下にしがみついていては、父に寝ろ寝ろといって叱られたことである」と述べている。吉川英治『三国志(一)』講談社、1989 年 4 月、5 頁。

7) 西晋の陳寿(233～297)の『正史　三国志』だ。

8) 本稿における『正史　三国志』の引用は次のものによる。陳寿著(裴 松之注)今鷹真・井波律子訳『正史　三国志 1 (魏書Ⅰ)』ちくま文芸文庫、1992 年 12 月、9–10 頁、11 頁、121 頁。

9) 漢民族政権の明朝は満州政権の清朝に取って代わられ、漢民族を貫く正統の思想は衝撃を受けた。

10) 著者である毛氏父子は儒学者として、朱子学を唱えた正統性を擁護する人物だ。

11) 本稿における吉川『三国志』の引用は次のものによる。『三国志(一)』講談社、1989 年 4 月、466 頁；『三国志(三)』講談社、1989 年 4 月、20 頁；吉川英治『三国志(八)』講談社、1989 年 4 月、375 頁。

12) 医療分野では知的障害がある子供を指す。

13) 筑波コーパスや少納言コーパスなどの言語コーパスに「痴児」の用例は一つも見当たらなかった。

14) 1939 年から 1945 年まで「読売新聞」で連載された「太閤記」と 1949 年に「中京新聞」他複数の地方紙で発表された「続太閤記」と合同出版の『新書太閤記全 11 巻』だ。本稿における『新書　太閤記(一)』の引用は、吉川英治『新書　太閤記(一)』、講談社、1967 年 1 月、345 頁によるものだ。

15) 1940 年に朝日新聞に発表された『源頼朝』だ。本稿における『源頼朝』の引用は次のものによる。吉川英治『源頼朝』、講談社、1970 年 1 月、200 頁、246 頁、247 頁。

16) 1942 年に「講談倶楽部　七月号～九月号」大日本雄弁会講談社で初めて発表され、本稿における『剣の四君子』の引用は青空文庫のものによる。本文献の底本：『剣の四君子・日本名婦伝』吉川英治文庫、講談社、初版発行日：1977 年 4 月 1 日、入力に使用：1977 年 4 月 1 日、https://www.aozora.gr.jp/cards/001562/card56070.html（アクセス日：2022 年 9 月 2 日）

17) 太政大臣になった平清盛が出家した後太政入道と呼ばれていた。

参考文献

雑喉潤(2002)『三国志と日本人』講談社。

渡辺義浩(2011)『三国志　演義から正史、そして史実へ』中公新書。

袴田郁一(2013)「吉川英治・『三国志』の原書とその文学性」『三国志研究』8、109-124 頁。

陈周昌（1982）「毛宗岗评改《三国演义》的得失」『社会科学研究』4、24-29 頁。

Comparative Study on the Character of Cao Cao in Eiji Yoshikawa's *Romance of the Three Kingdoms*: Focus on “chiji”

ZHANG, Zhichao

Abstract

A work of literature is a microcosm of its time and a microcosm of the writer's spirit. The characters in widely known historical novels are often more likely to leave a lasting impression on people than their real historical counterparts.

The image of Cao Cao in Yoshikawa's *Romance of the Three Kingdoms* differs from that of the brave and witty Cao Cao of authentic history, and from that of the sinister and cruel scoundrel Cao Cao in the earlier books, in that he is a "chiji", full of human charm, emotion, humanity, and greed. The term "chiji" was first used in poetry by Du Fu in the Tang dynasty, but many of Eiji Yoshikawa's works have characters called "chiji".

This paper focuses on the character of Cao Cao, the "chiji" in Yoshikawa's *Romance of the Three Kingdoms*, and discusses the description of the "chiji", as well as Eiji's sensitivity and character creation in the character. It also discusses the characters portrayed as "chiji" in Eiji's other works, and reveals that the "chiji" in Eiji's novels is a tragic hero who has a deep love for his family, is a loser, a madman, and a fool, and dies in the middle of his ambition with a sense of despair.

Keywords： Eiji Yoshikawa *Romance of the Three Kingdoms*, Cao Cao's character, comparative study, "chiji".

文字から見た中国古代建築
—後藤朝太郎の演説を中心に—

周堂波（武漢理工大学）、程暁慶（武漢理工大学大学院生）

要旨

近代東洋建築と中国建築研究の先駆者と言われた伊東忠太は 1926 年、東洋史講座に発表された『支那建築史』の中で文字から中国古代建築を研究する方法を紹介した。その中で、漢学者後藤朝太郎の調査に言及している。本論は、伊東の建築思想を紹介した上で、漢学者として知られる後藤が文字から中国古代建築を研究した背景を分析し、1913 年に日本建築学会に発表した文字から中国古代建築を研究する理論的な枠組みと研究成果をまとめて分析するものである。

キーワード：　文字、中国古代建築、伊東忠太、後藤朝太郎、日本建築学会

はじめに

伝統的に、中国古代建築は建築学、美学、デザインなどの観点から研究されることが多く、文字から中国古代建築を研究するのはごく稀である。近代日本の著名な建築学者伊東忠太は『支那建築史』の中で文字研究と建築の関係を簡単に紹介しているが、具体的な理論的枠組みにまでは踏み込んでいない。筆者は後藤朝太郎と近代中国庭園についての研究を行っている途中、意外に後藤が日本建築学会に誘われて何回かの演説があり、更に『建築雑誌』にそれらの演説稿が掲載されていたことが見つかった。このような珍重な一次資料を生かし、今まで看過された伊東忠太をはじめとする近代日本建築学者らの研究延長線になると思われる後藤朝太郎が文字と中国古代建築についての認識を探っていく。

１．伊東忠太の研究思想

伊東忠太は「明治以後の日本を代表する最大の建築学者」と言われ、近代東洋建築と中国建築研究の先駆者である [1)]。伊東は欧米心酔の風潮が特に盛んであった時代に、前後六回中国に赴いて建築実地調査を行い、初めて中国の雲岡石窟を発見し、中国古代建築の研究価値を当時の日本建築学界に認識させた。伊東には『支那建築装飾』、『支那建築』（伊東忠太、関野貞、塚本靖共編）、『東洋建築の研究』、『支那の住宅』など中国建築に関する多くの著作と論文がある。その中で、1926 年に東洋史講座に発表された『支那建築史』は伊東の中国建築

史研究における成果の集大成として、学界で重きをなしている[2)]。それは後に、『東洋建築の研究』にも収録された。

伊東は『東洋建築の研究』の中で、中国建築研究の方法を論じた。伊東は中国建築研究の方法には文献研究と遺跡調査という二つの方面があると提起し、「此の二つの方面の成績が互いに相符合したものが、即ち真正なる事実と認められるのである」と書いた[3)]。また、中国建築研究方法の一つとして、文字の研究に関する一項が附加された。伊東は「支那の文字に関することは自ら別に専門の学科を為しているから茲に深く立ち入らないが、文字の成立の一動機は実物の写真で、即ち象形である。即ちこの象形文字の研究に由って、吾人は其の実物の形体性質等を知ることができるのであるが、最古の象形文字を知ることが、又特殊の専門に属するので、事は頗る容易でない」[4)] と述べている。さらに、「宀」、「广」、「囪」等いくつかの具体的な例を挙げて簡単に紹介した。そのなかで、「文学士後藤朝太郎君の調査によれば、囪及び囧の古字に次の類例があるが、何れも窓の輪郭と格子の意匠を明示している」[5)] という論説がある。

以上の点から見れば、伊東は文字から建築を研究するという研究思想を提起したものの、文字研究自体は特殊な専門に属するため、理論的枠組みについてはまだ提起していなかった。ただし、文学士後藤の調査は伊東によって承認されたと言えるであろう。

２．後藤朝太郎が文字から中国古代建築を研究した背景

上記のように、文学士後藤朝太郎の文字から建築を研究するという研究方法は当時の著名建築学者伊東忠太によって言及された。しかし、一般的に、後藤は漢学者として知られている。では、後藤の文字から中国古代建築への研究はどのような背景で行われたのか。次に、後藤における文字研究及び建築学との繋がりを各々簡単に説明する。

2.1　後藤朝太郎と文字

後藤朝太郎は本名が後藤浅太郎であり、石農と号し、1881 年（明治十四年）4 月に愛媛県松山市で生まれ、松山市立尋常小学校、松山市立高等小学校、松山中学校を経て、熊本の第五高等学校へと進む。小さい頃から中国伝統文化に馴染みがあった。大学在学中、現代言語学や比較研究の方法などを叩き込まれると同時に、白鳥庫吉や市村瓚次郎等から新しい東洋史の研究法を学び、森槐南からは元曲を特に学ぶなど、新しい東洋学・中国学勃興の中で、古代中国の文字及び文化の研究へと向かっていく姿が浮かび上がってくる。

後藤はこの学部時代に、伝統的な『説文』の研究や新しく勃興してきた金文・甲骨文の研究にも親しみ、そこに西洋言語学の知識を加え、「支那語」の言語学的研究に邁進することとなった。卒業論文は「支那古韻 K、T、P の沿革と由来」である。大学院（1907 年 9 月から 1912 年 7 月まで）に進学後は、卒論を発展させた形で『漢字音の系統』（六合館、1909 年）や、

卒論も含めた千五百頁以上の巨著『文字の研究』（成美堂、1910 年）を刊行した。科学的に漢字を分解してその音部の要素を抜き出し、そのシステムを明らかにしたものは日本にも中国にも欧米にもない独創性であった。その上、漢字の研究においては象形のみに止まらず、音部の要素にまで言及している。

総じて言えば、後藤は近代日本の著名な漢学者として、漢学について幅広く詳細な研究を行っており、漢字、中国文化、中国庭園など、さまざまな面で貢献し、『文字の起源と沿革』、『文字の研究』など 200 冊以上の著作もあり、日本の学界では「支那通」と呼ばれている。後藤が書いた『文字講話』によると、後藤の漢字への親近感と好みは、幼少期に書道を習った経験に端を発している。幼い頃に犬塚甘古に師事し、漢隷から王羲之、懐素、顔真卿、趙子昂などを習ったことは、後藤が書道と文字を研究する正式なきっかけとなった。青年期に、後藤は説文に関する群書の渉猟に没頭し、篆隷以前の古形を写し取って、『文字の研究』を書いた。これは後藤が象形文字と字源を深く研究する基礎となったのである。

2.2 後藤朝太郎と建築学

明治維新後、欧米化がブームになると、西洋の建築も日本に導入され、西洋建築や日本建築に関する研究も始められた。庭園は建築と緊密な関係にあり、関連する有識者達が集まり、日本において初めて庭園に関する専門研究組織を立ち上げたのが庭園協会である。協会は設立された次の年、協会専門雑誌『庭園』を刊行している。庭園協会設立までの斡旋役、協会機関紙『庭園』の発刊までの動きと貢献から見れば、後藤を離れてはなかなか成立できないと考えられる。日本において、日本庭園や西洋庭園に関する研究は、しばしばこの雑誌に論及している。「中国通」としての後藤朝太郎は創刊号から戦前終刊号まで、全文で 73 篇の論説を発表した。さらに上原敬二が創立した東京高等造園学校において「中国庭園」という科目を創立時から急死するまで 20 年以上教えていた。

後藤は漢学、文字、庭園の研究だけではなく、建築学にも触れている。もうちょっと遡って見れば、1902 年、伊東忠太が中国の雲岡石窟を発見した[6]が、その後、多くの日本の建築学者も中国に行って考察し、雲岡石窟についてたくさんのモノグラフを書いている。1920 年、後藤は木下杢太郎[7]、木村庄八と共に中国の雲岡石窟を訪れ、仏教建築と美術の研究を行った[8]。このように、この時期の後藤であれば、当時の日本の建築学者たちと交流があったかもしれない。しかも、後藤と伊東はともに東大の卒業生であり、後藤自身も建築と緊密な関係がある庭園学に精通していた。従って、後藤は自身の文字の研究に基づき、建築学者の伊東の影響を受けて、「古代文字の視点から中国古代建築を研究する」という研究思想を生み出した可能性がある。1913 年、後藤は日本建築学会に招かれ、文字から見た中国古代建築というテーマの発表を行い、その理論的な枠組みと研究成果を提起した（その演説の内容は五つの部分に分けて、1913 年に『建築雑誌』の第 318 巻―324 巻に登載されている）。

表１　後藤朝太郎の演説内容が『建築雑誌』に登載されている状況

タイトル	著者名	年月次	巻号	ページ
文字より見たる支那古代建築（一）	後藤朝太郎	1913―06	318	310-314
文字より見たる支那古代建築（二）	後藤朝太郎	1913―08	320	409-423
文字より見たる支那古代建築（三）	後藤朝太郎	1913―09	321	455-467
文字より見たる支那古代建築（四）	後藤朝太郎	1913―11	323	587-598
文字より見たる支那古代建築（五）	後藤朝太郎	1913―12	324	634-657

３．文字から見た中国古代建築

前文では、文字から見た中国古代建築を後藤が研究するに至った背景を紹介した。以下、後藤が建築学会で発表した内容に基づき、文字から見た中国古代建築を研究する方法、目的、理論的枠組みを紹介する。

3.1　研究方法と目的

後藤は、先秦（紀元前 221 年以前）までの漢字によって中国古代建築を研究するのが、古代建築研究の好ましい方法であると提案した。従来中国建築の発達変遷については遺物（西安の慈恩寺の大雁塔、薦福寺の小雁塔等）の側から唐時代のものに遡れ、石窟寺（河南の龍門、山西の雲岡等）の方面から南北朝に遡れ、若し壁画（山東孝堂山、武梁祠石室）の側からすれば漢代にまでも遡ることができる[9)]。更に遡って、周代の建築はどうであったかという問題になると、遺物、石窟、壁画等の中に具体的にこれを示しているものがないため、分からないということになっている。『儀礼』、『論語』と他の経典に散見している部分は幾分あるが、その様式を示す程のものではない。しかし、先秦の文字に基づけば、周代はおろか中国の原始的な建物の形式、手法、種類をある程度まで推し量ることができるのである。例えば、合の字、会の字、舎の字等にある人冠に基づけば、中国古代建築の最も原始的な性質は合掌造りの屋根であったことが窺える。

したがって、後藤は『稽古斎鐘鼎彝器款識』、『筠清馆法帖』など古代文献の中の漢字を研究対象とし、『説文解字』、『易経』、『爾雅』など古代書籍の中の注釈を用いてこれを補足し、古代漢字によって中国古代建築を研究する理論的枠組みを確立したのである。また、それによって中国古代建築に関する様々な推測も提起した。

3.2　理論的枠組み

後藤は中国上代の文字法によって、古代のものの形を示す漢字は、大きく三つのカテゴリーに分類できると考えた。(1) プランの方法による文字。例えば、「田」「川」「水」等。(2) エレヴェーションの方法による文字。例えば、「大（人体)」「山」「門」等。(3) プラン、エレヴェーションの両方による文字。例えば、「或（國と戈)」「疆」「里（田と艸)」等。従って、

後藤演説の第一部分から第四部分まででは、古代建築の外観を反映した文字もこれら三つのカテゴリーに分類し、それぞれ多くの文字の例をリストとして分析し、古代建築の形に関する構想を提案している。

後藤は、古代の建物の間取り図を具体化した文字の中で、「亜」、「冋」「回」「 」「」の 5 文字を一つずつリストアップして分析している。古代の建物のファサードを反映した文字を、「京」型、「宅」型、「亩」型、「」型の四種類に分け、それぞれ例を挙げて分析を行った。プラン、エレヴェーションの両方による文字の中で、後藤は「郭」、「城」、「元」、「廟」、「囿」、「市」の 6 文字を列挙して分析している。全体的な枠組みは以下の表の形式で示す。

表 2　文字から建築を研究する理論的枠組み

カテゴリー	字例	
プランの文字	亜、冋、回、 、	
エレヴェーションの文字	京の字式	京、亭、敦、高、臺、舎
	宅の字式	内、向、宅、宗、室、宮、家、寒、塞、寘
	亩の字式	亩、稟、嗇、壇、啚、圖
	の字式	、廐、庫、廚、庌、廡、廩、庇、廣、廬、廱
プラン、エレヴェーションの文字	郭、城、元、廟、囿、市	

具体的な例から見れば、プランの文字の中には「亜」という文字がある。「亜」の古音はアクであって、屋の古音と同語である。また、その本来使用される場合の意味は家屋と関係がある。阮元は『稽古斎鐘鼎彝器款識』の巻頭に「亜」の字を掲げた。（ロ）に示されるものは二個共に廟室であって、即ち廟の建物の立面を示すものである。それに対する（イ）は（ロ）

図 1　「亜」を含む字例

（『建築雑誌』第 320 号、409 ページ）

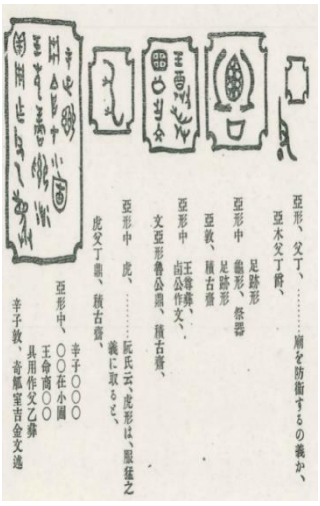


図 2―図 3　亜の字であるプランの方の例

（『建築雑誌』第 320 号、410 ページ）

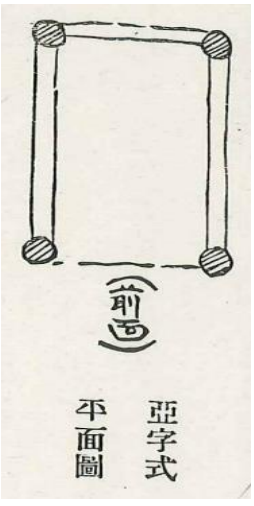


図 4　亜字式建築の平面図

（『建築雑誌』第 320 号、411 ページ）

の平面図を表している可能性がある。その方形の四隅に小さい円型のような凹んだ迹があるが、それはその建物の四隅に埋め込まれた柱を表しており、その中にいるのは廟室の司であるとも推測できる。では、「亜」の字であるプランの方の例をさらに見ていこう。

その内部に書かれた語は多くが祭祀、宗廟に関するものである。従って、上代建築の平面図で四柱のある迹を示しているものと推定できる。簡単に見れば、「亜」とはこのような建築を表している。そして、そのなかには、常に祭器、占い用の亀甲、あるいは王の宣命などが書き連ねられ、その外部にはこれを守衛する意の文字があるため、「亜」は廟の建物と見て差し支えない。少なくとも、廟に近い性質のものであり、儀式に関係ある建物の平面図を示しているのである。

後藤は、建築形態を反映した上記の三種類の文字に加えて、スピーチの第五部分で、建物の部分的な構造を示す文字を紹介している。たとえば、窓の形状を反映した文字で、「囧」という文字の字形の進化は初期建築の窓枠の様子を反映しているといった具合である。また、「囪」という文字は、説文の中に「在墻曰牖，在屋曰囪」という記録があり、古代の住宅の窓の窓ガラスの形を反映している。さらに「至」という言葉の違いは、グリフがダイヤモンド、正方形、三角形などのさまざまな窓の形を示している。さらに、「申」、「爿」、「門」、「階」、「瓦」などの文字は、それぞれ古代建物装飾模様の雷紋、古代のベッド、門の様式、階段の様式、屋根の材料などの情報が含まれている。

図 5―図 6　囪字式、囧字式、至字式の窓

図 7　申の字

図 8　爿字式の床

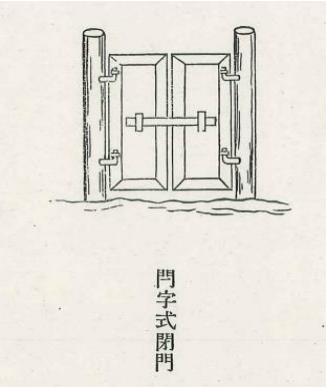


図 9　門字式閉門

図 10　階の字

おわりに

後藤朝太郎は多数の中国と外国の古代文書を引用し、合理的な仮定と推測を提起し、「文字から古代中国の建築を研究する」という新しい研究方法を打ち出し、古代建築研究への異なるアプローチを提供した。同時に、後藤自身も中国庭園について研究を行っており、庭園は建築と密接な関係があるため、後藤の文字から古代中国の建築を学ぶという研究方法を使えば、古代中国の庭園についても同様に文字から扱えることになり、これは新しい研究方向につながる可能性があると考えられる。

注

1) 岸田日出刀（1945）『建築学者・伊東忠太』乾元社、p. 167。
2) 岸田日出刀（1945）『建築学者・伊東忠太』乾元社、p. 181。
3) 伊東忠太（1943）『東洋建築の研究』竜吟社。p. 17。
4) 伊東忠太（1943）『東洋建築の研究』竜吟社。p. 17。
5) 伊東忠太（1943）『東洋建築の研究』竜吟社。p. 18。
6) 岸田日出刀（1945）『建築学者・伊東忠太』乾元社。p. 147。
7) 木下杢太郎（1885―1945）、明治～昭和期の詩人、皮膚医学者、東京帝国大学医学部教授。医学者であると同時に、詩人、劇作家、小説家、美術家、キリシタン史研究家として幅広く活躍。（『20 世紀日本人名事典』）
8) 木下杢太郎 著；趙暉 訳（2017）『雲崗日録』中国画報出版社。p. 51
9) 後藤朝太郎（1913）「文字より見たる支那古代建築（一）」『建築雑誌』318、310-314 頁。p. 310。

参考文献

岸田日出刀（1945）『建築学者・伊東忠太』乾元社。

伊東忠太（1943）『東洋建築の研究』竜吟社。

後藤朝太郎（1943）『文字講話』黄河書店。

木下杢太郎（2017）『雲崗日録』（趙暉、原著は 1922 年発行）中国画報出版社。

後藤朝太郎（1913）「文字より見たる支那古代建築（一）」『建築雑誌』318 号、310-314 頁。

後藤朝太郎（1913）「文字より見たる支那古代建築（二）」『建築雑誌』320 号、310-314 頁。

後藤朝太郎（1913）「文字より見たる支那古代建築（三）」『建築雑誌』321 号、455-467 頁。

後藤朝太郎（1913）「文字より見たる支那古代建築（四）」『建築雑誌』323 号、587-598 頁。

後藤朝太郎（1913）「文字より見たる支那古代建築（五）」『建築雑誌』324 号、634-657 頁。

Research on Ancient Chinese Architecture from the Aspect of Chinese Character

: Basing on Goto Asataro's Speech

ZHOU, Tangbo CHENG, Xiaoqing

Abstract

Ito Chuta, a pioneer scholar of modern oriental architecture and ancient Chinese architecture, introduced how to study ancient Chinese architecture from Chinese characters in Chinese architectural history which have been presented in the lecture about oriental history in 1926. In that presentation, the investigation of sinologist Goto Asataro has also been mentioned. In this paper, Ito Chuta's architectural philosophy will be introduced and the author will analyze the background of how the sinologist Goto Asataro studies ancient Chinese architecture from Chinese characters. In the end, the author will analyze the research background of how the sinologist Goto Asataro studies ancient Chinese architecture from Chinese characters. In the end, the author analyze and summarize the theoretical structure and research result of his speech which was presented in the Architectural Institute of Japan,1913, regarding methods of studying the ancient Chinese architecture from Chinese characters.

Keywords： Chinese character, ancient Chinese architecture, Ito Chuta, Goto Asataro, Architectural Institute of Japan

日本学におけるエリアス学派の応用可能性とはなにか？
—過程的パースペクティブに基づく予備的考察—

村下 慣一（立命館大学大学院生）

要旨

本小稿は、日本学におけるエリアス学派（ノルベルト・エリアスを学祖とする理論潮流）の応用可能性を模索するために試みた予備的考察である。その目的は、国際化の進む日本文化研究における分析視角として、社会動態的な分析枠組みを構築、精緻化することにある。

本小稿は、この目的を達成するための作業として、はじめに、既存の日本学研究におけるエリアスのパースペクティヴの応用事例として、リヒター・シュテフィーの著書『闘う日本学』を参照し、「過程的パースペクティヴ」という視座を取り上げた。つぎに、エリアス学派の「過程（プロセス）」という分析視角がいかなる参照枠として用いられうるのか、ということを明らかにするため、エリアスにおける「過程」理解を取り上げた。そのうえで、前述の方法論的基盤に基づく日本学研究の展望について、とくにスポーツ・武道研究に焦点を当てるかたちで言及した。

キーワード：　ノルベルト・エリアス、プロセス、『闘う日本学』

はじめに

日本学、ないしは日本研究と呼称される研究領域は、言語や文化、哲学・思想、歴史、政治、経済、といった広範な学問領域にわたる学際的な研究領域である。村下慣一（2022）は、この日本学のなかで、歴史社会学の泰斗であるノルベルト・エリアス（Norbert Elias）の「文明化過程論」に依拠し、グローバル化する日本文化である日本武道を捉えようと試みてきた。村下（2021）は、エリアス学派の「グローバル・スポーツ論」を取り上げたほか、村下（2022）では、エリアス学派の方法論に基づく体系的な日本武道研究を取り上げ、その方法論が持ちうる意義を考察するものであった。これらの分析視角は、主にスポーツ社会学におけるエリアス学派の方法論に立脚するものであり、従来「日本学」として確立されてきた分析視角とは、一定の距離を置くものであった、といえよう。

しかし、エリアスの方法論は、すでに「日本学」において、一定の影響を与えている、といえる。たとえば、リヒター・シュテフィー（Richter Steffi）は、主にカルチュラル・

スタディーズ（Cultural studies）の影響を受けながら、ドイツの日本学を牽引してきた第一人者であるが、彼女の方法論にはエリアスの影響が伺える。また、エリアス学派の研究動向として、ヨハン・アーナソン（Johann Arnason; 2003）が、日本文明論への応用可能性について言及したことは、坂なつこ（2011）らによって、これまでも言及されてきたところである。

そこで本小稿では、ノルベルト・エリアスの方法論における鍵概念である「過程（プロセス）」を中心に整理し、当該概念がどのような応用されたのか、あるいは応用可能性を見出せるのか、ということを検討したい。ただし、エリアスの方法論は、非常に広範な領域にわたるものであるため、とくに本小稿では、彼の方法論に内在する鍵概念を通して、その思考法が、日本学においてどのような導きの糸となりうるのか、という点に限定して論じたい。そのために、以下では、リヒターの著書である『闘う日本学』を事例に、エリアスの方法論がどのような影響を与えたのか、ということを確認するとともに、日本学におけるエリアスの方法論に関する分析意義を検討したい。

１．『闘う日本学』におけるエリアス的な認識論の展開

本章では、リヒターの著書『闘う日本学』におけるエリアス的な思考法を事例に、エリアスの鍵概念の応用可能性を確認する。しかし、本論に先んじて、同著におけるエリアスへの言及は、一度であり、あくまで彼女の方法論は、カルチュラル・スタディーズを中心に確立されていることは、強調しておきたい。そのため、同著ではエリアスの方法論が全面に展開されているわけではない。ただし、リヒターの著作にエリアスの影響が伺えることは、同著の編訳者であり、リヒターの盟友ともいえる小林敏明も記しているところである。しかし、なぜエリアスの方法論を模索する類の試みにおいて、このようなエリアスとは一定距離をおいた研究書を取り上げる必要があるのか。本論に先んじて、このことを明確にする必要があることは、言うまでもない。

その理由は、エリアスの著書の標題のひとつでもある「参加と距離化」という思考法にある。エリアスは『参加と距離化』において、「大渦の中の漁師」という事例から、「参加と距離化」という発想の重要性を読者に説明している。それは、エドワード・サイード（Edward Said）に倣って言えば「複眼的」に、あるいは「多元的」に物事を認識することの重要性を解く戒めの物語である、といえよう。このような発想は、エリアスが二元論や二項対立的な思考法をどのように超克しようとするのか、という極めて重要な問題とも密接に結びついている。

本小稿において、あえて同著を取り上げる意義は、村下（2021; 2022）のような方法論に強力に焦点を当てた論点整理では十分に汲み取りきれない、エリアスに内在的な分析視角に焦点を当てることにある。ただし、この作業は、リヒターの優れた分析を、無意味に、また強引にエリアスと接合させ、エリアスの方法論の優位性や影響を過度に強調する作業

であってはならない。本章では、そのことに留意しながら、この主旨に沿って、『闘う日本学』におけるエリアス的思考法を、エリアスの方法論に基づいて整理し、その意義を明確にしたい。

さて、リヒターは「茶の文化」を事例に、「われわれ研究者が自覚的にさまざまな社会文化的コンテクストに関与し、つねに距離をとった観察者でありつつ、しかも自らも参加者である」（リヒター, 2020: 62）ために、三つのパースペクティヴ変換を提示している（上掲: 61-66）。リヒターは、三つの逸話を取り上げ、説明を試みている。そのひとつは、三人の宗匠（とくに千利休）と豊臣秀吉による「茶の湯」を通した社会文化的ネットワーク関係、すなわち「布置関係」に着目したパースペクティヴ変換である。この「布置関係」は、全てにルビが振られているわけではないが、「コンステレーション」と併記されている。当該概念は、一般的にユング心理学の用語としてよく知られているが、同著の別の表現である「機能上の相互依存関係」（上掲: 64）と類義語である、と言えるだろう。重要であるのは、この「相互依存関係」を構築する「茶の湯」という文化が明治期に近代化されるに至るまでの断片的な逸話を、連続的な「過程」として描き出した点にある（上掲: 65）。

この再描画は、リヒターの表現を借りれば、「実体化的パースペクティヴから過程的パースペクティヴへの変換」を意味しているのだが、このように描き出すことによって、「全体として計画されていないまでも、構造化された過程としてどのように［引用者補足: 近代化また、近代日本の建設が］遂行されえたのか、伝統的な茶のコミュニケーション形式はどのようにして、近代的な内容、あるいは形式を備えた理念を媒介したのか、茶の実践はそれに必要な自制、手続き、慎重さ、多機能性ともども、どのようにして「武士道」をビジネスに合流させるのにふさわしい媒体となったのか」（上掲: 65-66）といった諸問題が明らかになる、という。

言うまでもなく「武士道」は、日本古来の、伝統的な精神構造ではなく、「近代日本」という国民国家形成期に、「ネイション」という「想像の共同体」を効率的に構築するための「創られた伝統」として機能した側面を持っている。このような規範を「茶」は媒介することとなったのだが、これらは断片的な分析からは、十分に把握されない。「コンステレーション」の変化の「過程」に着目したとき、はじめて分析可能になる、といえよう。

このような分析視角を示す「過程」という概念は、エリアスにおける「超歴史的な過程」を意識して使用されている、といえるだろう。エリアスにおける歴史的「過程」、すなわち「文明化」とは、『諸個人の社会』が典型例であるが、まさにリヒターが言及したような「全体として計画されていないまでも、構造化された過程」として現れる。このような「偶発性」を、当該社会の歴史のなかに位置づけ、それを描き出す際、エリアス的な認識論は、一つの参照枠として有益である。

また同時に、エリアスの「過程」は、長期的な構造変動を捉える射程を有している。リヒター自身はエリアスに言及していないが、その歴史認識は、明らかに彼の影響を受けて

いる。たとえばリヒターは、十九世紀半ば以降の近現代日本史を、「明治維新から二十世紀初頭頃までの資本主義的工業国民国家の形成、一九二〇年代から一九七〇年代までの大衆社会、一九八〇年以降の、いわゆるポストモダン社会への変化」という三つの発展段階に区分すると同時に、この発展段階が消費文化史や百貨店文化史にも並行して認められる、と述べている（上掲：74）。

このようなナショナルな、あるいはドメスティックな社会の歴史的な構造変動が、当該社会のなかで営まれる文化史のなかにも、同時並行的に現れている、という認識は、まさにエリアスが、スポーツや宮廷社会、礼儀作法の分析を通して、論じてきたことと合致する。この認識論の特徴は、社会構造を据えることで、さまざまな集団的、階級的、社会的現象が、同時代的かつ同質的に、ある特定の社会に現れたことを、機能的因果関係としてではなく、関係論的に説明しようとする点にある。これによって、個別の、あるいはミクロな分析事例を通して、全体的な、あるいはマクロな社会分析を可能にするのである。

そこで次章では、リヒターが重視する「布置関係」を通して描かれる「過程」的なパースペクティブの意義に関する検討を進めるため、ノルベルト・エリアスにおける「プロセス」概念を確認したい。

２．ノルベルト・エリアスにおける「過程（プロセス）」という分析視角

晩年、ノルベルト・エリアスは、自身の学派を形容する名称として、「プロセス・ソシオロジ」を好んだ、という。それでは、彼はいかなる「過程（プロセス）」を社会学の対象として位置づけようとしたのか。この分析視角が、日本学における方法論的な応用可能性を切り開きうる、と著者は考えている。そこで以下では、エリアスの『社会学とは何か』に現れる分析視角としての「過程」を整理したい。

エリアスにおける過程概念は、主に「文明化/脱文明化」や「形式化/脱形式化」といった社会発展の過程を示す概念である。この過程に関する分析の特徴は多岐にわたるが、主な特徴は以下の通りである。それは第一に、社会発展の力学の中心として、国家による暴力独占/減退の過程、すなわち国家形成過程を、経済的側面と同時に取り扱うことによって、経済的事象にのみ還元しないことにある（上掲：205）。それでは、なぜ国家形成過程（暴力）が社会発展の力学の中心として分析されるのか。このことは、エリアスの方法論を規定する重要な要素のひとつである。

エリアスが「過程」として分析しようとした、分析対象のひとつは、「より以前の社会発展の段階であれば、都市や部族や村落が上位を占めるであろうところを、国家社会――今日では国民国家――との情緒的結合が他の関係構造との結合より特別に上位を占める」（エリアス, 1994：166）という疑問の解明である。この疑問はエリアスを、国家形成過程を経済的事象と同時並行的に捉えることへと導いた。エリアスは、「国家的結合と職業的結合」というサブセクションにおいて、以下のように述べている。

発展の各段階において構成員たる個人のこうしたタイプ［引用者補足：エリアスはこの直前で、部族、村落、都市、国家といった統合形態に言及している］の情緒的結合を引きつけるさまざまな関係構造に共通の性格を調べると、まず第一にわかるのは、それらの関係構造はすべて、成員どうしの関係の中での物理的暴力の使用をかなり厳しく管理するような単位であるが、他方で同時に、非成員との関係の中での物理的暴力の使用の用意を成員にさせ、また多くの場合に使用を鼓舞する、ということである。…（中略）…そうした結合［引用者補足：このような集団の生存に関わる暴力の制御によって、人々の間に生み出された、特殊な相互依存関係の生み出す結合］は、社会構造や人々の相互依存関係や人間どうしが形成する関係構造に対して、職業的結合に勝るとも劣らない役割を演じる。それは「経済的」機能に還元することができないし、経済的機能から分離することもできない（上掲：166-7）。

これは単なる単位（集団）を指すのではなく、エリアスの鍵概念でもある「攻守単位」や「生存単位」のことを指す。その関係構造は、戦争といった集団間の暴力衝突の際、文字通り一蓮托生である、という意味で「生存」を共にする単位としての、物理的な暴力を制御する機能を持ち合わせている。このような人間の結合や、統合の過程は、西欧に特異なものではなく、日本においても同様である。日本において、かつて家単位であった「生存単位」は、貴族社会、武家社会、明治維新後の近代日本へと社会発展が進行するなかで、氏族や部族から、「日本」という国家として統合されてきた。こうした関係構造の統合過程を分析視角に組み込むことは、同時に「暴力の制御」という人びとの情動が文化のなかでどのように昇華されてきたのか、ということでもある。たとえば、武術・武道における殺傷性の減退は、この統合過程の発展と無関係ではないのである。

第二に、エリアスは（しばしば誤解されるが）単線的な社会進化論的発展、すなわち未開社会Aがより文明化された社会Bへと「必然的に」進歩したことを示すといった（ある種単純な）機能的な因果関係として描いていない。むしろ、多くの場合、先行する関係構造であるAは、後続する関係構造であるBの可能な変動形態のひとつにすぎず、またBはA の成立のための必要条件のひとつにすぎない、と認識される社会発生上の構造連関およびその発展を、当該関係構造に内在的な関係構造の動態の構造変動によって、因果関係的記述を超克しながら、描き出している（上掲：195-9）。

これらがエリアスによる社会発展の「過程」の記述方法であるが、このような機能的因果関係を超えた記述は、どのような可能性を持つのだろうか。

たとえば、武術は、「パクス・トクガワーナ」とも呼ばれるような、安定した武家社会の社会体制下において、大きな文化的な変容を迫られた、といえる。この変容を、かりに幕藩体制への移行という「必然的な」社会発展のなかで武術が変容した、と見なすのであれ

ば、徳川幕府による幕藩体制の構築なくして、武術はその殺傷性を減退させることはなかった、という記述を導きうる。しかし、幕藩体制の成立による社会構造の変容は、明らかに、それ以前の、すなわち群雄割拠の時代の、絶えず不安定な均衡のもとで成立していた社会構造の、可能な変動形態のひとつにすぎない。同時に、割譲による分国化へと進行する社会発展形態へと向かう力学も僅かであったとしても、作用していただろう。この分国化による勢力均衡的な平和化の過程は、武術の殺傷性を減退させる方向に作用することもありうるが、ともすれば、有事の際に行使しうる物理的暴力の増強へと社会的な関心が高まるなかで、武術の殺傷性をより増強させる方向に作用することもありうる。エリアスの記述法は、「思考実験」であり、こうした複雑な力学を想定させる余地を与えるものである。それによって、日本文化の多元化、複雑化といった現象を、より精緻に描き出しうる、といえる。

３．日本学におけるエリアス学派の応用可能性とは何か？

さて、この関係論的、「過程」的な分析視角は、いかにして日本学に応用可能であろうか。たしかにアーナソンが言及したような日本文明論への応用可能性は、十分に開かれているが、より意義深い研究テーマは、リヒターが試みたような文化史への応用可能性である、と考える。なぜなら、いわゆる日本文化論では、しばしば「伝統」、「独自性」、「固有性」これらに類似する事柄が強調されることが多い。エリック・ホブズボーム（Eric Hobsbawm）、テレンス・レンジャー（Terence Ranger）による『創られた伝統』によって、紐解かれたように、近代以降の「伝統」を、それ以前から固有のもの、すなわち「静態的な」ものとして見なすことは、非常に問題である。それゆえ、日本社会の内部からいかなる「文化」が創造され、今日まで「発展」してきたのか、ということを「動態的」な視角から問う必要がある。

事実として、今日では、茶、能、歌舞伎、武術、武道など、いわゆる「伝統」的な文化から、日本画、アニメ、漫画、ゲームなどの、現代的な文化まで、多様な日本文化が創造され、国際社会のなかで発展しており、世界各国の日本学者らは、これらの諸文化に関する研究を蓄積してきた。しかし、「動態的」な分析視角に基づく研究によって精緻化される余地は、いまだ残されている。

とりわけ著者は、これまで個別の学術領域が確立されてきた「武道学」や、スポーツ科学を、日本学（日本文化論）に位置づけることに大きな意義がある、と考えている。日本における武道やスポーツは、他の日本文化と同様に、日本社会、そこで生活する人びとによって営まれてきた。当然のことながら、その歴史は、他の日本文化と同様に、日本社会の構造変動（近代化や戦後改革など）のなかで、創造され、変化していったことは明白である。それゆえ、スポーツ・武道研究は、これらの諸文化との比較研究によって、異同を明確化できる。また、他の日本文化研究は、いわゆるエリート層から民衆まで、国民（大

衆）全体が実践してきた様々なスポーツ研究を、参照点としての視座を提供しうる。それでは、今後いかなるスポーツ・武道研究が日本学におけるエリアス学派の応用可能性を開拓すると想定されるのだろうか。

第一に、文化装置として機能したスポーツ分析の拡張に寄与しうることを、指摘できる。身体運動文化は、「日本人」のロールモデルを構成するうえで、重要な装置となった。坂上康博（1986）が分析した「武士的野球」論や、西山哲郎（2006）が分析した日本的「スポーツ道」といった特殊日本的と呼称しうるスポーツの変容は、まさにこの例である。すでに村下（2022）は、限定的にではあるが、坂上（1986）とエリアス学派の提供する分析視角との相補性について、言及しており、今後の研究の蓄積のなかで、既存の研究成果を補強、あるいは再構成することが期待される。

第二に、「日本学」や「武道学」という学問領域は、その特性上、内的な分析に強力に焦点を当てるものであり、外在的な分析が十分でないことがある。無論、今日では、「国際日本学」といった、よりマクロな視角に立脚した分析がされているとはいえ、方法論的な精緻化の課題は残されているだろう。

たとえば、フランンスへの伝播/現地での受容を説明する際、「ジャポニズム」として説明されることが多い。なぜ「ジャポニズム」と呼称されるような受容が、とくにフランスで発生したのか。その社会的な力学とは、いかなるものであったのか。かりに、以上の二点が「ジャポニズム」を造語したことで知られるフィリップ・ビュルティ（Philippe Burty）の功績として、ある人物の偉業としてのみ説明されるのであれば、文化の社会動態的な発展という側面を無視することになる。このことは、武道の分析においても同様である。

今日、フランスは「武道大国」として著名であり、柔道、剣道、合気道など、多くの武道の国際的発展を語るうえで、フランスに言及せずに、それを語ることは不可能である。しかし、なぜ他ならぬ「フランス」が大きな役割を果たすことになったのだろうか。それを学術的に説明する際、日仏文化史のみならず、「グローバル化」という視角に立脚しなければならない。日本文化は、フランスであれば、いつの時代でも同様に存在が認知され次第、速やかに受容されたのではなく、特定の時代であったがゆえに受容された、と認識すべきである。この時代性の分析は、国際的な国家関係を前提とする世界史的な認識枠組みを要求する。

以上を踏まえると、日本学という研究領域において、分析枠組みとして援用するに値しうる分析視角を構築しようと試みるならば、「過程」的なパースペクティブを持ち、関係構造に焦点を当てるエリアスの方法論は、参照枠のひとつのなりうる、といえよう。

おわりにかえて

本小稿では、今日、多様化する日本文化（日本武道）の分析に向けた方法論の構築を見据え、予備的な考察を行なった。本小稿は、紙幅の都合上、多くの論点を取りこぼしてい

るが、「過程的パースペクティブ」の概要、意義、応用可能性に関する論定整理は、一定の到達点に達した、と考えている。その具体的な分析については、稿を改めて考察したい。

参考文献

Arnason, J.(2003) “Elias in Japan: State Power, Military Elites and Organized Violence”, Dunning, E. and Mennnel, S.(eds), Norbert Elias vol.Ⅱ, London: Sage Publications: pp.235-247.

坂上康博（1986)「日本近代におけるスポーツの受容と展開--明治期の校友会野球部を中心に」(伊藤高弘ほか『スポーツの自由と現代　下巻』、青木書店)、401-434 頁。

坂なつこ（2011)「スポーツにおける文明化論の可能性と今後」『スポーツ社会学研究』19 (1)、39-54 頁。

西山哲郎（2006)『近代スポーツ文化とは何か』、世界思想社。

ノルベルト・エリアス（1994)『社会学とは何か』(徳安彰訳、原著は 1970 年)、法政大学出版局。

村下慣一(2020)「エリアス学派による合気道研究の新規性と課題--サンチェス・ガルシア『日本武道の歴史社会学』の批判的考察」『現代スポーツ研究』4、30-43 頁。

――（2021)「合気道における「競技化」の動向と現状―国際統括組織「WSAF」設立にみる「グローバル化」の展望―」『東アジア日本学研究』6、155-170 頁。

――（2022)「N・エリアスに基づく「日本-西欧」の比較研究に向けた予備的考察―R・ガルシア『日本武の歴史社会学』を手がかりとして―」『東アジア日本学研究』7、111-118 頁。

リヒター・シュテフィ（著)、小林敏明（編訳）(2020)『闘う日本学--消費文化・ロスジェネ・プレカリ化の果てに』、新曜社。

Applicability of the Elias School in Japanology: A Preliminary Consideration from a Processual Perspectiveis

MURASHITA, Kanichi

Abstract

This paper is a preliminary study attempting to explore the applicability of the Elias school in Japanese studies. Its purpose is to construct and elaborate a sociodynamic analytical framework as an analytical perspective in the increasingly internationalized study of Japanese culture.

To achieve this objective, I first refer to *Tatakau Nihongaku* (Richter Steffy) as a case study of the application of Elias’s perspective in existing studies of Japanology and then take up the perspective of “processual perspective.” Furthermore, I discuss Elias’s understanding of “process” to clarify how the analytical perspective of “process” in Elias can be used as a frame of reference. Finally, I discuss prospects for Japanese studies based on the methodological foundation mentioned above, with a particular focus on sports and martial arts studies.

Keywords： Norbert Elias, process, *Tatakau Nihongaku*

東アジアの視点から見る日中学校保健教育の対比について

崔 旭（新潟大学大学院生）

要旨

新型コロナウィルスによって引き起こされた世界中のパンデミックには、教育の力によって、全面的、基本的な健康知識を持っている人間を育てる目的を東アジア諸国の義務教育段階の健康教育に導入すべきだと考える契機となり、一人ひとりの健康意識の向上によって、より安全、安心な国際環境を作ることを望んでいる。

本研究の目的は、東アジアにおける日中両国の学校保健思想の対比によって、学校保健教育という領域において、相互的に参考にできる部分を見つけることを目指している。日本における学校保健は、主に教科書、学術雑誌「学校保健研究」、CiNii Articles での論文を参照した。中国における学校保健、主に中国知網 CNKI に掲載された論文を参照した。

日中両国の義務教育では、学校保健には協力できる部分が多く存在している。両国における学校保健教育の実施者の職務は、医療行為(注射、投薬)の有無では異なるが、人間主義を表している点では同じである。日本の場合、学校保健に関わる法律や法規、養護教諭などの保健教育に携わる人材の育て方、保健室の設置方法、国際的な保健思想の導入、発展途上国への援助などには、より多くの国際的な視点を導入しており、有益な発展経験がある。

キーワード：　東アジア、日中両国、学校保健教育、対比

はじめに

21 世紀に入ってから、グローバル化の進展が一層進んでいる。人々の生活様式は知識基盤型へと変化し、情報通信技術の高度化、生産活動の自動化等が進んでいる。しかしそれに伴い、人間の身体と心にも様々な課題が生じている。身体活動の減少による運動不足病、心理的ストレス増加による疾病など、人々の健康の保持・増進に関する課題は山積している。新型コロナウィルスによって引き起こされた世界中のパンデミックは、人類の生活スタイル、考え方も十分に変えた。現在、世界の連結においては、インターネットなどの危険性が少ないものだけではなく、恐怖主義、ウィルスなどの目に見えない脅威も広がっている。従って、この状態においては、教育の力によって、全面的、基本的な健康知識を持っている人間を育てる目的を各国の義務教育段階の健康教育に導入すべきだと考えられる。東アジア諸国の地域協力については「東アジア共同体の時代が、いま足音を立てて近づい

ている。もはや共同体は、できるかできないかの可能性の問題ではなく、どう実現し、どんな内容を盛り込んでいくかを制度設計する、現実の政策課題へと変貌している」と論じられている（進藤榮一，2006）。また、張雲(2020）が「東アジア地区における公共衛生管理は内的効能性や国際衛生管理に持続的な影響を発揮し、二つの層の知識とつながる共同体を持っている。一つ目、伝統的な国際関係理論は意識的にプロな科学知識をファンデーションとする知識共同体である。二つ目、上述のプロな知識を超え、一般的な政治及び社会認知共同体を作ることである。この共同体の特徴は、グローバル化を背景に難題に対する解決機能を持っている共同意識である」と指摘した。さらに、進藤榮一(2006）は東アジア共同体構築の前に立ちはだかっていた 3 つの壁が崩れ始めたことを提言した。その 3 つの壁は、地理の壁、歴史の壁、アイデンティティの壁である。また、情報革命が促す東アジア共同体について、昨今の日本や中国における韓流ブーム(コリアン・ウエーブ)や、韓国における華風ブーム(チャイナ・ウインド)、東南アジアにおける J(ジェイ)ポップの流行や中国に見る“村上春樹現象”が、その深化を象徴する。

以上の観点から見れば、現在、東アジア諸国は経済面の協力が進んでいると同時に、公共衛生面での協力も益々重要になっている。有効的なグローバル・ヘルス・ガバナンスの構築を通じて、東アジア諸国における人々の健康を守ることが求められる。この戦略的な考え方を教育に反映すると、科学的な健康教育の実施には時間や財力が必要である。義務教育段階における保健教育及び保健管理の実施は、最も実現可能な方法だと考えられる。東アジア諸国における一人ひとりの健康意識の増進によって、個人の幸せを実現することだけではなく、より安心安全な国際環境を作ることも願っている。本研究は、東アジアにおける日中両国の学校保健思想の対比[1)] によって、学校保健教育という領域において、相互的に参考にできる部分を見つけることを目指している。また、義務教育段階の学校保健室の役割について、学校教育における人間主義[2)] を探求する。

１．日本の義務教育段階における学校保健の特徴

一つ目、日本が独自の伝統的な文化を含め、過去と未来を繋ぐという特徴がある。日本における学校保健はすでに 100 年以上にわたる発展の歴史があり、明治時代から今まで、徐々に教育的意義を持つようになった。「保健室」は、現在、日常的に「友人等による傷病者の病室への送り届けや見舞い」「児童生徒の保健委員活動」が行われている場所として児童生徒が強く意識している。学校は社会の縮図であるため、保健室の存在及び活用によって、児童生徒が子どもの頃から自分の心身健康を重視する意識を育てられたと考える。そして、精神面または身体面には異常がある時、社会中には助けを求めるところがあるイメージも付けられた。これは、学校保健教育の優れたところだと考えられる。

二つ目、日本における学校保健は、学校教育の平等性及び公平性を厳守する特徴がある。日本での学校保健は、保健教育と保健管理に分けられ、児童生徒に対する教育及び学校で

の施設や設備の管理を含める。義務教育段階における学校教育は、児童生徒の知識増加及び健康成長に非常に重要な役割を担っている。日本において、義務教育である小・中学校の修業年限は 9 年間であり、学校保健は学校教育における重要な一環として、農村部や都市部にかかわらず、全国で実施されている。この点において、日本の学校教育の平等性と公平性を強く実感することができる。

三つ目、日本の学校保健教育は子供の一人ひとりのニーズに合わせた教育を可能にする。森昭三(2000）は、学校保健の教育における存在理由として、言い換えれば学校保健の目的として以下の 3 点を挙げている。①心身ともに健康な国民の育成、②教育を受ける権利（学習権、発達権）の保障、③児童生徒の生存権・健康権の保障という目的である。これらの目的は、学校に内在する福祉的機能(守る仕事)と教育的機能（育てる仕事）とを統一的にとらえ、実践活動に反映されることによって達成されるものであると述べている。

四つ目、学校保健をめぐる完備な法律、資格、人材の育成制度及び定期的に改訂する指導要領の存在である。日本において、学校保健をめぐる法律は数多く存在している。例えば、「日本国憲法」、「教育基本法」、「学校教育法」、「学校保健安全法」、「学校給食法」、「健康促進法」、「食育基本法」、「母子保健法」などである。且つ、養護教諭という専門的な資格がある。大学における養護教諭特別別科、医療福祉に関する専門学校、医学部保健学科などが学校保健の人材を育成することができる。養護教諭は、基本的な医療知識及び教育現場に関わる知識を習得しなければならないため、看護師または教育学部の卒業生がその資格を得る。日本における養護教諭の資格のデザインは、現実の必要性を十分に考慮している。日本文部科学省のウェブサイトでの定義によると、「学習指導要領」とは、全国どこの学校でも一定の水準が保てるよう、文部科学省が定めている教育課程（カリキュラム）の基準である。およそ 10 年に 1 度、改訂している。子供たちの教科書や時間割は、これを基に作られている。これにより、教育内容の時代性を守ることができる。

以上のことによって、学校教育における学校保健の実施は、児童生徒が心身ともに健全な状態に育てられることを確保している。特に、日本の学校教育における学校保健は、児童生徒の日常生活の良い生活習慣の形成、社会人として必要な生活技能の訓練に役立つ。それは子どもに最大限の教育機会と発達の可能性を保障する活動に他ならず、医学的知見に教育的視点を融合させ人間的発達を導く学校保健活動に展開させる教育的保健活動である。

２．中国の義務教育段階における学校衛生の発展

中国において、学校保健は学校衛生と言われる。馬軍（2015）によって、学校衛生の歴史は、(1) 辛亥革命の前（1862 年 6 月～1912 年）における早期発展、(2) 辛亥革命の後（1912 年～1949 年 9 月）における学校衛生工作、(3) 新中国成立後の発展（1949 年 10 月以降）に分けられる。(1) 辛亥革命以前には、主に西洋からの学校衛生制度を導入し、教

会学校が学校医を招聘することが多かった。また、教会で多くの校医は西洋医者が担当する一方、本土の学校には多めに漢方医が担当するが、西洋医者も受け入れる。嶺南大学が1898 年に学校医を設置したことが、中国における校医の歴史の始まりである。(2) 辛亥革命の後、学校制度の変革によって、師範学校で学校衛生に関わる専攻が設計された。さらに、具体的な学校衛生に関する制度も作られた。(3) 新中国成立後の発展については、文化大革命が始まる前に、学校衛生の発展によって、学生の健康を守ることが、教育部及び衛生部と関わりがあると定めた。文化大革命時は学校衛生の発展は停滞の状態になった。しかし、文化大革命が終わった後、学校衛生工作が全面的に回復し、学校体育衛生に関わる規定及び条例、未成年者の発育発達に関わる研究所などを作った。近年、児童青少年に関わる綱要及び食堂の食品安全に関わる規定や条例も増え、学校衛生監督、小中学校における衛生保健に関する技術人員及び校医(保健教師)が含まれた学校衛生工作体系が形成された。

現在、中国における義務教育段階の学校保健に関わる最も重要な条例は、1990 年代に頒布された「学校体育工作条例」及び「学校衛生工作条例」である。中国教育報の李小偉(2011)が教育部体衛司元司長宋尽賢に訪問した内容によると、「学校体育工作条例」及び「学校衛生工作条例」が作られた時は、教育部、体育部、衛生部、人事司、財政部など、複雑な内部関係があるため、非常に時間や人力がかかったことを指摘した。また、宋尽賢がこの二つの「条例」を作った時、体育教師及び学校医に関わる職務規定、資格などの最も重要な内容を削除されたことを指摘した。この理由について、私が中国は広くて、90 年代各省の状況が違っており、その時の国情に相応しい条例を作るために、折衷案を選んだと考えている。しかし、『国家中長期教育改革と発展計画綱要(2010-2020 年)』が作られた時、学校体育衛生工作には最も弱い部分がチーム構築である。学校体育衛生工作が迅速的、有効的に発展するために、この二つの「条例」を修訂する時、高度的な注意が必要である。そのため、今後、学校体育衛生に関わる人材づくりが益々重要になることは宋尽賢が指摘した。

３．日中両国の学校衛生思想の関連性

日本と中国の学校保健思想は、深い関連性がある。特に早期発展の時期には、西洋の学校制度に影響された特徴がある。例えば、「学校衛生学」は三島通良が 1889 年に書き終えた。そして、この本は 1901 年に汪有齢が翻訳して、近代中国で初めて学校衛生に関わる専門書である。この本の中には、正式的に「学校医」という言葉を使用した。中国の学校は20 世紀初における衛生工作はほぼこの本に載せた主要モデルで行った。以上のことによって、中国における早期学校衛生思想の発展は日本からよく影響された。

1970 年代、北米から人間の全面的な発展を教育の目的として促進する考え方がアジア、オセアニアに影響した。1985 年日本で行われた幼児教育、保育会議では、幼児の発展イコール知力発展の傾向を批判し、「知力中心」から幼児の全面的な発展に転向することを指摘

した。香港、マカオ及び台湾地区では既に「全人教育」または「全人発展」を児童教育の基本目標として導入された。

日中両国の学校衛生思想が、どちらも人間の命を守ることをよく表した。人間形成には社会的環境、自然的環境、個人の生得的性質、そして教育の四つの力が働いているとした(宮原誠一, 1976)。広い概念として捉えられる人間主義的教育とは、学校はあくまでも人間の知的な側面に重点的にかかわることだけではなく、学校は全体としての人間にかかわるべきであることである(島崎保, 1979)。日本における学校保健は、児童生徒の発育発達の段階に応じて、学校での勉学生活の様々な場面に柔軟に対応する。この点から見れば、人間主義的教育がよく反映されていると考えられる。

日本における学校保健はイギリスの公衆衛生の思想に影響を受けた。瀧澤利行（2020）による日本の学校保健における原理・思想の研究論文では、多田羅浩三（1999）がまとめた公衆衛生思想の展開過程をさらに四つに分類した。第 1 は、「社会防衛思想」である。感染症などのような健康危険が生じた場合、患者の生命を守ることはもとより、患者の発生によって社会全体の機能が低下し、疾患をもたない無辜の市民にまで影響が及ばないように予め社会の機能を温存するように疾患の管理や環境の管理を徹底する思想である。第 2 は、チャドウィクによって提唱された予防における画一主義の思想である。同一の手段と内容によって、貧富の差にかかわらず予防の対象として管理していくことが重要であるとする。第 3 は、慈恩的な施策から独立した科学主義の思想である。市民の健康危険の解決は、科学的な手法にもとづいた医学的管理によらなければならないという思想である。第 4 は、個人による自己制御の思想である。公的な管理やサービスが普及し、体系化されることによって、管理の客体となった個人は自己の健康に対して意識が希薄になり、健康に必要な生活の自己規制を失いかねない。これらの思想は、学校保健活動を公衆衛生活動の一環として考える時に、そのまま学校保健の医学理論的基礎として適用しうると瀧澤利行（2020）が指摘した。私から見れば、公衆衛生思想が日本の学校保健思想の基礎になり、学校保健を実施する時の指導思想になることによって、社会防衛から個人の行為まで、一歩一歩公衆衛生の意識を児童生徒に教えしつづける。

４．日中両国の学校衛生思想の関連性

日中両国の学校保健は、世界中にある学校保健思想から影響される。瀧澤利行（2020）によると、ヘルスプロモーション思想は、日本の学校保健がよく参照しながら展開された学校保健思想である。ヘルスプロモーションとは、世界保健機関（WHO）が 1986 年にカナダのオタワで開催した第 1 回ヘルスプロモーション国際会議において採択されたオタワ憲章の中で用いられた。ここでは、「ヘルスプロモーションとは人々が自らの健康を管理し、よりよい状態に改善できることを可能ならしめる過程である（Health promotion is the process of enabling people to increase control over, and to improve, their health)」

と規定している。ヘルスプロモーティングスクールの普及とともに、1999 年には、UNICEF が Child Friendly School を提唱し、子どもの権利の保護を基本とした健康増進活動を進めた。2000 年に WHO, UNICEF, UNESCO, 世界銀行等が、今までの活動経験を集約し、効果的に学校保健を進めていくための指針を明示した Focusing Resources on Effective School Health（Fresh）を提唱した。

小川利夫（1999）は子どもの権利に関して、「子どもを守るとは子どもの人権として教育と福祉の権利を守ることである」と指摘した。この考え方は、国連が発表した「子どもの権利条約」にも明記された。日本の小学校教育での学校保健は、できる範囲で児童生徒一人ひとりに優しく対応し、社会人としての必要な健康知識を教え、子どもの頃から健康意識を涵養している。一方、本調査によって、中国では、経済が豊かな東南沿海地域にある広東省及び山東省でさえ小学校の学校保健の実施状況が良いとは言えないことがわかった。中部及び西部の実施状況はさらにひどいかもしれない。中国における義務教育の学校保健をさらに発展させる必要がある。

瀧澤利行（2020）はチャドウィクとエンゲルスの思想を対比し、労働者階級の生活と健康の保護を大きな社会課題としていた点では両者は共通していたと論じた。とりわけ過酷な児童労働から児童の健康と生活を保護することは、社会の大きな課題として認識されつつあった。それは、資本主義の立場からも、社会主義の立場からも大衆の健康、特に子どもの健康を保護し増進することが社会の共通利益として考えられていたことを指摘した。

また、七木田文彦（2020）は歴史研究者が制度史を手がけるのは、制度という言語化された文字情報と行間に、当時の制度立案者たちの考えと葛藤を明らかにしながら、人間の考え方の本質を見ようとするからであると指摘した。従って、中国の小学校教育における学校保健の発展は、日本などの先進国の良い経験を十分に研究して参考にする価値があると考える。

おわりに

日中両国の義務教育では、学校保健という面には協力できる部分が多く存在している。日本の義務教育段階における学校保健に関わる法律や法規、養護教諭などの保健教育の人材の育て方、保健室の設置方法、国際的な保健思想の導入、発展途上国への援助などには、多くの有益な発展経験を持っている。将来、中国における教育内容の改革、国民健康の促進、公衆衛生の発展などに対して、義務教育段階における保健教育及び保健管理の導入が必要である。東アジア諸国における一人ひとりの健康意識の向上によって、より安全、安心な国際環境を作ることを望んでいる。

注

1）日本の学校における学校保健の発展、保健室の役割、養護教諭の職務について、主に学校保

健に関する教科書（『学校保健マニュアル(改定 8 版)』、『学校保健安全法に対応した学校保健―ヘルスプロモーションの視点と教職員の役割の明確化―』)、学術雑誌「学校保健研究」、CiNii Articles で探した論文を参照した。中国の学校における校医及び保健教師の職務について、主に中国知網 CNKI（データベース)で載せている論文を参照した。特に『中国学校衛生』という学術雑誌をよく参考している。

2) 人間主義、所謂ヒューマニズムである。デジタル大辞泉によって、以下の説明がある。(「デジタル大辞泉」では、年 2 回の定期更新を行い、世に氾濫するカタカナ語や IT 関連用語の大幅追加を行うなど、従来の辞典以上に新鮮なデータを提供している。)

①人間性を称揚し、さまざまな束縛や抑圧による非人間的状態から人間の解放を目ざす思想。

㋐「人文主義」に同じ。

㋑ 17～18 世紀にイギリス・フランスで、普遍的な人間性を認め、いくつかの市民革命の指導理念となった思想。市民的ヒューマニズム。

㋒ 新人文主義。ネオヒューマニズム。

㋓ 資本主義による人間の自己疎外から人間性の回復を目ざすプロレタリア階級の運動。社会主義的ヒューマニズム。

②人道主義。

参考文献

デジタル大辞泉（2022)、小学館。
https://kotobank.jp/word/%E3%83%92%E3%83%A5%E3%83%BC%E3%83%9E%E3%83%8B%E3%82%BA%E3%83%A0-121135（2022 年 11 月 26 日閲覧)

衛藤隆，岡田加奈子(編)（2015)、『学校保健マニュアル(改定 8 版)』、南山堂。

馮增俊 陳時見 項賢明編集（2013)、『当代比較教育学』人民教育出版社。

何鈺怡，李永宸（2020)、「《学校卫生学》与《学校卫生概要》比较」『中国学校衛生』41(1)、8-11 頁。
(訳:『学校衛生学』と『学校衛生概要』の比較)

小川利夫（2001)、教育福祉の意義と概説.（小川利夫，高橋正教編)、教育福祉論入門、光生館。

李小偉（2011)、「不断完善学校体育卫生法制政策，为青少年学生监控成长打牢基础-中国学校体育 30 年所经历的那些事儿-历史法规篇」『中国学校体育』、8-13 頁。(訳: 学校体育衛生法制政策を完全し、青少年学生の成長に助力する―中国学校体育 30 年の発展の秘密探求(歴史法規篇))

劉寶存（2004)、「全人教育思潮的兴起与教育目标的转变」『比較教育研究』25(9)、17-22 頁。
(訳:全人教育思想の発生と教育目標の転向)

宮原誠一（1949)、「教育の本質」、『宮原誠一教育論集』国土社。

馬軍（2015)、「中国学校衛生工作体系建設」『中国学校衛生』4、481-484 頁。(訳: 中国学校衛生体系形成)

森昭三（2000)、「学校保健の意義と目的」、(教員養成系大学保健協議会（編)『全訂学校保健ハンドブッ

ク』、ぎょうせい、17-24 頁。
日本文部科学省：学習指導要領の基本的なこと
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/idea/index.htm（2021 年 4 月 1 日閲覧）
進藤榮一・平川均（2006）、『東アジア共同体を設計する』 日本経済評論社。
七木田文彦（2020）、「第 2 回　制度史は何を語るのか」『学校保健研究』62、133-137 頁。
島崎保（1979）、「人間主義的教育における教師の役割について」『教育方法学研究』4、9-16 頁。
友川幸（2020）、「諸外国の学校保健」『学校保健ハンドブック（第 7 次改訂）』、ぎょうせい、48-51 頁。
多田羅浩三（1999）、「公衆衛生の思想―歴史から教訓―」、医学書院。
徳山美智子，中桐佐智子，岡田加奈子（編）（2012）、『学校保健安全法に対応した学校保健―ヘルスプロモーションの視点と教職員の役割の明確化―』、東山書房。
瀧澤利行（2020）、「第 3 回　学校保健における原理・思想研究の意義と課題」『学校保健研究』62、205-211 頁。
張蘇萌・張丹紅（1998）、「中国早期校医设置概述」『中国学校衛生』19(4)、241-242 頁。
（訳：『中国早期校医設置に関する論述』）
張雲（2020）、「知识认知共同体与东亚地区公共卫生治理-中日合作的必要与前景」『世界経済与政治』3、62-77 頁。（訳：知識・認知共同体と東アジア公共衛生ガバナンス 日中協力の必要性と展望）

A Comparison of Japanese and Chinese School Healthcare Education from the East Asian Perspective

CUI, Xu

Abstract

Due to the global pandemic caused by the Covid-19, it became an opportunity to think about school healthcare education. Through the power of education, the purpose of nurturing people with comprehensive and basic health knowledge should be introduced into health education at the compulsory education level in East Asian countries. I hope that we can create a safer and more secure international environment by improving the health awareness of each individual.

The purpose of this research is to find a part that can be used as a mutual reference in the area healthcare education by comparing the school health ideas of Japan and China. For the reference material of school healthcare in Japan, I mainly referred to textbooks, academic journals "School Health", and articles in CiNii Research. For the reference material of school healthcare in China, mainly papers published in China Knowledge Network CNKI were referred.

In compulsory education in both Japan and China, there are many areas where cooperation is possible in terms of school healthcare. The duties of school healthcare teachers in both countries differ depending on medical procedures use (injections, medications), but they are the same in that they represent humanism. In the case of Japan, there is a greater focus on the laws and regulations related to school healthcare, methods of training school healthcare teachers, methods of setting up school healthcare rooms, methods of importing international healthcare concepts into education, and methods of providing assistance to developing countries. These things in Japan could introduce many international perspectives and useful development experiences for China.

Keywords：East Asia, Japan and China, School Healthcare Education, Comparison

中国人元留学生の就職活動
―中国で就職した場合―

黄 美蘭（帝京平成大学）

要旨

本研究では、日本で留学を終え中国で企業に勤めている中国人元留学生を対象に、1）就職先を中国に決めた際の自己分析、2）中国で就職活動を行う際に、大学側に求める支援、3）現在の職務に役に立つと思う、大学時代に学ぶべき知識と身につけるべきスキルについて明らかにした。その結果、まず、自己分析として［日中の職場の相違点］、［将来設計］、［仕事に対する要望］、［就職活動に対する理解不足］が得られた。中国人元留学生は、日中の職場環境の相違点や家族のこと、将来の発展性などを総合的に考え、就職先を中国に決めていることがわかった。次に、大学側に求める支援として［情報提供・就職活動講座］、［日本での中国現地採用・説明会］、《中国に帰国して就職活動に参加するための長期休暇》、《中国と日本の専門分野の名称の違いについての確認》が得られた。日本で学業を続けながら中国で就職活動を行うことは難しいと考えられ、特に、中国における就職に関連する情報の提供や、各企業が直接日本の大学に訪れ中国現地採用を実施することを望んでいることがわかった。最後に、現在の職務に役に立つと認識する知識とスキルとして［専門分野の資格］、［人間関係］、《仕事内容に関連する専門分野の知識》、《英語》が得られた。特に、中国の日系企業に勤めている場合、日本の各種資格があることで会社内での評価や給与のアップにつながると認識していることがわかった。

キーワード：　日本留学、中国人元留学生、自己分析、就職活動支援、知識・スキル

１．問題の所在と研究目的

日本の大学や大学院で学業を終え、その後、日本の企業等へ就職する留学生は増加傾向にある。2020 年において「留学」の在留資格を有する留学生が日本の企業等への就職を目的として在留資格変更許可を得たのは在留資格変更許可申請に対して処分した数の 86.9%であり、前年の許可率に比べると 7%増加している（出入国在留管理庁，2021）。また、在留資格変更許可を得た者のうち、中国人が全体の 36.8%を占め、最も多い。日本政府は、留学生の日本国内での就職率を 3 割から 5 割へ向上させることを閣議決定しており（内閣官房日本経済再生総合事務局，2016）、日本で学業を終え、日本の企業等に就職する

元留学生はますます増加すると考えられる。一方、海外で留学を終え、中国に帰国して就職、起業する留学帰国者も増加傾向にある。2000 年代に、「頭脳流出」を懸念する中国政府により帰国奨励政策が実施され、また、近年の中国の経済成長もあり、海外で留学を終え中国に帰国する留学経験者が増加したと考えられる。守屋（2020）においても、世界中の新興国が発展する中で、中国が更なる経済発展を行うために、自国の海外留学生の帰国政策を積極的に推し進めていることが影響し、海外で学業を終えた中国人留学生が中国に帰国する傾向が増大していると述べている。

中国人留学生が日本で留学を終えた後の進路選択やキャリア志向について調査した先行研究に、黄（2021a）や竇・佐藤（2017）がある。黄（2021a）は、在日中国人留学生のアルバイト経験とキャリア意思決定および将来のキャリア志向について調査を行い、中国人留学生は日本留学終了後の将来のキャリアに対して、「起業志向」、「日本での就職志向」、「中国での就職志向」、「第三国志向」を持っているとしている。また、将来の進路を選択したり決定したりする際に、「いろいろ考えすぎて、どの職業を選べばよいのかわからない」「可能性のある将来の職業がたくさんあるので、どれにしたらよいのかわからない」などの場合は、将来、「中国で日本留学経験が活かせる企業に就職したい」と考える傾向があると述べている。さらに、「将来の職業のことを真剣に考えたことがない」、「将来の職業について、考える意欲が全くわかない」などの場合は、将来のキャリア志向として「日本でとりあえず就職したい」と考えているとしている。中国人元日本留学生の進路選択の影響要因と職場環境・生活環境について調査した竇・佐藤（2017）は、中国人元留学生が卒業時の就職先として日本や中国を選択した理由として、「キャリア形成／能力向上」が上位にあるとしている。特に、「昇進の見通しがあるから」については、日本より中国で就職した者が重視する要因であると述べている。また、「配偶者による理由」、「親による理由」についても、中国に帰って就職した者がより重視する要因であるとしている。

このように、中国人元留学生が日本留学終了後の就職先を選ぶ際に、環境要因や個人的要因、心理的要因など、さまざまな要因の影響を受けていることがわかる。本研究では、中国人元留学生の心理的要因に焦点を当て、日本留学終了後、中国で就職することを決めた際に、まず、どのような自己分析を行ったのかについて明らかにすることを 1 つ目の目的とする。次に、2 つ目の目的として、中国人元留学生は中国で就職活動を行う際に、日本の大学にどのような支援やサポートを望んでいるのかについて検討する。最後に、現在の職務に役に立つと思う、大学時代に学んでおくべき知識や身につけておくべきスキルについて解明することを 3 つ目の目的とする。これらの研究目的を明らかにすべく、本研究では、次の 3 点を研究課題に設定した。

研究課題 1：就職活動の際の自己分析はどのようなものか

研究課題 2：就職活動の際に大学側に求める支援はどのようなものか

研究課題 3：現在の職務に役に立つと思う、大学で学ぶべき知識や身につけるべきスキルはどのようなものか

２．研究方法

2.1　調査手続き及び分析対象者

2022 年 3 月に、日本で留学を終え、現在中国で企業に勤めている元留学生 4 名（男性 4 名）を対象に、オンラインによる半構造化インタビューを実施した（表 1）。対象者 1 名につき 60 分～90 分の半構造化インタビューを中国語で実施した。対象者については、留学生関連の研究を行なっている筆者の知人を通して、スノーボール方式で募集した。

対象者の滞日期間は 3 年～6 年である。最終学歴は修士 2 名と学部 2 名で、専門領域は理系 2 名と文系 2 名であり、日本語能力試験 N1 合格 3 名、N2 合格が 1 名である。現在の職歴は 6 ヶ月～5 年 6 ヶ月で、職種は設計、開発、顧客管理、営業である。また、現在勤めている企業の形態は中国の国有企業 2 名と日系企業 2 名である。

表 1　対象者の属性

No.	性別	滞日期間	現在の職歴	現在の職種	企業形態	専門領域	最終学歴	日本語能力
A	男	3年6ヶ月	3年5ヶ月	設計	国有企業	理系	修士	N1
B	男	3年	2年1ヶ月	開発	国有企業	理系	修士	N2
C	男	4年	5年6ヶ月	顧客管理	日系企業	文系	学部	N1
D	男	6年	6ヶ月	営業	日系企業	文系	学部	N1

2.2　分析方法

インタビュー内容の整理に当たっては、MAXQDA を用いて KJ 法を援用し、質的分析を行なった。インタビュー内容は文字化し、それぞれの研究課題に対する語りに対してコーディングを行った。また、コードシステム上で、意味が類似するコードをグループごとにまとめ、分類・整理し、カテゴリー名をつけた。意味の類似するものが見つからない場合は、無理にカテゴリーにまとめることを避けた。分析結果については、中カテゴリーを［ ］、小カテゴリーを＜ ＞、単独コードを《 》で表す。なお、図表中の数字は、質問に対する語りの数（件数）である。

３．結果

3.1　就職活動の際の自己分析（研究課題 1）

対象者に「日本で留学終了後、なぜ中国で就職しましたか」と問いかけ、就職活動の際にどのような自己分析を行い、就職先を中国に決めたのかについて分析した。その結果、

就職活動の際の自己分析として 15 件得られた（表 2）。

表 2　自己分析

自己分析（15）	
日中の職場の相違点	**5**
日中の会社の雰囲気の相違点	1
日中の就職システムの相違点	1
日中の社会の雰囲気の相違点	1
土木分野における日中の相違点	1
中国の職場における専門分野の明確さ	1
将来設計	**5**
今後の発展	2
留学前からの計画	2
家族のこと	1
仕事に対する要望	**3**
安定した仕事の追求	1
忙しい仕事の敬遠	1
国有企業への就職希望	1
就職活動に対する理解不足	**2**
日本の就職先に対する理解不足	1
日本の仕事内容に対する理解不足	1

具体的には、中カテゴリー［日中の職場の相違点］5 件、［将来設計］5 件、［仕事に対する要望］3 件、［就職活動に対する理解不足］2 件が得られた。ここでは、各中カテゴリーについて対象者の語りを引用しながら具体的な内容について述べる。

まず、［日中の職場の相違点］について、対象者は次のように語っている。「国内の土木関連の仕事と日本は異なるところがあるということがわかりました。また、日本の社会の雰囲気や会社の雰囲気を考えたり、当初は日本で就職することも考えましたが、～～～自分は日本で長く勤めることができないと判断しました。それで、後になってからは就活をしませんでした」。また、［将来設計］については、「～～～将来のことや自分の性格、家族のことを考えると、自分は日本で長く勤めることができないと判断しました」と述べている。次に、［仕事に対する要望］については、「私は安定した仕事が好きです。あまり忙しい仕事はしたくないと思いました」と語っている。最後に、［就職活動に対する理解不足］について、対象者は次のように語っている。「就職先をみると、中国では土木専攻を卒業すると大きな会社、例えば、国有企業などに就職することが多いです。でも、日本では、卒業すると JR の会社だったり、設備に関する企業に就職することが多い印象でした」。

このように、中国人元留学生は就職活動を行う際に、日中の職場の相違点について分析したり、将来の仕事に対する要望や将来のキャリアプランを考えたり、日本における就職活動に対する理解が足りないと認識した場合、就職先として中国を選択することがわかった。中国における留学経験者の急増や中国国内での博士号取得者が急速に増加したことにより、企業等の雇用者が要求する水準も高くなり、海外での就職経験やスキルを求めるようになっている（阿部・徐，2011）。実際に、中国人留学生は日本で大学や大学院を卒業・修了後、まず、日本で 2～3 年間の就業経験を積んでから帰国するというキャリアプランを立てているケースが多いと考えられる。しかし、本研究の対象者は「今後の発展」「留学前からの計画」「家族のこと」など、日本での就業経験よりも、もっとその先にある中国に帰国した際のことを視野に入れて自己分析を行い、留学終了後の就職先として中国を選んでいることがわかった。

3.2　就職活動の際に大学側に求める支援（研究課題 2）

対象者に「中国で就職活動を行う際に、大学側からどのようなサポートがあるといいと思いますか」と問いかけ、就職活動の際に大学側に求める支援について分析した。その結

果、就職活動の際に大学側に求める支援として 12 件得られた（表 3）。

具体的には、中カテゴリー［情報提供・就職活動講座］6 件、［日本での中国現地採用・説明会］4 件、単独コード《中国に帰国して就職活動に参加するための長期休暇》《中国と日本の専門分野の名称の違いについての確認》が得られた。ここでは、各カテゴリーについて対象者の語りを引用しながら具体的な内容について述べる。

表 3　大学側に求める支援

大学（12）		
情報提供・就職活動講座		**6**
国内での就職のための講座		1
中国の就職情報のセミナーの開催		1
掲示板に（中国国内の）就職情報の掲示		1
中国国内の就職の動向に関する情報の提供		1
中国国内の企業の採用時期に関する情報の提供		1
履歴書の書き方についての指導		1
日本での中国現地採用・説明会		**4**
日本の大学で中国現地採用の実施		1
日本の大学で中国現地採用の就職説明会の開催		1
中国の日系企業にの説明会		1
オンライン面接		1
	中国に帰国して就職活動に参加するための長期休暇	1
	中国と日本の専門分野の名称の違いについての確認	1

まず、［情報提供・就職活動講座］について、対象者は次のように語っている。「学校レベルだと、（大学の）掲示板に中国の就職情報を掲示したり、セミナーを提供したりできると思います」。次に、［日本での中国現地採用・説明会］については、「～～～日系企業が日本の大学に行って、中国現地採用の就職説明会を行うことが大事だと思います。大学で中国国内の採用に関するガイダンスや説明会を行い、直接人材を選ぶといいと思います」と述べている。単独コード《中国に帰国して就職活動に参加するための長期休暇》については、「～～～帰国して就職する場合は、みんな自分で自分のことを頑張っている気がします。就職の時期も違うので、もし、日本留学中に長期休みがあれば、中国で集中して就職することができます。」と語っている。また、《中国と日本の専門分野の名称の違いについての確認》では、「～～～中国と日本は専門分野の名称が違います。中国には教育部で指定した決まったコードがありますが、その名称と日本の名称が異なることもあります。公務員だったり、国有企業の場合は、専門分野の名称が違うと就職しにくいです」と語っており、中国で就職する場合は専門分野の名称の確認が必要であることを指摘している。

このように、就職先を中国に選んだ場合、対象者は特に、中国における就職に関連する情報の提供を求めていることがわかった。また、日本国内で中国現地採用のための説明会を開いたり、各企業が直接日本の大学に訪れ中国現地採用を実施することを望んでおり、日本の大学に在籍しながら中国に一時帰国して就職活動に参加するための長期休暇を必要とする様子が窺えた。さらに、大学の専門分野の名称について、中国と日本が異なる可能性があり、名称が異なる場合は中国での就職が厳しくなるため、専門分野の名称の確認を求めていることがわかった。

3.3　大学で学ぶべき知識と身につけるべきスキル（研究課題 3）

対象者に「大学でどのような知識を学び、スキルを身につけたら、現在の職務に役にたつと思いますか」と問いかけ、現在の職務に役に立つと思う、大学時代に学ぶべき知識と

身につけるべきスキルについて分析した。その結果、学ぶべき知識や身につけるべきスキルとして 7 件得られた（表 4）。

表 4　知識・スキル

知識・スキル (7)	
専門分野の資格	**3**
日本の資格	2
日商簿記などの資格	1
人間関係	**2**
コミュニケーションスキル	1
人間関係についてのトレーニング	1
仕事内容に関連する専門分野の知識	1
英語	1

具体的には、中カテゴリー［専門分野の資格］3 件、［人間関係］2 件、単独コード《仕事内容に関連する専門分野の知識》《英語》が得られた。ここでは、各カテゴリーについて対象者の語りを引用しながら具体的な内容について詳しく述べる。

中カテゴリー［専門分野の資格］について、対象者は次のように語っている。「日商簿記とか会計とか、これらの資格があると、日本では給料がプラスになるし、中国でも仕事を探すときに結構役に立ちます」。また、［人間関係］については、「中国で仕事をする際にも人間関係が大事です。～～～コミュニケーションスキルを身につける必要があります」と語っている。単独コード《仕事内容に関連する専門分野の知識》については、「今の仕事をする上で、基礎的な知識がなく仕事にすぐ取り組めなかったので、もし、自分が中国で進みたい道がわかる場合は、それに関する専門知識を幅広く大学で学ぶといいと思います」と述べている。さらに、《英語》については、「～～～（仕事をする上で）英語も大事です」と述べている。

このように、対象者は大学時代に専門分野の資格を取得することや、中国の職場で働くための人間関係を構築するようなトレーニングを受けることが現在の職務に役に立ち、また、職場にスムーズに適応すると認識していることがわかった。対象者の滞日期間は 3 年～6 年と概ね長いため、ある程度日本の生活や環境に慣れており、中国に帰って仕事をする上で、中国人と交流するために新たにコミュニケーションスキルを身につける必要性を感じている様子が窺えた。

４．まとめと考察

本研究では、中国人元留学生を対象に、中国に帰国して就職活動を行う際に、自分自身に対する分析や大学側に求めている支援、及び現在の職務に役に立つと捉えている、大学時代に学ぶべき知識と身につけるべきスキルについて検討した。中国人元留学生は、大学や大学院を卒業・修了後の就職活動として、まず、自己分析を行い、就職先を日本か中国に決めていると言える。その際に、［日中の職場の相違点］や［将来設計］、［仕事に対する要望］を総合的に考え、就職先を選択することがわかった。遠藤・王（1998）では、多くの中国人元留学生は「環境に適応できない」ことを帰国の理由に挙げているとしている。また、徐・阿部（2012）においても、残業の常態化や子どもの教育問題、親の扶養問題などが中国人元留学生の日本での長期的な就職を阻んでいるとしている。本研究における中国人元留学生は、特に、将来の長期的な生活や自分自身が望んでいる仕事の内容について熟慮した上で、就職先を中国に決めている様子が窺えた。

次に、就職活動の際に大学側に求める支援については、日本の大学に在籍していながら、中国国内の就職活動に参加することは難しいと考えられ、大学側に中国の就職に関する［情報提供・就職活動講座］を望んでいることがわかった。また、［日本での中国現地採用・説明会］を開くなどのサポートを必要とし、日本での学業と中国での就職活動、両方がスムーズに行われるような大学側の支援が望まれる。さらに、日本にいながら中国での就職活動を行うことは厳しいと感じるため、《中国に帰国して就職活動に参加するための長期休暇》を必要とする様子も見られた。加えて、日本で取得した卒業・修了学位の名称が中国の教育部でリストアップしている専門分野の名称と異なる場合があり、専門分野の名称が異なると特に中国の国有企業への就職が厳しくなるため、大学側が卒業証明書や修了証明書の名称の書き方を確認する必要があると捉えていることが明らかになった。黄（2021b）では、日本で留学を終え日本の企業に就職した元留学生社員を対象に、就職活動の際に大学側に求める支援について調査を行い、対象者は「企業についての知識」、「大学と企業の連携」を望んでいるとしている。つまり、中国人元留学生の就職先が日本か中国かによって、大学側に求めている支援の内容が異なることが浮き彫りになった。

最後に、現在の職務に役に立つと考える、大学時代に学ぶべき知識や身につけるべきスキルとして［専門分野の資格］、［人間関係］、《仕事に関する専門分野の知識》、《英語》が重要だと捉えていることがわかった。特に、大学学部を卒業して就職する場合は、必ずしも専門分野が活かせる仕事につくとは限らず、「中国で進みたい道がわかる場合は、それに関する専門知識を幅広く大学で学ぶといいです」と語っている。また、対象者は中国と日本の採用条件の違いについても語っており、中国の場合、より専門性を重視していると述べている。黄（2021b）では、日本で留学を終え日本の企業に就職した元留学生社員を対象に、現在の職務に役に立つと考える知識とスキルについて検討しており、対象者は「日本語」、「日本の文化・習慣についての理解」が大事であると捉えていることを明らかにしている。しかし、本研究の対象者のように、中国で就職した場合、職場の環境によっては日本の文化や習慣についての理解、日本語力についてはあまり重要視しない傾向があることがわかった。

中国人元留学生の就職活動について、日本で就職する際に直面する困難や就職活動へのサポートに関する調査・研究は数多い。しかし、中国人元留学生が日本で学業を終え、中国で就職活動を行う際に、なぜ就職先を中国に決めたのか、中国で就職活動を行う際に大学側にどのような支援を求めているのかなどについて、詳細に検討した研究はまだ数少ない。本研究では、中国人元留学生が中国で就職活動を行う理由や就職活動に際して大学側に求めている支援、また、現在の職務に役に立つと考える、大学時代に学ぶべき知識や身につけるべきスキルについて明らかにしたことに意義がある。特に、中国人元留学生が中国で就職する際に大学側に望んでいる支援やサポートに関しては、日本の大学が留学生の就職活動を支援する際に参考すべきデータとなり得ると考える。

５．今後の課題

本研究は対象者が４名と少ないため、本研究の結果を中国人元留学生全体に一般化できない。今後は、量的調査などを通して中国人元留学生の就職活動について詳細に検討したい。また、大学側が留学生の就職活動について実際に行っている支援との比較検討を通して、留学生の希望との齟齬について明らかにしたい。

参考文献

阿部康久 ・徐亜文（2011）「日本留学者の帰国後の就業状況と留学経験への評価―中国人の大学院修了者を事例として―」『知の加工学事始め：受容し、加工し、発信する日本の知の技法』、171-191 頁。

遠藤誉・王震宇（1998）「留学生教育の改善と発展に関する研究―帰国中国人留学生の比較追跡調査による」『中国と東アジア』41、47-60 頁。

黄美蘭（2021a）「アルバイトの経験とキャリア意思決定および将来のキャリア志向―大学・大学院に在籍する中国人私費留学生を対象に―」『日本語研究』41、1-14 頁。

黄美蘭（2021b）「日本留学経験が現在の職務に与える影響」『異文化間教育学会第 42 回大会発表抄録集』、86-87 頁。

出入国在留管理庁（2021）「令和２年における留学生の日本企業等への就職状況について」https://www.moj.go.jp/isa/content/001358473.pdf〈2022 年 9 月 31 日アクセス〉

徐亜文・阿部康久（2012）「日本留学経験が就職活動とキャリア形成に与える効果に関する研究」『九州大学留学生センター紀要』20、67-83 頁。

竇碩華 ・佐藤由利子（2017）「中国人元日本留学生の進路選択の影響要因と職場環境・生活環境に関する研究―理工系と文系の比較、主な職場別の分析から」『移民政策研究』(9) 、89-105 頁。

内閣官房日本経済再生総合事務局 （2016）「日本再興戦略改訂」https://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/pdf/2016_zentaihombun.pdf〈2022 年 9 月 31 日アクセス〉

守屋貴司（2020）「高度外国人材が活躍する会社の条件―求められるキャリアアップ＋昇給基準の明確化―」『りそなーれ』18(9)、11-14 頁。

付記

本研究は JSPS 科研費 JP20K13080 の助成を受けたものである。

Job Hunting for Chinese Former International Students: The Case of Employment in China

HUANG, Meilan

Abstract

In this study, former international Chinese students who have completed their studies in Japan and are now working for companies in China were asked to indentify the following three points: 1) their self-analysis when they decided to work in China, 2) the support they seek from their universities when job hunting in China, and 3) the knowledge and skills they should have acquired during their university years that they consider useful in their current jobs. As a result, the following self-analysis was obtained: [Differences between Japanese and Chinese workplaces], [Future plans], [Requests for the job], and [Lack of understanding about job hunting]. It was found that Chinese former international students decided on China as their place of employment after comprehensively considering the differences between the Japanese and Chinese work environments, family matters, and future development potential. Next, as support sought from their universities, the following were obtained: [Provision of information and job hunting courses], [China local recruitment and information sessions in Japan], [Extended leave to return to China to participate in job hunting], and [Confirmation of differences in nomenclature of specialties between China and Japan]. It was found that it is difficult to find a job in China while continuing one's studies in Japan, and that they especially want information related to finding a job in China, and for each company to visit Japanese universities directly to conduct local hiring in China. Finally, the knowledge and skills perceived to be useful in their current job were [Spacialty qualifications], [Human relations], [Knowledge of areas of expertise relevant to the job description], and [English]. In particular, the respondents who work for Japanese companies in China recognize that having various Japanese qualifications will lead to better evaluations and higher salaries within the company.

Keywords : Study in Japan, Former Chinese students, Self-assessment, Job hunting assistance, Knowledge and skills

学会役員

＜顧問＞

山泉進（明治大学・名誉教授）
李漢燮（高麗大学・名誉教授）

＜会長・理事＞

金龍哲（東京福祉大学・教授）

＜副会長・理事＞

安達義弘（日韓言語文化交流センター・副代表）
李東哲（山東外事職業大学・教授）
権寧俊（新潟県立大学・教授）
崔光准（新羅大学・教授）
杉村泰（名古屋大学・教授）
鄭亨奎（日本大学・特任教授）
李東軍（蘇州大学・教授）

＜常任理事＞

岩野卓司（明治大学・教授）
崔粛京（富士大学・教授）
李慶国（追手門学院大学・教授）
金珽実（商丘師範学院・副教授）
金光林（新潟産業大学・教授）

＜一般理事＞

阿莉塔（浙江大学・副教授）
安勇花（延辺大学、副教授）
白暁光（西安外国語大学・副教授）
宮脇弘幸（大連外国語大学・客員教授）
李光赫（大連理工大学・副教授）
娜荷芽（内蒙古大学・教授）
任星（厦門大学・副教授）
施晖（蘇州大学・教授）
王宗傑（浙江越秀外国語大学・教授）
徐瑛（延辺大学・副教授）
朴銀姫（延辺大学・教授）
中川良雄（京都外国語大学・特任教授）
堀江薫（新潟県立大学・名誉教授）
飯嶋美知子（北海道情報大学・准教授）
李昌玟（韓国外国語大学校・教授）
宮崎聖子（福岡女子大学・教授）
熊木勉（天理大学・教授）
伊月知子（愛媛大学・准教授）
張韶岩（中国海洋大学・教授）
崔玉花（延辺大学、副教授）
李東輝（大連外国語大学・教授）
薛鳴（愛知大学・教授）
李先瑞（寧波理工大学・教授）
仲矢信介（東京国際大学・准教授）
加藤三保子（豊橋技術科学大学・特任教授）

＜事務局＞

事務局長

金珽実（商丘師範学院・副教授）

副事務局長

力丸美和（九州大学・助教）

学会動向

◆「第五回東アジア日本学研究国際シンポジウム」の日時と場所確定

「第五回東アジア日本学研究国際シンポジウム」は、学会理事会の審議を経て 2023 年 9 月 23 日(土)に韓国日本語学会との共催で韓国の東国大学(ソウル)でオフラインで開催することが決まりました(但し、コロナで渡航が難しい場合を考慮に入れ、オンライン発表も可にしました)。シンポジウムのメインテーマは「韓中日の日本研究の現状と展望」です。

◆シンポジウムの共同開催準備委員会発足

本学会「第五回東アジア日本学学研究国際シンポジウム」と韓国日本語学会「第 48 回国際学術大会」の共同開催を円滑に行うために、金龍哲会長の提案により、両学会共同準備委員会を設置することが合意され、初回の打ち合わせが 1 月 30 日オンラインで行われました。共同準備委員会の本学会の委員として、理事会の推薦を受けて李東哲(副会長)と力丸美和(副事務局長)が選ばれました。

◆学会誌第 10 号への投稿募集

2023 年 9 月発行予定の『東アジア日本学研究』第 10 号への投稿を募集中です。会員の皆様の積極的な投稿を期待します。締め切りは 4 月 1 日（土）の北京時間 24：00 です。

東アジア日本学研究学会副会長

李東哲

会員消息

◆新入会員（９名）

庄婕淳（恵州学院、講師）、黎斯羽（武漢理工大学、院生）、福田翔（富山大学、准教授）、張申童（名古屋大学、院生）、高小超（明治学院大学、院生）、宗聡（蘇州大学、講師）、何思莹（名古屋大学、院生）、山元庸子（九州大学、院生）、辻本桜子（愛知淑徳大学、講師）

◆会員の所属・職位変更

徐義紅　大連交通大学 講師 → 副教授

徐瑛　　浙江越秀外国語学院 副教授 → 延辺大学 副教授

◆学位取得

王雲姣（名古屋大学、博士（文学）、2022 年 3 月 27 日）

『現代日本語における心理動詞の研究』

権裕羅（名古屋大学、博士（文学）、2022 年 3 月 27 日）

『現代日本語の形容詞の分類 ―における振る舞いを基準にして―』

◆書籍出版

李東哲著『中国語母語話者の日本語の誤用研究』環球出版社、2022 年 12 月

金珽実・池孝民訳、松原孝俊監修『「満洲国」時期朝鮮開拓民研究』花書院、2023 年 2 月

※上記の情報は 2022 年 10 月 1 以降、2023 年 3 月 31 日までの変動事項です。

東アジア日本学研究学会副会長

李東哲

東アジア日本学研究学会会則

＜名称＞

第１条　本会は、東アジア日本学研究学会(The Society of Japanese Studies in East Asia)と称する。

＜目的＞

第２条　本会は、東アジア地域における日本学の学際的研究をとおして、また、それぞれの研究者が研究成果を発表し交換し合うことをとおして、学問の進歩及び当該地域の平和的発展に寄与することを目的とする。

＜事業＞

第３条　本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

１．東アジア地域における日本学を中心とした学際的研究・調査

２．学会、研究会、講演会及びシンポジウムの開催

（学会における共通言語は、原則として日本語とする）

３．機関誌及び図書等の刊行

４．内外の学術団体、研究者との連絡及び学術上の交流

５．その他本会の目的を達成するために必要と認められる事業

＜会員＞

第４条　本会の会員は、個人会員、賛助会員とする。

１．個人会員は、東アジア地域の研究に関心を持ち、かつ本会の目的に賛同する個人

２．賛助会員は、本会の目的に賛同し、本会の事業に協力する法人・団体または個人

第５条　本会には、名誉会員および顧問をおくことができる。名誉会員および顧問は、理事会が推薦し、会員総会の承認を受ける。

＜入会・退会＞

第６条　本会に入会を希望する者は、理事会に申請し、その承認を得るものとする。

ただし、大学院生は、指導教員の推薦を得ることとする。

第７条　本会を退会しようとする者は､退会を事務局に通告すれば退会することができる。

会費を２年間滞納した者は、理事会において承認のうえ、退会とみなす。

＜会費＞

第８条　会員の会費は、次のように定める。

一般会員　　5,000　円
学　　生　　3,000　円
賛助会員　　50,000（1 口）　円

＜役員＞
第 9 条　本会に次の役員をおく。
１．会長　　１名
２．副会長　　若干名
３．理事　　30 名以内（理事のうち若干名を常任理事とする）
４．事務局長　　1 名
５．会計監事　　2 名
６．その他理事会が必要と認めた役員
第 10 条　役員の任期は、就任から 2 年とする。ただし、再任は妨げない。

＜役員の職務＞
第 11 条　本会の役員の職務は次のとおりとする。
１．会長は、本会を代表し、会務を統括する。
２．副会長は、会長を補佐し、会長に不都合が生じた時はこれを代理する。
３．理事は、理事会を組織し、会務を審議執行する。理事会の議事は、出席者の過半数により決定する。
４．事務局長は、会長の指示に基づいて、事務を執り行う。
５．会計監事は、会計を監査する。

＜役員の選出＞
第 12 条　役員の選出は次のとおりとする。
１．会長は、会員総会において選出する。
２．副会長・理事は会長が任命する。
３．会計監事は、会員総会において選出する。
４．その他の役員は、理事会が委嘱する。

＜学会誌編集委員会＞
第 13 条　本会は、理事会のもとに学会誌編集委員会をおく。
１．学会誌編集委員会は、学会誌の出版計画を立案し、これを理事会に提案する。
２．委員は、個人会員の中から理事会が推薦し、会長が任命する。
３．委員の任期は、就任から 2 年とする。ただし、再任は妨げない。

４．学会誌編集委員会に委員長を置き、委員の中から互選する。
５．委員長は、学会誌編集委員会の事務を掌理する。

＜会員総会＞
第 14 条　本会は、毎年 1 回会員総会を開催する。
第 15 条　会員総会では、次の事項を審議決定する。
１．事業報告及び決算
２．事業計画及び予算
３．会長及び会計監事の選出
４．会則の変更
５．その他の必要な事項
第 16 条　臨時会員総会は、理事会が必要と認めたとき、または会員の 2 分の 1 以上の要望があるときに開催する。
第 17 条　会員総会の議決は、出席会員の過半数をもって決する。

＜会計＞
第 18 条　本会の運営は、会費及びその他の収入で賄う。
１．本会の会計年度は、毎年 4 月 1 日に始まり、3 月 31 日に終わる。
２．本会の決算は、会計監事の監査を受けなければならない。

＜雑則＞
第 19 条 本会の所在地は、〒818-0125 福岡県太宰府市五条 2 丁目 8-8-205 とする。

＜付則＞
１．本会の設立は、2018 年 9 月 1 日とする。
２．本会則は、2018 年 9 月 1 日から実施する。
３．本会の運営に必要な事項は理事会が定める。

『東アジア日本学研究』投稿要領

1)『東アジア日本学研究』は、東アジアにおける日本学研究に関する論文・研究ノート・書評などにより構成される。

2) 1年に2号（春季号・秋季号）の刊行を原則とする。

・春季号はシンポジウムの論文集とする。毎号シンポジウム終了後3週間以内を目安にその都度締め切りを設ける。

・秋季号はシンポジウムの発表以外の内容も含む学術論文集とする。投稿期間は毎号3月1日から4月1日までとする。

（例：2020年度年会費分の春季号は翌2021年3月、秋季号は翌2021年9月に発行予定）

3) 『東アジア日本学研究』に投稿できるのは以下の者および編集委員会で承認した者とする。

・春季号

筆頭著者：会員およびシンポジウムで発表した非会員

共著者：上記の者のほか、シンポジウムで発表していない非会員も可

・秋季号

筆頭著者：会員のみ

共著者：会員のほか、非会員も可

4) 投稿者が会員の場合、投稿する当該年度までの会費を投稿前に全て納入しなければならない。投稿者が非会員の場合は、投稿料として会員の年会費相当額を、投稿本数分事務局に納入することとする。（いずれの場合も、筆頭著者だけでなく共著者も同様とする。）

5) 投稿者が学生会員の場合は、投稿時に投稿原稿、投稿票とともに、指導教員等による投稿承諾書（100字以内で様式は任意。指導教員等の署名または捺印が必須）を提出しなければならない。ただし、編集委員会が投稿を依頼した者については、これを適用しない

6) 投稿原稿は未発表のものでなければならない。投稿者は投稿原稿の不採用が決定される前に当該原稿を他の場所で公刊してはならない。

7) 本誌の春季号と秋季号は両方同時に投稿することができる。ただし、両者の内容は異なるものとすること。また、一人が一回に投稿できる本数は以下の通りとする。

・筆頭著者２本以上…不可

・筆頭著者１本のみ…可

・筆頭著者１本、第二著者以下１本…可

・筆頭著者１本、第二著者以下２本以上…不可

・筆頭著者０本、第二著者以下２本まで…可

・筆頭著者０本、第二著者以下３本以上…不可

8)『東アジア日本学研究』に掲載された全ての原稿の著作権は東アジア日本学研究学会に帰

属する。

9）原著者が『東アジア日本学研究』に掲載された文章の全部または大部にわたって複製利用しようとする場合には、事前に編集委員長に申請しなければならない。編集委員会は特段の不都合がない限りはこれを受理し、複製利用を許可する。

10）『東アジア日本学研究』に掲載された全ての原稿は、東アジア日本学研究学会のホームページにおいてPDFファイルにて公開する。

11）投稿者は、東アジア日本学研究学会ホームページに掲載の「執筆要領」の内容を踏まえ、これに準拠した完成原稿と投稿票を提出する。投稿票は別添の所定の様式で提出すること。

12）「完成原稿と論文要旨」「投稿票」「投稿承諾書」は、E-mail の添付ファイルとして送付する。ファイル形式は原則として MS-Word とする。ファイル名はそれぞれ次のようにすること。

	ファイル名	例
完成原稿と論文要旨	1. 論文・要旨（氏名）	1. 論文・要旨（山田太郎）
投稿票	2. 投稿票（氏名）	2. 投稿票（山田太郎）
投稿承諾書	3. 投稿承諾書（氏名）	3. 投稿承諾書（山田太郎）

採用が決定された原稿の提出方法は編集委員会から再度通知する。

13）投稿された原稿は、査読者2名による審査結果をもとに、編集委員会が採否を決定する。

14）採用された場合、投稿者は英文要旨を提出する。英文要旨は、提出前に必ずネイティブチェックを受けること。

15）原稿の投稿先および問い合わせ先は次のとおりとする。

東アジア日本学研究学会事務局　E-mail: eaja20172@163.com

2018 年 9 月 30 日　制定
2019 年 9 月 20 日　改正
2021 年 4 月 20 日　改正
2023 年 1 月 20 日　改正

※投稿の際は以下の部分を切り取り、原稿に添えて送ってください。

投　稿　票

投稿日：20　年　月　日

氏名		
所属・職位	（例）〇〇大学・助手、講師、副教授、教授、大学院生	
メールアドレス		
電話番号		
論文タイトル		
種類（該当を残す）	春季号　/　秋季号	論文・研究ノート・書評
分野（該当を残す。複数回答可）	1.語学・言語教育　2.文学　3.文化　4.歴史 5.哲学・思想　6.経済　7.政治　8.その他	
連絡事項 事務局または編集委員会に連絡したいことがあれば書いてください。特になければ記載不要です。		

『東アジア日本学研究』執筆要領

1）利用言語

原稿は日本語を使用し、横書きで作成する。

2）原稿枚数

原稿の枚数は40 字×35 行を1 枚と換算して、春季号論文は5～7枚（注・図表・参考文献を含む）、秋季号論文は10～15枚（注・図表・参考文献を含む）とする。

3）見出し番号の表記

本文内の各節章の見出しにつける番号はⅠ、Ⅱ、Ⅲ…とし、その下の款項には1.、2.、3.…を用いる。さらにその下の項には（1）、（2）、（3）…を用いる。最初に「はじめに」、最後に「おわりに」を置いてもよい（番号は付けない）。

4）句読点の表記

句読点は全角の「、」「。」を用いる。

5）括弧の表記

括弧は原則として全角とする（欧語表記および注記を示す記号に用いる片括弧を除く）。

6）数字の表記

数字は、熟語など特別な場合を除き半角のアラビア数字を用いる。4 桁表記以上となる場合は、コンマ(,)を用いる。また、「兆、億、万」 などの漢数字を用いてもよい。

7）年号の表記

年号は原則として西暦を用いる。必要に応じて、西暦の後に元号などを丸括弧に入れて併用してもよい。

8）度量衡の単位は、原則として記号（m kg など）を用いる。

9）図や表には番号とタイトルを記入する。

10）注は以下のように該当部分の右肩に入れ、論文末にまとめて並べる。

～と考える[1)]。

11）参考文献の表記

本文と注記で用いた全ての文献を「参考文献」として本文の最後に一括して表示する。参考文献の表記は以下のとおりとする。

（日中韓語の書籍）編著者名（発行年）『書名--副題』出版社。（MS 明朝 9P）

（日中韓語の雑誌論文）著者名（発行年）「論文名--副題」『雑誌名』巻数(号数)、○-○頁。

（日中韓語の書籍中の論文）著者名（発行年）「論文名--副題」（編者名『書名--副題』出版社)、○-○頁。

（日中韓訳書）編著者名（発行年）『書名--副題』（訳者名、原著は○年発行）出版社。

（欧文の書籍）編著者名（発行年）書名：副題，発行地:出版社.

（欧文の雑誌論文）著者名（発行年）“論文名：副題,”雑誌名,巻数(号数)，pp.○-○.

（欧文の書籍中の論文）著者名（発行年）“論文名：副題,” 編者名 ed.，書名：副題，発行地:出版社，pp.○-○.

『東アジア日本学研究』査読要領

【査読スケジュール】

・投稿締切日

（春季号）シンポジウム終了後 3 週間以内とする。

（秋季号）毎号 4 月 1 日（北京時間 24：00）とする。

・投稿先：東アジア日本学研究学会事務局　E-mail: eaja2017@163.com

・査読の流れ

（春季号）査読は 2 回までとする。

（2 回目の総合評価が「再査読」の場合は結果的に「不採用」となる。）

投稿	→	受付	→	査読依頼	→	査　読	→	取りまとめ・結果通知	→		
修正		→		査読依頼	→	再査読	→	取りまとめ・結果通知	→	最終投稿	
執筆者		事務局		編集委員会		査読者		編集委員会		執筆者	

（秋季号）査読は 3 回までとする。

（3 回目の総合評価が「再査読」の場合は結果的に「不採用」となる。）

投稿	→	受付	→	査読依頼	→	査　読	→	取りまとめ・結果通知	→		
修正		→		査読依頼	→	再査読	→	取りまとめ・結果通知	→		
修正		→		査読依頼	→	再査読	→	取りまとめ・結果通知	→	最終投稿	
執筆者		事務局		編集委員会		査読者		編集委員会		執筆者	

【査読者の構成】

1）　論文 1 編について 2 名の査読者が査読する。

2）　査読者は編集委員会によって原則として会員の中から選任する。会員の中に適任者がいない場合は外部審査員を依頼することができる。審査料は全て無料とする。

3）　春季号の場合は、自己の投稿論文でなければ査読可能とする。秋季号の場合は、投稿者は当該号の査読は行わないこととする。

【査読】

4）　査読は投稿者・査読者間、査読者間ともに匿名で行うこととする。

5）　判定は、「採用」「条件採用」「再投稿」「不採用」の 4 段階とする。

・「採用」は誤植程度の修正しか必要でない場合とする。

・「条件採用」は査読者から指摘された問題が 1 週間程度で修正でき、当該号での採用が見込める場合とする。

・「再投稿」は査読者から指摘された問題が 2 週間程度で修正でき、当該号での採用が見込める場合とする。

・「不採用」は当該号での採用のレベルに達していない場合とする。

6）　査読者は所定の「査読票」に査読結果とコメントを記入する。

7）　論文の中に投稿者が特定される情報が書かれていることが査読の過程で明らかになった場合でも、原則として査読を継続する。但し、投稿者と査読者が指導教員と指導生の関係、同じ機関に属する等の場合には、査読者の交代を行う。

8）　査読にあたり二重投稿等の疑義等が生じた場合、投稿者宛てコメントには記載せず、編集委員会宛てコメントに記載する。

【査読結果のとりまとめ】

9）　査読者は「査読票」を編集委員長に送付する。

10）編集委員会では、以下の総合判定ガイドラインに基づいて採否を決める。基本的にこれを順守するが、このガイドラインに従わない方がよいと判断される場合には、編集委員会で審議する。

＜総合判定ガイドライン＞

（◎採用、○条件採用、△再投稿、×不採用）

採用　　：◎◎（6 点）

条件採用：◎○（5 点）、○○、◎△（4 点）

再投稿　：◎×、○△（3 点）、○×、△△（2 点）、△×（1 点）

不採用　：××（0 点）

11）総合判定の確定後、編集委員長は結果を事務局に送付する。

12）事務局は、総合判定結果と査読者のコメントを投稿者に送付する。

【再投稿・最終投稿】

13）「採用」の場合は、微修正の確認を編集委員会で行う。

14）「条件採用」と「再投稿」の場合は、初回の 2 名の査読者で再度査読する。

15）春季号の査読は 2 回まで、秋季号の査読は 3 回までとし、査読結果に基づいて編集委員会で最終判定を行う。

16）編集委員会は最終判定結果を事務局に送付し、それを事務局から投稿者に送付する。

【その他】

17）「不採用」に関する投稿者からの反論には原則として応じない。

18）校正は字句等の修正のみ認める。問題が生じた場合には編集委員長が確認する。

編集後記

編集委員長　杉村泰（名古屋大学教授）

本号には 18 本の投稿がありました。各論文とも 2 名の査読者による審査が行われ、採用 11 本、不採用 3 本、辞退 1 本、不受理 3 本という結果となりました。また、昨年 9 月 11 日に開催したシンポジウムの基調講演者による寄稿論文を 3 本掲載しました。

副編集委員長　加藤三保子（豊橋技術科学大学特任教授）

今回は参考文献について一言。論文執筆の際、どうしても本文を仕上げるのに「全集中」しがちですが、自説の論拠となる文献等を参考文献で示すことは論文の信頼性に関わります。本文や注などに係る文献については、執筆要領にしたがって漏れなく記述してください。

編集委員　加藤恵梨（愛知教育大学准教授）

本号から編集委員を担当させていただくことになりました。どうぞよろしくお願いいたします。本号の投稿論文には新しい知見を得られるものが多く、査読を通して大変勉強になりました。貴重な論文を投稿してくださった皆さまに感謝申し上げます。

編集委員　金光林（新潟産業大学教授）

今回の第9号の投稿論文の査読を通してまたいい勉強をさせていただきました。多様な主題の論文が本学会誌に発表されるようになり、日本語を母語としない研究者たちの論文も多くなっているので、投稿する際に文章表現に対する工夫がさらに求められています。

編集委員　吉川佳英子（愛知工業大学教授）

毎回新たな論文が届くとドキドキします。時代の推移を映し出した斬新な内容のものが多いようです。力作ぞろいですから、これらを読むのは楽しい限り。時間をかけてじっくり読みます。本学会ならではのスケールの大きな論文に出くわすこともしばしばで、たいそう勉強になります。

編集委員　李東軍（蘇州大学教授）

投稿論文の査読を担当させていただき、多様な主題やアプローチを取った皆様の寄稿を読んで、本当に勉強になりました。今年は、私達を苦しめたコロナ禍がやっと終息したようで、当学会の新たな発展のために、ぜひ皆様が奮って投稿するようにお願いします。

事務局（学会誌担当）　力丸美和（九州大学助教）

本号より学会誌を担当させていただくことになりました。日本、中国、韓国の皆様のご投稿を受け取るたびに、「東アジア」にふさわしい論文の数々に深い感銘を受けました。2023 年 9 月の韓国日本語教育学会との共同開催も事務局を担当します。皆様ぜひご参加ください。

〔本号の査読者〕（50 音順）

安達義弘（日韓言語文化交流センター副代表）、安勇花（延辺大学副教授）、加藤恵梨（愛知教育大学准教授）、加藤三保子（豊橋技術科学大学特任教授）、金光林（新潟産業大学教授）、金珽実（商丘師範学院副教授／九州大学留学生センター訪問研究員）、陳秀茵（東洋大学講師）、中川良雄（京都外国語大学特任教授）、任星（厦門大学副教授）、白暁光（西安外国語大学副教授）、吉川佳英子（愛知工業大学教授）、李東軍（蘇州大学教授）

東アジア日本学研究　第 9 号
Japanese Studies in East Asia　No.9

2023 年 3 月 20 日発行
東アジア日本学研究学会
The Society of Japanese Studies in East Asia

学会事務局　E-mail: eaja2017@163.com（一般）
eaja20172@163.com（学会誌専用）
住所：〒372-0831　群馬県伊勢崎市山王町 2020-1
東京福祉大学教育学部内
ホームページ　https://www.east-asia.info/
ISSN 2434-513X